

西元浜貝塚2 内出1号墳

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第20集

倉敷埋蔵文化財センター

2024.3

序

倉敷市は岡山県の南部に位置し、北には吉備高原南端から続く丘陵地、南には瀬戸内海を望む豊かな自然環境と温暖な気候に恵まれた地域です。市の中央部に広がる平野は、沖積平野と近世以降に浅海を干拓した人工の陸地からなり、西寄りを高梁川が南流し瀬戸内海に注いでいます。市域の北西に位置する真備町地区では、高梁川水系の支流である小田川が東流して高梁川に合流します。この地区は、畿内と九州を結ぶ主要街道である古代山陽道が整備され、奈良時代の政治家・学者の吉備真備ゆかりの地として知られています。古墳時代には天狗山古墳、二万大塚古墳、箭田大塚古墳など有力古墳が築かれており、特色ある優れた古墳文化が展開しました。

本書は、倉敷市玉島黒崎に所在する西元浜貝塚と倉敷市真備町下二万に所在する内出1号墳を対象に保存を目的として行った確認調査の成果をまとめたものです。

西元浜貝塚の調査では、縄文時代の貝塚は既に破壊されていることがわかりました。今回の調査で出土した土器や石器は、かつて郷土の研究者がこの貝塚で採集し、倉敷市に寄贈された資料とともに縄文時代の語り部と言えるでしょう。当地域の歴史研究の発展に寄与するために大切に保管・収蔵していく所存です。

内出1号墳の調査では、葺石や埴輪の配置が明らかになり、須恵器などの出土資料から5世紀中葉から後半にかけての時期に築かれた方墳であることがわかりました。また、石室のつくりが勝負砂古墳、天狗山古墳と共に通することなどから、これらの被葬者との関係が深く、朝鮮半島の影響を受けたいわゆる渡来系の人物が葬られているのではないかとの見解もあります。今後もこの内出1号墳や周辺にある貴重な古墳を確実に保護し、後世に伝えていくことがわたしたちの重要な責務であります。

最後になりましたが、調査の承諾をいただいた地権者をはじめとする地元関係者の皆様に感謝を申し上げるとともに、現地調査や資料分析及び報告書の作成にあたりご指導を賜りました関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

令和6年3月31日

倉敷市教育委員会
教育長 仁科 康

例　言

- 1 本書は、倉敷市教育委員会が国庫補助を受けて令和3・4年度に実施した西元浜貝塚と、令和3～5年度にかけて実施した内出1号墳の範囲確認調査の報告書である。
- 2 各遺跡の調査内容は以下のとおりである。

【西元浜貝塚】

- ◎所在地 倉敷市玉島黒崎85番外
- ◎調査期間 令和3年10月19日～10月22日・令和4年10月18日～10月22日
- ◎担当者 倉敷埋蔵文化財センター館長 小野雅明 同主任 藤原好二

【内出1号墳】

- ◎所在地 倉敷市真備町下二万字内出771番1外
- ◎調査期間 令和3年10月26日～11月26日・令和4年10月25日～11月18日
令和5年5月16日～6月7日
- ◎担当者 倉敷埋蔵文化財センター主任 藤原好二 同学芸員 鍵谷守秀
(職名等はいずれも調査当時)

- 3 本書の執筆は、第1章を小野が、第2章を藤原・鍵谷が主に担当した。全体の編集は藤原が行った。報告書の作成にあたっては倉敷埋蔵文化財センター会計年度任用職員 内田智美、那須玲子、日下美樹の協力を得た。また、岡山理科大学の白石 純氏には玉稿をいただいた。
- 4 発掘調査における遺構の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は鍵谷が行った。
- 5 本書の挿図に使用した高度値は海拔高であり、方位はいずれも磁北である。
- 6 本書第2・13図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複製、加筆したものである。
- 7 本書に關係する出土遺物、実測図、写真等はすべて倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

序

第1章 西元浜貝塚	1
第1節 位置と環境	1
第2節 調査に至る経緯と経過	3
第3節 調査の組織	6
第4節 調査の概要	6
1 各トレンチの概要	6
2 出土遺物	9
第5節 まとめにかえて	12
出土遺物観察表	16
第2章 内出1号墳	20
第1節 位置と環境	20
第2節 調査に至る経緯と経過	23
第3節 調査の組織	27
第4節 調査の概要	28
1 調査区の概要	28
2 遺 物	40
第5節 まとめにかえて	51
出土遺物観察表	58
付編 内出1号墳出土遺物の胎土分析	62

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第20図 トレンチ3北壁断面図・ 平面図・立面図	34
第2図 周辺の遺跡	2	第21図 トレンチ6北壁断面図・ 平面図・立面図	35
第3図 トレンチ位置図	4	第22図 トレンチ7東壁断面図・ 平面図・立面図	37
第4図 トレンチ断面図1	7	第23図 トレンチ8東壁断面図	39
第5図 トレンチ断面図2	8	第24図 トレンチ9北壁断面図	39
第6図 西元浜貝塚出土の土器1	9	第25図 トレンチ10東壁断面図	39
第7図 西元浜貝塚出土の土器2	10	第26図 トレンチ10大型甕出土状況	40
第8図 西元浜貝塚出土の土器3	11	第27図 須恵器	41
第9図 石器	12	第28図 土師器	42
第10図 宗澤コレクション 西元浜貝塚出土の土器1	13	第29図 円筒埴輪1	43
第11図 宗澤コレクション 西元浜貝塚出土の土器2	14	第30図 円筒埴輪2	44
第12図 遺跡の位置	20	第31図 円筒埴輪3	45
第13図 周辺の遺跡	21	第32図 円筒埴輪4	46
第14図 トレンチ配置図	25	第33図 朝顔形埴輪	48
第15図 トレンチ4東壁断面図	29	第34図 形象埴輪1	49
第16図 トレンチ4竪穴式石槨平面図	29	第35図 形象埴輪2	50
第17図 トレンチ5東壁・南壁断面図	30	第36図 内出1号墳墳丘平面図	53
第18図 トレンチ1北壁断面図・ 平面図・立面図	32	第37図 墳丘の構造	54
第19図 トレンチ2東壁断面図・ 平面図・立面図	33		

図版目次

- | | | | |
|-------------------|---|--------------------|--|
| 図版1 西元浜貝塚(1) | 1 調査地全景(北から)
2 トレンチ1西壁断面
3 トレンチ2全景(北から) | 図版9 内出1号墳(3) | 1 トレンチ4東壁
2 トレンチ4堅穴式石櫛(南から)
3 トレンチ4堅穴式石櫛東小口 |
| 図版2 西元浜貝塚(2) | 1 トレンチ2西壁深掘断面
2 トレンチ3北壁深掘
3 トレンチ4北壁断面(東から) | 図版10 内出1号墳(4) | 1 トレンチ5北壁
2 トレンチ5乱掘孔
3 トレンチ6北壁(葺石付近) |
| 図版3 西元浜貝塚(3) | 1 トレンチ5北壁断面
2 トレンチ6北壁断面(南西から)
3 トレンチ7西壁断面(南から) | 図版11 内出1号墳(5) | 1 トレンチ6北壁(周溝付近)
2 トレンチ7葺石・埴輪検出状況
3 トレンチ7東壁(周溝付近) |
| 図版4 西元浜貝塚 出土遺物(1) | | 図版12 内出1号墳(6) | 1 トレンチ8全景(南西から)
2 トレンチ10大型甕出土状況
3 トレンチ10東壁(北半部) |
| 図版5 西元浜貝塚 出土遺物(2) | | 図版13 内出1号墳 出土遺物(1) | |
| 図版6 西元浜貝塚 出土遺物(3) | | 図版14 内出1号墳 出土遺物(2) | |
| 図版7 内出1号墳(1) | 1 調査前の全景(測量時・東から)
2 トレンチ1全景(南西から)
3 トレンチ2埴輪列・葺石検出状況 | 図版15 内出1号墳 出土遺物(3) | |
| 図版8 内出1号墳(2) | 1 トレンチ3葺石検出状況(東から)
2 トレンチ3北壁(埴輪列付近)
3 トレンチ3北壁(周溝付近) | 図版16 内出1号墳 出土遺物(4) | |

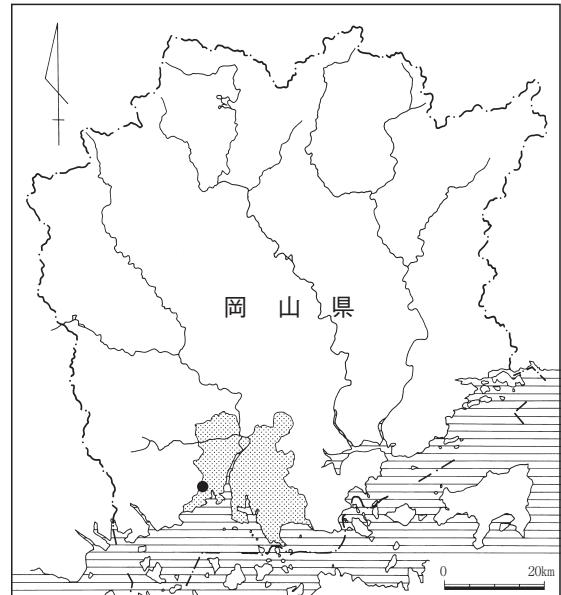
第1章 西元浜貝塚

第1節 位置と環境

西元浜貝塚は倉敷市玉島黒崎字横山、字氏内ほかに所在する縄文貝塚である。玉島黒崎は倉敷市の南西端に位置し、西は浅口市、南は瀬戸内海の水島灘を臨む。貝塚の西側背後にある丘陵は、浅口市金光町佐方の竜王山（標高231m）から延びる尾根の続きである。当時、この丘陵と柏島（中世以前はその名のとおり島であった）の間には水道が延び、海水が奥深く入り込んでいた。貝塚はその南北に細長い入り江に東面している。入り江を北に進むと、その先に広がる内海の沿岸部には阿原貝塚、岸本貝塚が存在し、島嶼部には島地貝塚がある。さらに北西に進むと、涼松貝塚、里木貝塚といった名だたる縄文貝塚が存在する。一方、同じ玉島黒崎で南約1kmには縄文後期中津式の標準遺跡として知られる中津貝塚が存在する。このあたりの旧沿岸部には海岸段丘の名残を思わせる地形が所々見られ、両貝塚は同じ入り江を見下ろす高台に営まれている。

旧石器時代の玉島地区には、瀬戸内海が誕生する以前の環境下にあり、柏島や乙島は丘陵地であったと考えられる。これらの尾根筋にはサヌカイトの散布がわずかに認められる地点がある。沙美海岸周辺の丘陵上には、小原南遺跡、諏訪神社遺跡、山王遺跡があり、サヌカイトの剥片などが採集されている。また、中津貝塚とその周辺および西元浜貝塚近くの山麓では旧石器時代の末から縄文時代草創期に属すると考えられる尖頭器が複数採集されている⁽¹⁾。中津貝塚の確認調査では、縄文時代草創期に該当する年代の泥炭層が確認され、植物が繁茂するような安定した地表面が遺跡周辺に形成されていたことが推測される⁽²⁾。

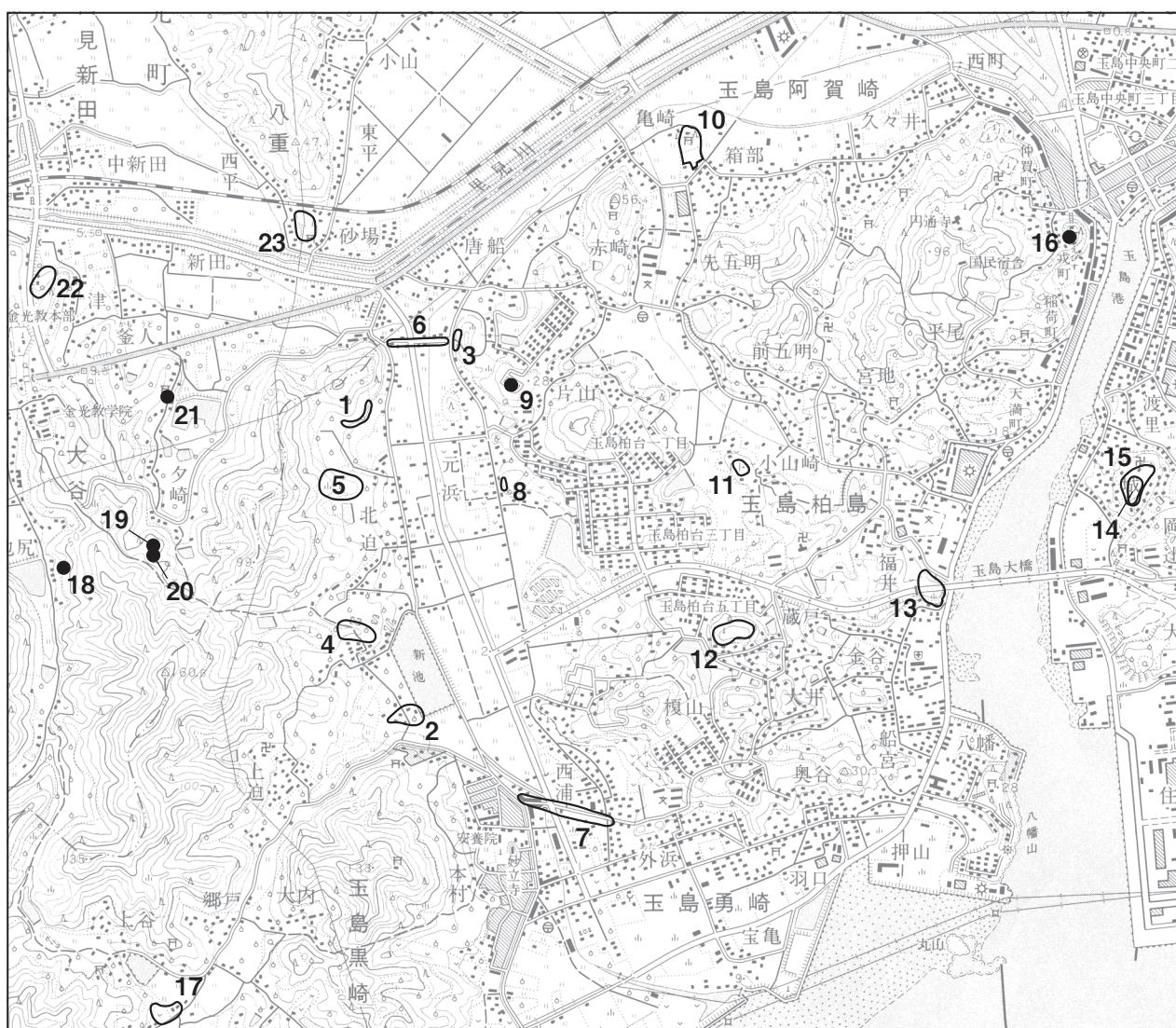
縄文海進の後、瀬戸内海が誕生すると柏島や乙島などは海中に浮かぶ島として存在し、西元浜貝塚東側の平野は先述のように内海につながる水道となった。河口部では、河川によって運ばれた土砂が堆積し、干潟が形成される。そこでは縄文人の食料にもなった貝類が生息し始め、浅海は漁場となる。こうして貝塚の時代を迎え、西元浜貝塚とその対岸にある東元浜貝塚、南側の中津貝塚や北方の内海沿岸にも先述した貝塚が形成された。今回報告する西元浜貝塚は縄文時代中期を中心とし、前期、後期の遺物も認められる。現状では、開墾によって破壊された貝層が露出し、その中に土器、石器類などの遺物が散見される。東元浜貝塚は縄文時代後期の貝塚として知られるが、果樹園の造成などにより既に消滅している。中津貝塚では、平成30年度から3年間にわたる確認調査で中津式の時期に形成された貝層や縄文時代晚期の土壙墓が確認され、貝塚と墓域の分布が明らかとなった⁽²⁾。



第1図 遺跡の位置

弥生時代の遺跡としては、縄文時代から引き続いて内海に浮かぶ島地貝塚で前期の土器が見つかっている。北部の丘陵地においては高地性集落が知られている。玉島富の標高80m前後の台地上にある平松遺跡では、弥生時代中期に属すると推定される銅鏡が発見された⁽³⁾。浅口市金光町との境界で、標高230m前後の尾根上にあるジョオゴナル遺跡は後期の集落遺跡とされる⁽⁴⁾。玉島道口の唐津池北遺跡は山陽自動車道建設工事に伴い調査され、弥生時代中期の竪穴式住居や建物跡が発見された⁽⁵⁾。玉島黒崎でも中津貝塚から南西に向かう谷筋を登って行くと、新殿遺跡、新殿向遺跡、奥山遺跡などの弥生時代の遺跡が確認されている。

古墳時代の遺跡としては、玉島八島の南面する山裾で、内海に突出した岬上に築かれた前期の天王山古墳が著名である。墳長45mの前方後円墳とされ、墳丘には円筒埴輪がめぐらされている⁽⁶⁾。こ



第2図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

- 1 西元浜貝塚 2 中津貝塚 3 東元浜貝塚 4 釜屋ノ上遺跡 5 氏内遺跡
 6 桜の堤 7 正保堤 8 東元浜南貝塚 9 東元浜古墳 10 亀崎城跡
 11 小山崎城跡 12 番山城跡 13 森本松山城跡 14 常照院貝塚 15 水島城跡
 16 住吉山公園石積 17 新殿遺跡 18 古墳 19 夕崎 1号墳 20 夕崎 2号墳
 21 荒神前の塚古墳 22 釜屋敷遺跡 23 八重遺跡

のほかの前半期の古墳としては、玉島黒崎の諏訪神社境内古墳や玉島道口の上郷古墳が知られており、いずれも箱式石棺を有する。古墳時代後期の横穴式石室をもつ周辺の古墳は、玉島柏島にある東元浜古墳、玉島黒崎の沙美西の浜の北側斜面に築かれたおやまのひら古墳、七社神社北古墳が知られる。

古代・中世の遺跡については、玉島八島の丘陵南斜面で平安時代末から室町時代にかけて操業された龜山焼の窯跡群がある。山陽自動車道建設工事に伴う発掘調査で窯体6基と灰原などが検出された。この窯では壺、甕、鉢といった容器類の他に瓦も多く生産していることがわかった⁽⁷⁾。この周辺には海辺の集落跡が存在し、ハイガイを主体とする中世の貝塚もみられる。

平安末期に瀬戸内海各地で繰り広げられた源平内乱がこの地域にもたらした影響は甚大なものであっただろう。乙島と柏島の間の水道が舞台となったとされる寿永2年(1183)の水島合戦では平氏方の勝利に終わるが、このとき乙島側にある水島城跡が木曾義仲率いる源氏方の陣で、柏島側にある森本松山城跡が平家方の陣と伝えられる⁽⁸⁾。その後、元暦2年(1185)の壇の浦合戦で平氏は滅亡し、東国武士による新たな政治権力がこの地にも及ぶことになった。

江戸時代になると、備前、備中の南部では河川の沖積作用により内海は広大な干潟と化していた。この状況は干拓を行うには好都合であり、石高増大を目指した新田開発が各地で行われた。玉島黒崎と柏島の間の入り江でも備中松山藩による干拓が行われたが、水田ではなく塩田として開発された。正保3年(1646)に元浜新開(後に勇崎元浜新開)が完成し、寛文6年(1666)に勇崎浜新開と黒崎浜新田、延宝3年(1675)に押山新開と森本新開が完成している。

勇崎浜の塩田については、備中松山藩主水谷勝宗の時代から昭和にかけての資料が豊富にあるため、多くの研究がなされてきた。勇崎浜では長らく入浜式の塩田で塩作りが行われてきたが、昭和29年頃には流下式塩田に改良された。そのわずか数年後、イオン交換膜製塩法が確立され、干拓から約300年を経た昭和34年(1959)に塩田における操業が終了した⁽⁹⁾。

第2節 調査に至る経緯と経過

倉敷市教育委員会は、県道398号水島港唐船線改築計画を契機に、中津貝塚の保存を目的とした確認調査を平成30年度から令和2年度にかけて実施した。その成果を報告書にまとめ、縄文時代後期初頭を中心とした貝層の分布範囲や縄文時代晚期前半を含む墓域の範囲を提示した⁽¹⁰⁾。この調査に引き続き、中津貝塚の北方約1kmに所在する西元浜貝塚についても確認調査を実施することになった。後述のとおり、貝層の広がりは比較的小規模で、保存状態は良くないとされていたが、本格的な調査が行われたことはなく、貝塚の範囲や内容は把握されていない。そのため、貝塚の全体的な保存状況を把握し、適切に保護・保存するために令和3・4年度に確認調査を実施することとした。

西元浜貝塚は、大正12年(1923)に発見された縄文時代の貝塚であると大正14年(1925)刊行の『浅口郡誌』⁽¹⁰⁾や昭和6年(1931)刊行の『浅口郡史蹟名勝天然記念物』⁽¹¹⁾に記されている。その記事とともに、段々畑に造成された貝塚の遠景や畑の斜面に貝殻が散布する様子を撮影した写真が掲載された。その後、西岡憲一郎氏、宗澤節雄氏、中山頼夫氏など地元の郷土史家によって遺物の採集が行われた。宗澤氏は、昭和13年に刊行された『吉備考古第36号』で西元浜貝塚の現況や自身の採集遺物について記述している⁽¹²⁾。それによると、「沖積層より高さ約十尺の崖上にある面積五畝歩位の畑地。

畠地は二段となり大正十五年頃上畠の土を切り取り下畠を埋めし際多数の貝殻と獸骨を見る。貝層は其切断面に表れ表土一尺貝層約二尺。」とある。宗澤氏は水原岩太郎氏とともに昭和7年に中津貝塚の発掘を行っていて、その出土資料が公表された⁽¹³⁾ 昭和10年から間もなくの記載である。おそらく中津貝塚へ通っているうちに西元浜貝塚への関心も高まり、貝塚をとりまく状況をつぶさに観察し、畠に露出した土器や石器などを熱心に採集していたと想像される。

このような経緯から、西元浜貝塚の貝層の広がりは小規模なもので、段々畠に開墾された範囲にはほぼ限定されると認識されていた。ところで、開墾後に貝層土壤が流入した低地の山際部分にも土器や石器、貝殻などの遺物が散布するため、この部分も遺跡の範囲として扱っている。また、さらに貝塚周辺の丘陵斜面には縄文時代の散布地が確認されている。つまり西元浜貝塚と称する遺跡は、貝塚本体と開墾などによって貝塚の遺物が流入した場所。それに加えて周辺に広がる縄文時代の遺物が採集された散布地を含んだものである。1999年刊行の『倉敷市遺跡地図(玉島地区)』では貝塚本体の北側から南西側にかけての斜面を長さ250m、幅100m程度に大きく取り囲んで遺跡範囲としている。この遺跡範囲については、倉敷市教育委員会が行った開発に伴う調査の結果を受けて見直しを行っている。遺跡の南西部で宅地造成工事が計画されたため確認調査と発掘調査を行ったところ、遺物包含層が残存する範囲が明らかとなった。報告書では、西元浜貝塚の範囲を標高5~10mくらいの丘陵裾部分で、長さ130m、幅20m程度に絞り込んで提示している⁽¹⁴⁾。

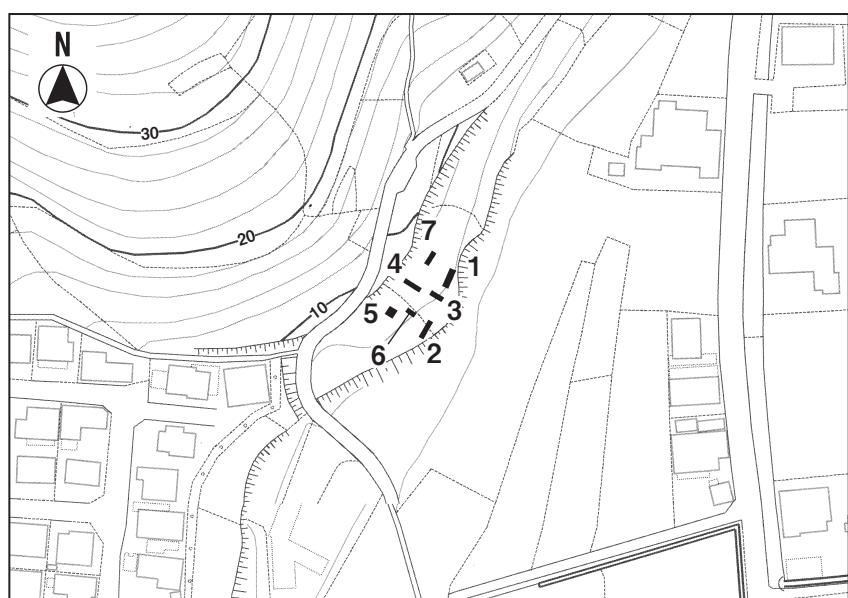
このように、遺跡全体の範囲は現状を認識したうえで、ある程度の精度をもって把握されているが、貝塚本体の広がりや残存状況についての情報はこれまで得られていない。貝塚が発見された上下二段の畠に貝層は残存しているか否かを確かめることを第一の目的として、小規模なトレンチによる確認調査を2年間にわたって実施した。

令和3年度の調査

初年度の調査は、令和3年10月19日から10月23日の期間に段々畠の下段を調査範囲とし、トレンチ1~3の3か所で実施した。

畠の東端で等高線に平行するトレンチ1では貝層は確認されず、貝層を切り崩した土壤により、南に下る傾斜地を埋めて畠を造成した様子が明らかとなった。造成土の中にハイガイを中心とした貝殻が含まれており、縄文時代中期を中心とした土器、サヌカイト片などが少量出土した。

トレンチ1の西側で同じ方向に設定したトレンチ2では貝層は確認されず、トレンチ1と同じ



第3図 トレンチ位置図 (S=1/2,000)

様に、貝層を切り崩した土壌を含む造成土により、低地を埋めたことが明らかとなった。

次に、トレンチ1とトレンチ2の間に等高線に直行する方向でトレンチ3を設定した。原位置を保つ貝層は確認されず、掘削して急斜面になったところに貝層土壌を含む造成土が覆っている状況であった。

令和4年度の調査

2年目の調査は、令和4年10月18日から10月22日の期間に段々畑の上段を調査範囲とし、トレンチ4～7の4か所で実施した。

トレンチ3を西側に延長する方向でトレンチ4を設定した。貝層は確認されず、貝殻を含む層も見られなかった。縄文時代中期と後期の遺物を含む包含層が確認され、3層に分層した。しかし、調査後に再検討を行った結果、これらの層は遺物包含層が掘削され、整地土として用いられたとの結論に至った。いずれにせよ、このトレンチにおいて貝層はほとんど切り崩されていることが判明した。

トレンチ4の西にある水田（休耕地）にトレンチ5を設定した。床土の中に縄文土器・ハイガイ・現代の陶磁器が少量含まれる。標高4.8mで地山を検出した。

トレンチ5の南東に、等高線に直行してトレンチ6を設定した。貝殻を含む層は確認されなかつたが、縄文時代中期を中心とした遺物を含む層が確認された。上層は攪乱を受けている。土器以外には、サヌカイト片などが出土した。

最後に、トレンチ4の北東に等高線に平行してトレンチ7を設定した。造成土の直下で縄文時代中期と後期の遺物を含む層を確認したが、これも調査後に造成土と認識された。土器以外には、サヌカイト片、流紋岩片（在地の石器石材）などが出土した。

<調査日誌抄>

令和3(2021)年度

- 10月19日 機材搬入しトレンチ1・2の掘削開始。
- 10月20日 トレンチ1完掘。検出された黒褐色混貝土層は畑の造成のため貝層が切り崩されたものと判明。トレンチ3の掘削開始。
- 10月21日 トレンチ2・3を完掘し、断面図実測。
- 10月22日 全てのトレンチの断面図実測、写真撮影を完了。埋め戻しを行い機材撤収。

令和4(2022)年度

- 10月18日 機材搬入しトレンチ4～6の掘削開始。トレンチ4・6で縄文時代の遺物包含層を検出する。（調査後に造成土と認識する。）
- 10月19日 トレンチ7の掘削を開始し、縄文時代の遺物を包む層を検出。トレンチ5を完掘し断面図の実測を行う。
- 10月20日 トレンチ4・6を完掘。トレンチ4断面の精査、トレンチ5・6の断面図実測、写真撮影を完了し埋め戻しを行う。
- 10月21日 トレンチ4の断面図実測、写真撮影を完了後埋め戻し。トレンチ7の断面図実測を完了する。
- 10月22日 トレンチ7の写真撮影を完了。埋め戻しを行い機材撤収。全期間の調査を終了する。

第3節 調査の組織

西元浜貝塚確認調査の事務及び発掘調査、報告書作成については、倉敷埋蔵文化財センターが担当した。

[調査体制]

教育長 井上正義

教育次長 黒瀬敏弘（令和3年度）

教育次長 早瀬 徹（令和4年度）

生涯学習部部長 三宅健一郎

文化財保護課長 平田義雄

埋蔵文化財センター館長 小野雅明

埋蔵文化財センター主任 藤原好二

埋蔵文化財センター学芸員 鍵谷守秀

調査にあたっては地権者をはじめとする地元の方々にはたいへんお世話になった。

第4節 調査の概要

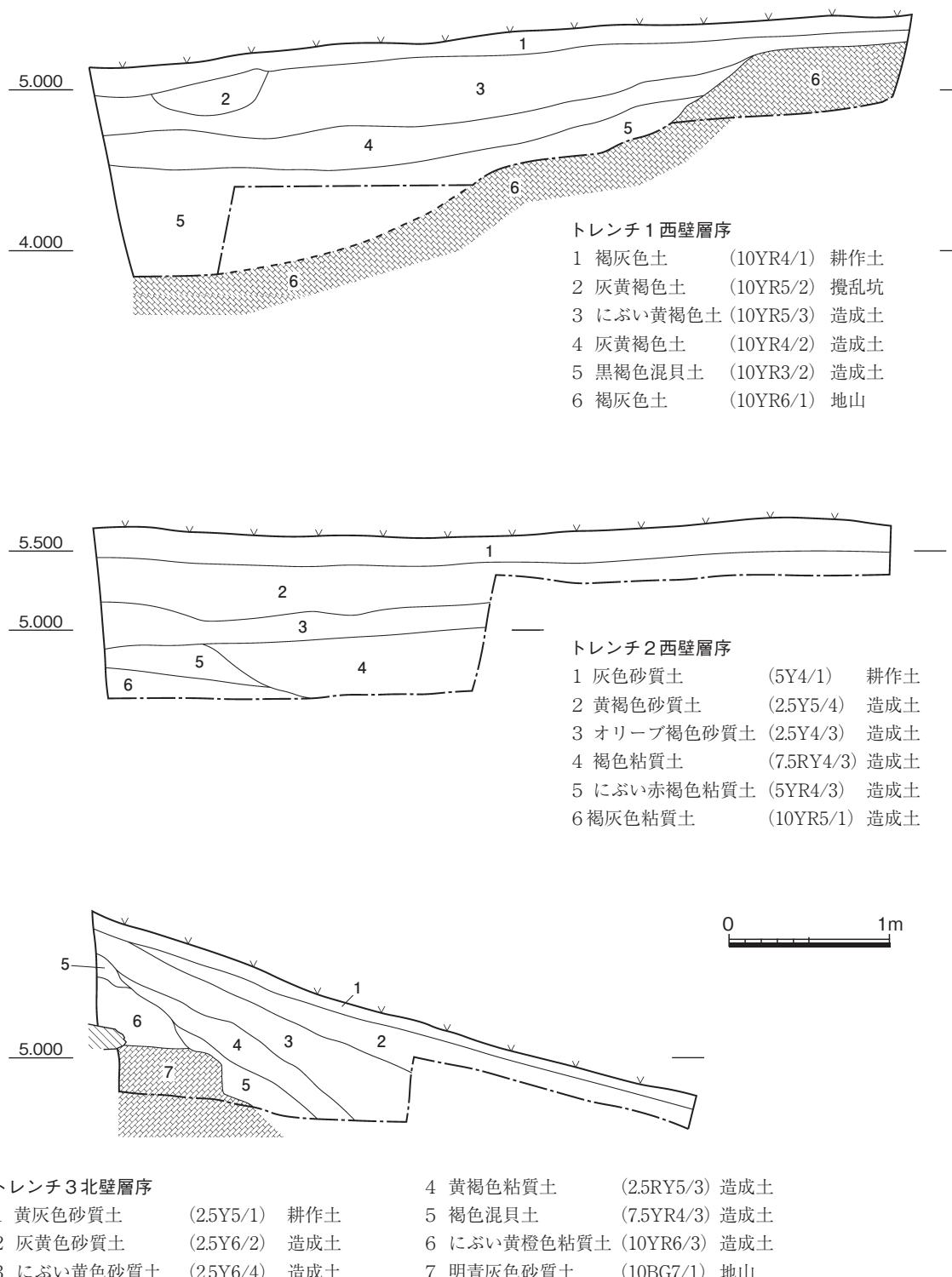
1 各トレーニングの概要

畠の下段の調査（トレーニング1～3）

トレーニング1（1.2m×5m）は、旧桃畠の北端に、等高線に平行して設定したものである。耕作土下の3層、4層は地山土に貝殻が混入する造成土である。その下の黒褐色混貝土（5層）は貝層を切り崩したと考えられる土壤で、南に下る傾斜地を埋めた造成土である。5層にはハイガイを中心とし、イボウミニナ、イボニシ、アカニシ、マガキなどの貝殻が少量含まれている。また、縄文時代中期を中心とした土器、サヌカイト片などが少量出土した。トレーニング最深部では褐灰色の地山（6層）を検出し、開墾前の山裾の地形を垣間見ることができた。

トレーニング2（5m×1.2m）は、トレーニング1の南側に、等高線に平行して設定したものである。耕作土の下は、ハイガイを中心とした貝殻や現代の遺物が混じる土層（2～6層）が続く。原位置を保つ貝層は認められなかった。4層から獸骨が出土している。トレーニング1と同様に、造成土によって低地を埋めた様子がうかがえる。

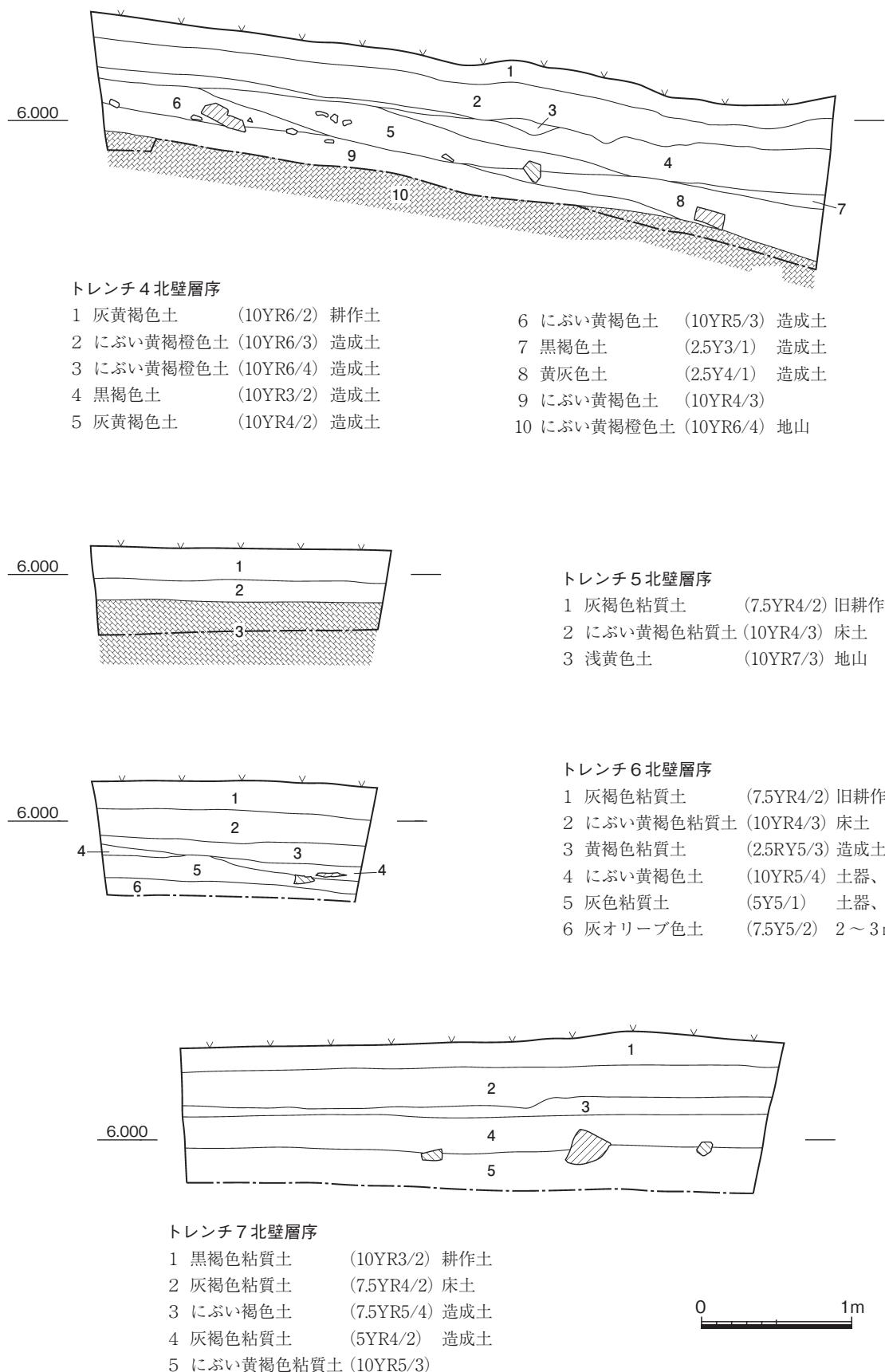
トレーニング3（4m×1m）は、トレーニング1とトレーニング2の間に、等高線に直行して設定したものである。地山（7層）直上のぶい黄橙色粘質土（6層）は造成土と考えられる。破碎された貝殻を含む褐色混貝土（5層）は貝層土壤を含む造成土である。6・7層の東端が削られてできた急斜面に褐色混貝土が薄く被る様子は、貝層断面と言えるほど貝殻の密度が濃いものではない。昭和6年刊行の『浅口郡史蹟名勝天然記念物』などに掲載された貝塚の写真や宗澤氏の貝層断面の厚さを二尺とした記述とは合致しないと思われる。おそらく、現在の法面は新しい時期に掘削されてできたもので、かつて斜面に存在した貝層土壤のほとんどが失われたと考えられる。



第4図 トレンチ断面図1 (S=1/40)

畑の上段の調査 (トレンチ4～7)

トレンチ4 (1m × 5m) はトレンチ3の延長上に設定したものである。耕作土下の2～8層は全て造成土である。4～8層は遺物包含層を掘削した土壤と考えられる。出土土器は縄文時代中期を中心とし、後期の土器が少し混じる。いずれの層にも貝殻は全く見られない。その下のにぶい黄褐色土(9層)には遺物は含まれず、地表下約80cmでにぶい黄褐色土の地山(10層)となる。



第5図 トレンチ断面図2 (S=1/40)

トレンチ4の東端から、トレンチ3の西端までの地山のラインはほぼ水平で、開墾時の削平を表すものであろう。

トレンチ5(2m×2m)は、トレンチ1の南西側にある水田(休耕地)に設定したものである。耕作土・床土の下、地表下約35cmで浅黄色土の地山(3層)となる。床土の中には、縄文土器、ハイガイ、現代の陶磁器がわずかに含まれる。

トレンチ6(1m×2m)は、トレンチ5の南東に、等高線に直行して設定したものである。耕作土、床土、開墾時の造成土に続いて、その下には縄文時代の遺物を含むにぶい黄褐色土(4層)、灰色粘質土(5層)が確認された。4層は攪乱を受けている。出土土器はほとんどが小片で、縄文時代中期が中心とみられる。おそらく4・5層も造成土であろう。土器以外には、サヌカイト製の石匙などが出土した。

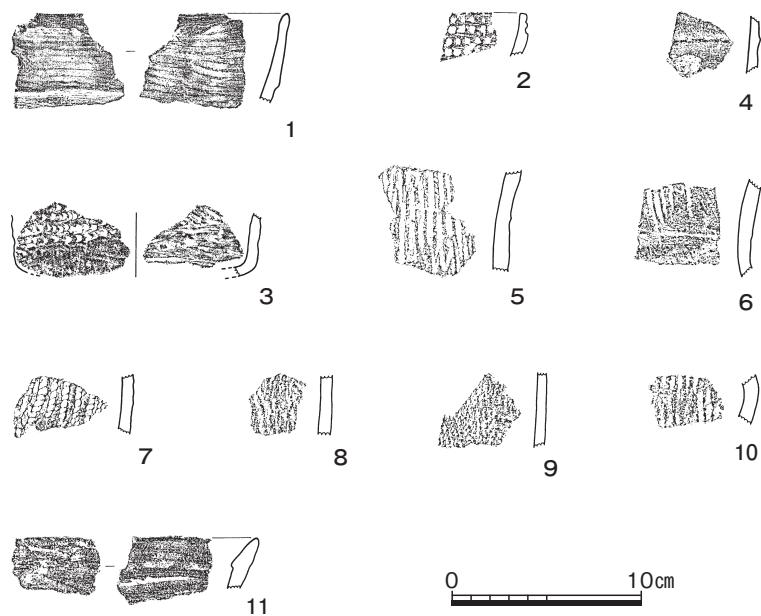
トレンチ7(1m×4m)は、トレンチ4の北東に、等高線に平行して設定したものである。耕作土、床土、開墾時の造成土に続いて、縄文時代の遺物を含む灰褐色粘質土(4層)が確認されたが、遺物包含層を掘削した土壤からなる造成土であろう。出土土器は縄文時代中期を中心とする。土器以外には、サヌカイト片、流紋岩片(在地の石器石材)などが出土した。その下のにぶい黄褐色粘質土(5層)には遺物は含まれない。

2 出土遺物

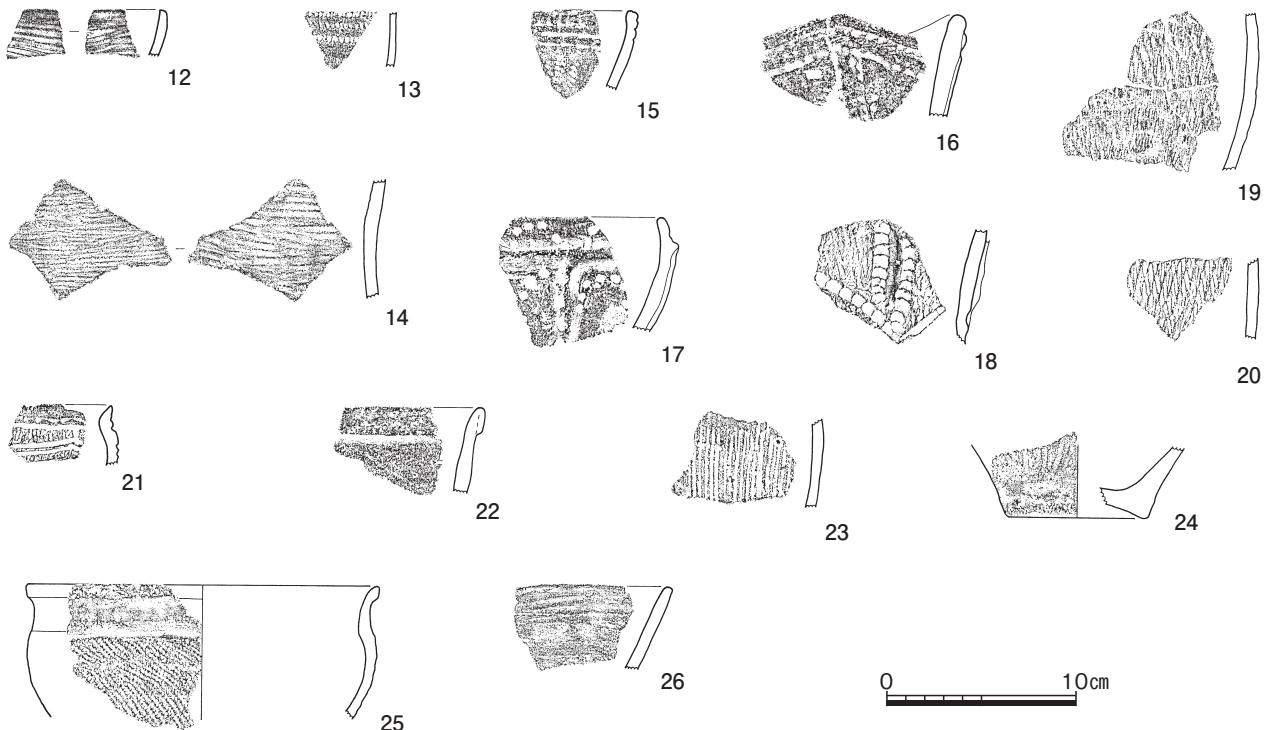
縄文土器(第6図～第8図)

第6図は、令和3年度の調査で出土したものである。1の外面には口縁から約4cm下の位置に低い段がある。調整は内外面とも横位の二枚貝条痕である。2の外面には二列単位の刺突文が施される。内面の調整は横位の二枚貝条痕の後ナデが施される。3は丸底気味の底部片である。外面には、D字形爪形文が施される。調整は内外面とも横位の二枚貝条痕である。1～3は羽島下層式と考えられる。4は小片のため詳細は不明であるが、外面に断面三角形状の低い隆帯のようなものが見られる。胎土には雲母が多く含まれる。5は深鉢のくびれ部あたりの小片で、深浅の条が交互に表れる縄巻縄文が付けられる。船元IV式と考えられる。6の外面には縦位の二枚貝条痕が見られ、里木III式の可能性が考えられる。7～9は深鉢の胴部小片で、RL縄文が付けられる。中期前半のものであろう。10は内湾する口縁部の小片と思われ、撫糸文が付けられる。里木II式と考えられる。11は口縁部内側が肥厚する。残存部分に文様は見られない。後期の縁帶文土器と考えられる。

第7図はトレンチ4の出土土器である。12は内外面とも横位の二枚貝条痕が施される。13は小片のため文様の詳細が不明であるが、半裁竹管の一



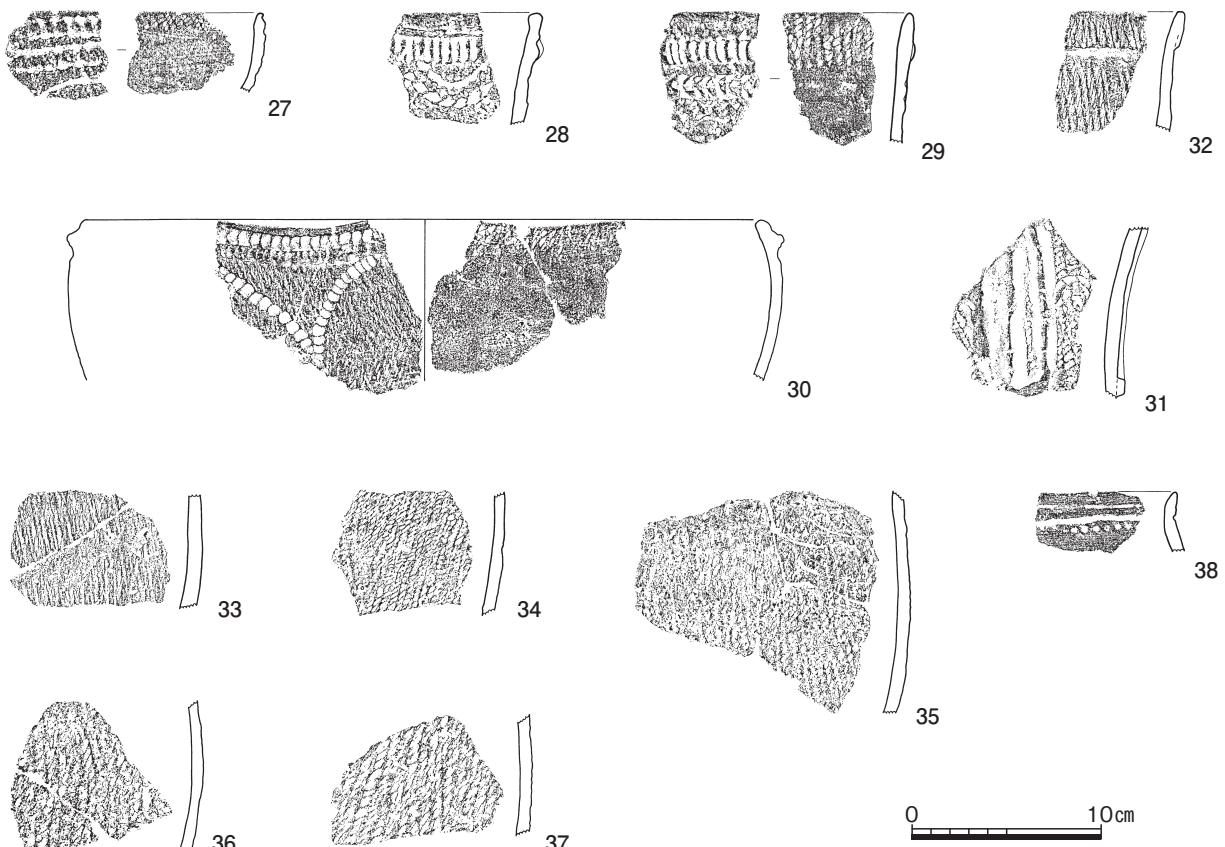
第6図 西元浜貝塚出土の土器1 (S=1/4)



第7図 西元浜貝塚出土の土器2 (S=1/4)

端を使った刺突列とD字形爪形文のような文様例が存在する。内面の調整は、横位の二枚貝条痕の後ナデが施される。14は胴部で、内外面とも横位の二枚貝条痕が施される。12～14は羽島下層式と考えられる。15は口縁端の外側角に半裁竹管による押引文、その下に平行線文が施される。この平行線文は半裁竹管の両端を器面に当て、5～7mm引いては止めを繰り返しながら断続的に施文されている。摩耗のため地文は不明である。16は波状口縁の深鉢である。貼付突帯の上に爪形文が付けられる。摩耗が著しく地文は不明である。17は貼付突帯と円形刺突文が施される。地文は見られない。18は貼付突帯の両脇に連続する円形刺突文が施される。地文としてRL縄文が付けられる。この縄文は、長い纖維痕が顕著で、節が目立たない。17・18は船元II式と考えられる。19・20は深鉢の胴部小片で、長い纖維痕が目立つ縄文が付けられる。21は内湾する口縁部の小片で、口縁端を外側に向けて尖らせている。半裁竹管による平行線文が施され、地文は撫糸文であろう。里木II式と考えられる。22は口縁の外側が肥厚して段状になる。内外面ともナデ調整で、地文は見られない。23は深鉢の胴部小片で、縦位の細い条線が密に付けられる。里木III式と考えられる。24は上げ底の形状となる底部である。地文は明瞭でない。25は外反する頸部をもつ丸底の鉢で、口縁部と胴部にRL縄文が付けられる。後期の彦崎KII式と考えられる。26は無文の深鉢で、内外面とも巻貝条痕の後ナデが施される。後期に属すると考えられる。

第8図はトレンチ7の包含層から出土したものである。27は爪形文と平行線文が施される。地文は文様に消されて明らかでないが、RL縄文であろう。口縁内面にも幅1cm程度の縄文帯をもつ。船元I式と考えられる。28・29は口縁に平行して突帯を貼り付け、その上に爪形文が付けられる。28はさらに半裁竹管を押し引いて付けた平行線文を施す。29には、爪形文や平行線文が加わり、口縁内面には幅3cm程度のRL縄文帯をもつ。30も口縁に平行して、爪形文を伴う貼付突帯が施され、円



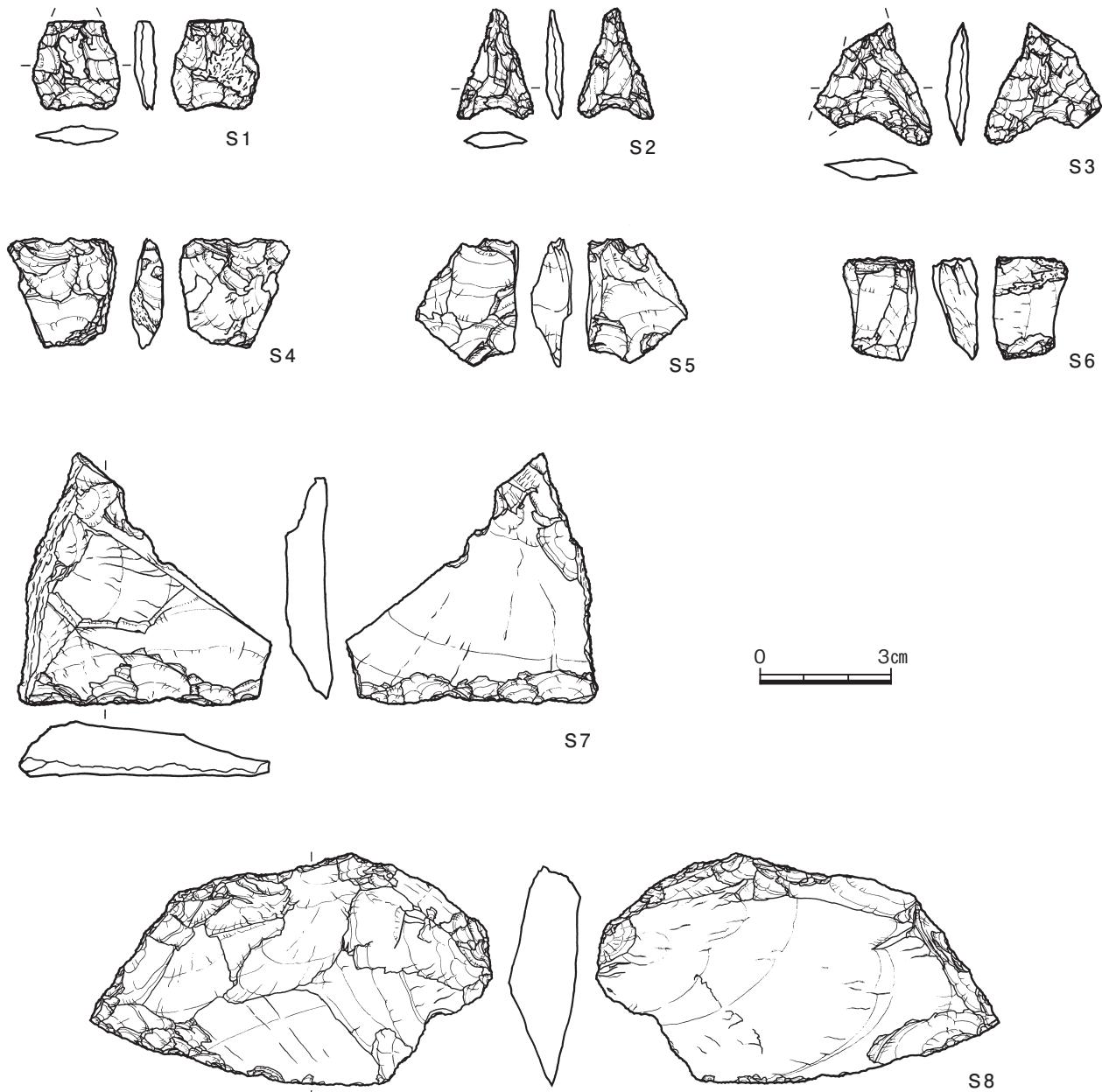
第8図 西元浜貝塚出土の土器3 (S=1/4)

形刺突文列が弧状に描かれる。地文はRL縄文で、帯口縁内面にも幅1.5cm程度の縄文帯をもつ。**31**は縦方向に延びる貼り付け突帯を施す。地文は節が大きく丸みを帯びたRL縄文である。**28～31**は船元Ⅱ式と考えられる。**32**は口縁の外側が肥厚して段状になる。**22**と形状が似ているが、外面にはRL縄文が付けられる。**33～37**は深鉢の胴部小片で、纖維痕が目立つRL縄文が付けられる。**38**は内湾する口縁部の小片で、口縁端を外反させ、先端を尖らせている。沈線文と円形刺突文が施されるが、線は一部で途切れ、刺突文の深さは一定でない。地文は見られない。里木Ⅲ式と考えられる。

石 器(第9図)

サヌカイト製石器・剥片など124点、流紋岩製石核・剥片11点、石英製剥片1点が出土している。石材別の総重量はサヌカイトが719.54g、流紋岩722.70g、石英1.87gである。サヌカイトは地理的条件から香川県からもたらされたものがほとんどであると考えられる。流紋岩は緑灰色を呈し、ガラス質が強いという特徴から市内玉島黒崎で産出するものと考えられるが、石鏃などの製品は認められない。重量で三分の一以上を占める石核は石器石材としては質が良くないものである。石英製剥片は打点などがはっきりせず、自然のものかもしれない。製品としては石鏃3点、スクレイパー2点、加工痕跡のある剥片1点、楔形石器3点、石核1点がある。このうち石鏃3点、スクレイパー2点、楔形石器3点を図化した。

石鏃はすべてサヌカイト製凹基鏃である。**S1**は先端部が欠損しているが、抉りが浅く側縁部が外湾している。**S2**はやはり抉りが浅いが、側縁部は直線的である。**S3**は先端部と片方の脚部を欠損しているが、大型で丁寧な作りの石鏃である。側縁部には先端部と脚部との間に屈曲がある。



第9図 石 器 (S=2/3)

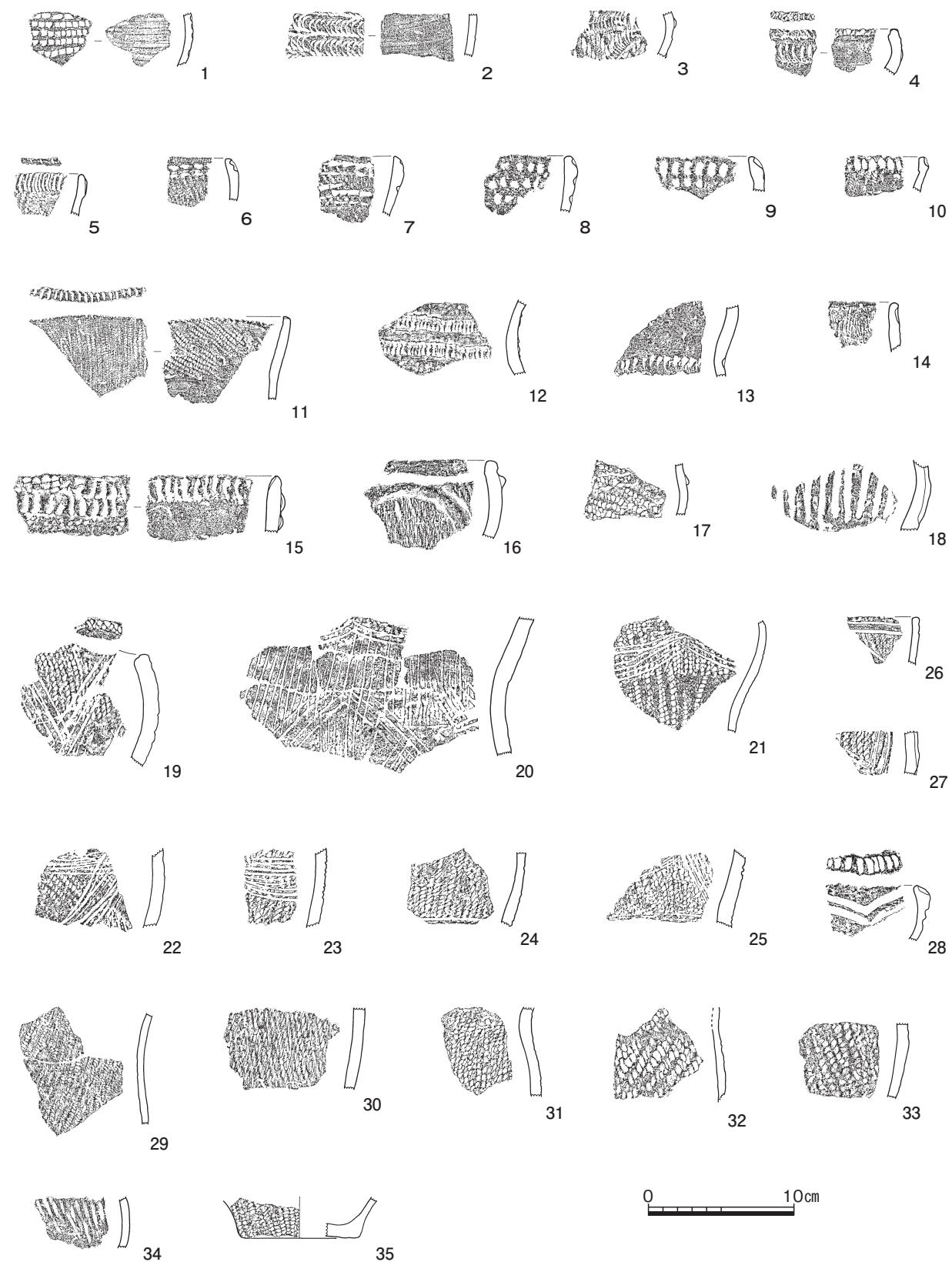
S4～S6はサヌカイト製の楔形石器である。S4・S5は偏平状で、剪断面が長軸方向にあり、S4は上下に、S5は上にだけつぶれがある。S6は角柱状で、剪断面が長軸方向にあり、上に自然面、下につぶれがある。S7・S8はサヌカイト製のスクレイパーである。S7は不定型な剥片を利用しており、直線的な両面加工の刃部を作り出している。S8は厚手の不定形剥片を利用したものである。刃部加工が明瞭でなく、加工痕跡のある剥片とすべきかもしれない。ただ、先端を尖頭状に加工し、厚手の側縁を潰して、握りやすくするためと考えられる加工が行われていることからスクレイパーとした。

第5節 まとめにかえて

調査の結果

西元浜貝塚確認調査は、遺跡保存のための基礎資料を得ることを目的として、令和3年度から4年

度の2年間にわたり倉敷市教育委員会が実施した。調査の結果、縄文時代の貝層は開墾によりすべて削平されており、貝層が原位置をとどめる部分は認められなかった。畠の下段を整地するために用い



第10図 宗澤コレクション 西元浜貝塚の土器1 (S=1/4)

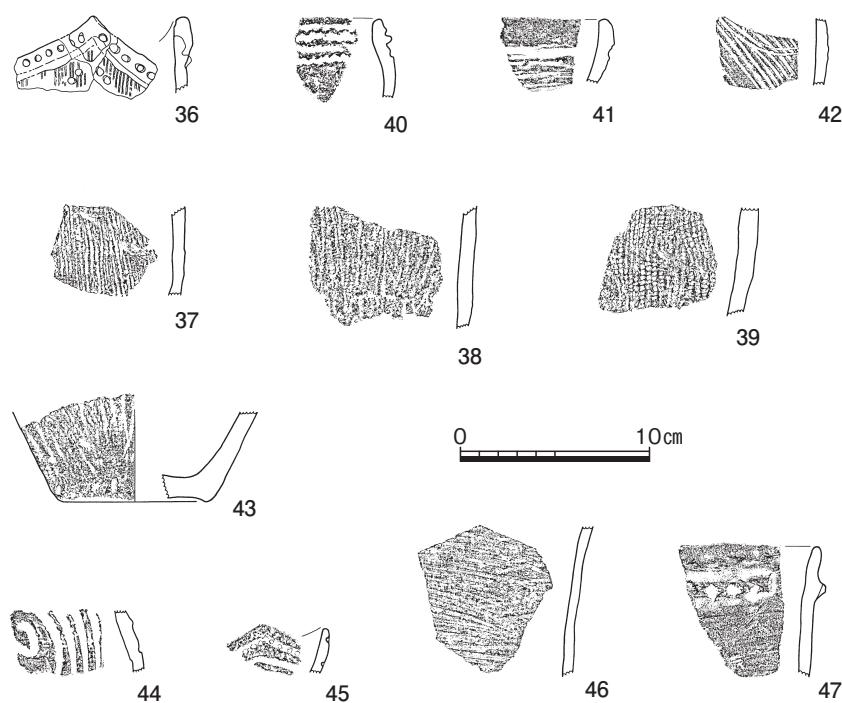
られた貝層土壌は畠の上段あたりから削り出したものと考えられるが、その痕跡さえも確認できなかった。

貝塚の時期については、これまで指摘されているように、最も多く出土した縄文時代中期（船元I式～里木Ⅲ式）が中心と考えられる。この他、前期（羽島下層式、磯の森式）、後期の津雲A式、彦崎KⅡ式がわずかに出土している。後期初頭の中津式は全く見られなかった。この時期に、約1km南にある中津貝塚で貝塚が形成されており、この地域における縄文時代中期から後期にかけての食料資源に関わる環境の変化や居住のあり方が注目される。

宗澤コレクションの中の西元浜貝塚出土資料について

第2節で、宗澤節雄氏が『吉備考古第36号』で西元浜貝塚を紹介したことについて触れた。宗澤氏は、倉敷市玉島地区を中心に、縄文貝塚、古墳、古代の窯跡などの貴重な資料を収集し、没後の平成19年、ご子息により考古資料1,098点が倉敷市に寄贈された。今回の報告を機に宗澤コレクションにある西元浜貝塚出土縄文土器片152点の一部を第10・11図に掲載する。記録によると、採集年月日は昭和11年1月21日と同年4月15日となっている。土器の裏面には「元浜」、「元ハマ」あるいは「元」と墨書きされており、西元浜貝塚の出土資料であることが明示されている。

1の外面には一列単位の刺突文が施される。内面の調整は横位の二枚貝条痕である。羽島下層式と考えられる。2の外面には連続爪形文が施され、磯の森式と考えられる。3～5は低い突帯上に爪形文が施される。3の地文は節が長大で纖維痕が目立たないRL縄文である。4・5は口縁端面に刻目をもつ。3～5は船元I式と考えられる。6～10は半截竹管による刺突文または押引文が施される。11は外面と口縁内面にRL縄文が付けられる。口縁端面に刻目をもつ。12・15～17は器面に突帯を貼付ける。12・15はその上に爪形文を付け、17は刻目を付ける。16には何も付けられない。15の口縁内面には一条の爪形文が付けられる。13のくびれ部には、半截竹管の先を傾け、上端を深



第11図 宗澤コレクション 西元浜貝塚の土器2 (S=1/4)

く押し付けたような爪形文がめぐる。晩期の深鉢胴部のようなケズリ調整は見られない。

14の口縁部には二枚貝の殻頂部の圧痕が付けられる。12～17は概ね船元II式と考えられる。18の内湾する口縁部には縦方向に引いた深い沈線が並ぶ。

19～27はRL縄文を地文とし、半截竹管による平行線文が付けられる。27には突帯が伴う。28はやや太めの平行線文が施される。口縁端面に半截竹管による刻目が付く。

18～28は船元III式と考えられる。

29～34は口縁から胴部、**35**は底部の小片である。**34**の地文は無節縄文かもしれない。他は RL または LR の単節縄文である。**36**は波状口縁の深鉢である。口縁に沿って貼付突帯とその上側に円形刺突文が付けられる。地文は縦位の細い条線が付けられる。**37～39**は胴部の小片で、撚糸文が付けられる。**36～39**は里木Ⅱ式と考えられる。**40**の口縁には半截竹管による平行線文が施され、その線上に刺突文が加わる。地文は不明。41・42の器面調整は二枚貝条痕で、**41**には沈文、**42**には半截竹管による平行線文が施される。**40～42**は里木Ⅲ式と考えられる。**43**は底部である、器面が荒れていて詳細は不明である。**44**は口縁部内側に段をもち、外面には沈線文が施される。文様はおそらく対向弧線文で、津雲 A 式と考えられる。

45は波状口縁の鉢または深鉢の小片である。沈線の中に刺突を加える。地文は不明であるが、口縁端には結節縄文が付けられているようである。**46**は外面に巻貝条痕が施される。**47**は口縁部に刻目突帯をもつ晩期の深鉢と思われる。

註

- (1) a 藤原好二「倉敷市内の有茎尖頭器」『倉敷埋蔵文化財センター年報3』倉敷埋蔵文化財センター 1996
- b 原田虎平編『浅口郡史蹟名勝天然記念物』1931
- c 小野雅明ほか『塩生遺跡・西元浜貝塚』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第19集 倉敷埋蔵文化財センター 2023
- (2) 小野雅明ほか『中津貝塚』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第18集 倉敷埋蔵文化財センター 2021
- (3) 藤田憲司「倉敷市玉島富平松発見の銅鏡」『倉敷考古館研究集報 第9号』(財)倉敷考古館 1974
- (4) 福本 明「倉敷市富ジョオゴナル遺跡出土の土器」『倉敷埋蔵文化財センター年報3』倉敷埋蔵文化財センター 1996
- (5) 正岡睦夫ほか「唐津池北遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69
 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988
- (6) 福本 明「玉島天王山古墳出土の埴輪について」『倉敷の歴史 - 倉敷市史紀要 - 第4号』倉敷市 1994
- (7) 岡田 博ほか「亀山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69
 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988
- (8) 倉敷市史研究会編『新修倉敷市史 第2巻 古代・中世』倉敷市 1999
- (9) 森脇正之編『ふるさとの想い出 写真集明治大正昭和 玉島』(株)国書刊行会 1982
- (10) 中村安孝『浅口郡誌』浅口郡役所 1925
- (11) (1) b
- (12) 宗澤甕亭「浅口郡附近の縄文式遺跡」『吉備考古第36号』1938
- (13) 水原岩太郎『岡山縣浅口郡黒崎村中津中津貝塚發見
- (14) (1) c

出土遺物観察表

1 繩文土器観察表

番号	出土位置	器種・形態	時期／分類	文様等の特徴	外面調整	内面調整	色調 (外面／内面)
1	T3 耕作土	深鉢	前期 羽島下層式	口縁外面に低い段状の貼り付け。	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色 灰黄色
2	T1 造成土	深鉢？	前期 羽島下層式	二列単位の刺突文。	不明	二枚貝条痕	にぶい橙色 にぶい橙色
3	T1 造成土	深鉢 底部	前期 羽島下層式	D字形爪形文。	二枚貝条痕	二枚貝条痕	にぶい黄橙色 灰黄褐色
4	T1 造成土	深鉢	前期？	断面三角形の低い隆起帶。 胎土に雲母を多く含む。	不明	条痕の ちナデ	黒褐色 褐色
5	T1 造成土	深鉢	中期 船元IV式	RL ? に L を卷いた繩巻繩文。	-	ナデ	褐色 褐色
6	T1 造成土	深鉢	中期 里木Ⅲ式	地文がみられない。	二枚貝 条痕	ナデ	褐色 褐色
7	T1 造成土	深鉢	中期 船元式	RL 繩文。	-	ナデ	黒褐色 黒褐色
8	T1 造成土	深鉢	中期 船元式	RL 繩文。	-	ナデ	灰黄褐色 褐灰色
9	T1 造成土	深鉢	中期 船元式	RL 繩文。	-	ナデ	にぶい橙色 灰黄褐色
10	T1 造成土	深鉢	中期 里木Ⅱ式	撫糸文。	-	ナデ	褐色 褐色
11	T1 造成土	深鉢	後期 縁帶文土器	口縁内側が肥厚。	条痕	条痕のち ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色
12	T4 造成土	深鉢	前期 羽島下層式	口縁部無文。	二枚貝 条痕	二枚貝 条痕	橙色 にぶい褐色
13	T4 造成土	深鉢	前期 羽島下層式	D字形爪形文。	二枚貝 条痕	二枚貝 条痕	にぶい褐色 灰褐色
14	T4 造成土	深鉢	前期 羽島下層式		二枚貝 条痕	二枚貝 条痕	にぶい褐色 にぶい橙色
15	T4 造成土	深鉢	中期 船元Ⅰ式？	半截竹管による押引文と平行線文。 摩耗のため地文は不明。	-	ナデ	灰褐色 灰褐色
16	T4 造成土	深鉢 波状口縁	中期 船元Ⅱ式？	突带上に爪形文。 摩耗のため地文は不明。	-	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい橙色
17	T4 造成土	深鉢	中期 船元Ⅱ式	突帶と刺突文。 地文は無い。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色
18	T4 造成土	深鉢	中期 船元Ⅱ式	突帶の両脇に連続刺突文。 地文は RL 繩文。	-	ナデ	灰褐色 にぶい黄橙色
19	T4 造成土	深鉢	中期船元式	RL 繩文。	-	ナデ	褐色 褐色
20	T4 造成土	深鉢	中期 船元式	LR 繩文。	-	ナデ	灰褐色 にぶい褐色
21	T4 造成土	深鉢	中期 里木Ⅱ式	半截竹管による平行線文。 地文は撫糸文。	-	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色
22	T4 造成土	深鉢	中期 里木Ⅲ式？	口縁外側が肥厚して段状となる。 地文は無い。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色
23	T4 造成土	深鉢	中期 里木Ⅱ式	縦位の密な条線。	-	ナデ	褐色 明褐色
24	T4 造成土	深鉢	中期	地文は不明。	-	ナデ	橙色 にぶい黄橙色
25	T4 造成土	鉢	後期 彦崎KⅡ式	口縁部と胴部に RL 繩文。	-	ナデ	褐色 褐色
26	T4 造成土	深鉢	後期	無文。	条痕のち ナデ	条痕のち ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色
27	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元Ⅰ式	爪形文と平行線文。地文は RL 繩文。 口縁内面に RL 繩文帯。	-	ナデ	にぶい褐色 黒褐色
28	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元Ⅱ式	突带上に爪形文。他も平行線文。 地文は不明。	-	ナデ	黒褐色 にぶい褐色
29	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元Ⅱ式	突带上に爪形文。他も爪形文と平行線文。 地文は RL 繩文。口縁内面に RL 繩文帯。	-	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色
30	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元Ⅱ式	突带上に爪形文。他も連続刺突文。 地文は RL 繩文。口縁内面に RL 繩文帯。	-	ナデ	にぶい褐色 灰褐色
31	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元Ⅱ式	縦方向に延びる突帶。地文は RL 繩文。	-	ナデ	にぶい褐色 にぶい赤褐色

番号	出土位置	器種・形態	時期／分類	文様等の特徴	外面調整	内面調整	色調 (外面／内面)
32	T7 4層(造成土)	深鉢	中期	口縁外側が肥厚して段状となる。 地文はRL繩文。	—	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色
33	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元式	RL繩文。	—	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい褐色
34	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元式	RL繩文。	—	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
35	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元式	RL繩文。	—	ナデ	灰褐色 にぶい灰黄褐色
36	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元式	RL繩文。	—	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色
37	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 船元式	RL繩文。	—	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色
38	T7 4層(造成土)	深鉢	中期 里木皿式	沈線文と刺突文。地文は不明。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰黄褐色

2 石器計測表

番号	器種	石材	法量				出土位置		整理番号
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	トレンチ	土層等	
S1	石鎌	サヌカイト	(2.04)	2.04	0.49	2.13	4	排土中	BB3-1
S2	石鎌	サヌカイト	2.49	1.69	0.43	1.30	2	排土中	BA1-1
S3	石鎌	サヌカイト	(2.84)	2.70	0.54	2.61	6	造成土	BB3-2
S4	楔形石器	サヌカイト	2.45	2.52	0.78	4.93	1	造成土	BA1-2
S5	楔形石器	サヌカイト	2.92	2.38	0.89	4.66	4	排土中	BB3-3
S6	楔形石器	サヌカイト	2.35	1.66	1.03	4.56	2	排土中	BA1-3
S7	スクレイパー	サヌカイト	5.75	5.77	1.27	31.04	4	造成土	BB3-4
S8	スクレイパー	サヌカイト	9.18	5.27	1.71	75.91	4	造成土	BB3-5
	加工痕のある剥片	サヌカイト	3.09	(2.81)	0.58	6.15	7	造成土	
	石核	流紋岩	10.13	10.07	5.04	565.00	4	造成土	

()内は残存値

3 石器組成表

トレンチ	サヌカイト						流紋岩			石英		
	石鎌	スクレイパー	加工痕のある 剥片	楔形石器	剥片	碎片	重量(g)	石核	剥片	重量(g)	剥片	重量(g)
1				1	10		112.27					
2	1			1	22		31.29		1	4.02	1	1.87
4	1	2		1	38		446.61	1	5	584.96		
6	1				19		23.86					
7			1		25	1	105.51		4	133.72		
計	3	2	1	3	114	1	719.54	1	10	722.70	1	1.87

4 宗澤コレクション 繩文土器観察表

番号	器種・形態	時期／分類	文様等の特徴	外面調整	内面調整	色調 (外面／内面)
1	深鉢	前期 羽島下層式	一列単位の刺突文。	—	二枚貝条痕	にぶい黄橙色 灰黄褐色
2	深鉢	前期 磯の森式	連続爪形文。	—	二枚貝条痕後 ナデ	褐灰色 褐灰色
3	深鉢	中期 船元I式	低い突带上に爪形文。節の長大なRL縄文。	—	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色
4	深鉢	中期 船元I式	低い突带上に爪形文。口縁端面に刻目。地文は不明。	—	ナデ	灰褐色 にぶい褐色
5	深鉢	中期 船元I式	低い突带上に爪形文。口縁端面に刻目。LR縄文。	—	ナデ	灰褐色 にぶい褐色
6	深鉢	中期 船元II式?	半截竹管による刺突文。RL縄文。	—	ナデ	灰褐色 にぶい褐色
7	深鉢	中期 船元II式?	半截竹管による押引文。RL縄文。	—	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
8	深鉢	中期 船元II式?	半截竹管による刺突文。地文は不明。	—	ナデ	橙色 橙色
9	深鉢	中期 船元II式?	半截竹管による刺突文。地文は不明。	—	ナデ	褐灰色 褐灰色
10	深鉢	中期 船元II式?	半截竹管による刺突文。LR縄文。	—	ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色
11	深鉢	中期 船元I式?	外面と口縁内面にRL縄文。口縁端面に刻目。	—	ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色
12	深鉢	中期 船元II式	突带上に爪形文。地文は不明。	—	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
13	深鉢	中期 船元式?	くびれ部に爪形文。地文は不明。	—	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
14	深鉢	中期 船元式	二枚貝の圧痕。地文は二枚貝条痕?。	—	ナデ	灰褐色 褐灰色
15	深鉢	中期 船元II式	突带上に爪形文。口縁内面に爪形文。地文はRL縄文。	—	ナデ	灰褐色 にぶい橙色
16	深鉢	中期 船元II式	無施文の突帶。沈線状の押引文。RL縄文。	—	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
17	深鉢	中期 船元II式	突带上に刻目。RL縄文。	—	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
18	深鉢	中期 船元式	沈線文。地文は不明。	—	ナデ	にぶい橙色 にぶい赤褐色
19	深鉢 波状口縁	中期 船元III式	半截竹管による平行線文。外面と口縁端内側角にRL縄文。	—	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
20	深鉢	中期 船元III式	半截竹管による平行線文。RL縄文。	—	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
21	深鉢	中期 船元III式	半截竹管による平行線文。RL縄文。	—	ナデ	にぶい橙色 褐灰色
22	深鉢	中期 船元III式	半截竹管による平行線文。RL縄文。	—	ナデ	褐灰色 にぶい橙色
23	深鉢	中期 船元III式	半截竹管による平行線文。RL縄文。	—	ナデ	にぶい橙色 褐灰色
24	深鉢	中期 船元III式	半截竹管による平行線文。RL縄文。	—	ナデ	にぶい橙色 褐灰色
25	深鉢	中期 船元III式	半截竹管による平行線文。RL縄文。	—	ナデ	褐灰色 にぶい橙色
26	深鉢	中期 船元III式	半截竹管による平行線文。RL縄文。	—	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
27	深鉢	中期 船元III式	突帶文と半截竹管による平行線文。RL縄文。	—	ナデ	灰褐色 灰褐色
28	深鉢	中期 船元III式	沈線文。地文は不明。口縁端面に刻目。	—	ナデ	黒褐色 にぶい褐色
29	深鉢	中期 船元式	LR縄文。	—	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色
30	深鉢	中期 船元式	RL縄文。	—	ナデ	褐灰色 褐灰色
31	深鉢	中期 船元式	RL縄文。	—	ナデ	にぶい褐色 灰褐色
32	深鉢	中期 船元式	LR縄文。	—	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色
33	深鉢	中期 船元式	RL縄文。	—	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
34	深鉢	中期 船元式	無節縄文?。	—	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色

番号	器種・形態	時期／分類	文様等の特徴	外面調整	内面調整	色調 (外面／内面)
35	深鉢	中期 船元式	RL 繩文。	—	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
36	深鉢	里木Ⅱ式 波状口縁	貼付突帯と円形刺突文。地文は縦位の条線。	—	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色
37	深鉢	里木Ⅱ式	撫糸文。	—	ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色
38	深鉢	里木Ⅱ式	撫糸文。	—	ナデ	褐灰色 褐灰色
39	深鉢	里木Ⅱ式	撫糸文。	—	ナデ	灰黄褐色 褐灰色
40	深鉢	里木Ⅲ式	半截竹管による平行線の中に刺突文。地文は不明。	—	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色
41	深鉢	里木Ⅲ式	沈線文。二枚貝条痕。	—	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
42	深鉢	里木Ⅲ式	半截竹管による平行線文。二枚貝条痕。	—	ナデ	褐灰色 にぶい褐色
43	深鉢	中期		—	ナデ	にぶい橙色 褐灰色
44	深鉢	後期 津雲A式	沈線文（対向弧線文？）。口縁部内側に段。地文は不明。	—	ナデ	褐灰色 褐灰色
45	深鉢	後期 波状口縁	沈線の中に刺突を加える。地文は不明。	—	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色
46	深鉢	後期		卷貝条痕	ナデ	灰褐色 灰褐色
47	深鉢	晩期	口縁部に刻目突帯。	ナデ	ミガキ	灰褐色 黒褐色

第2章 内出1号墳

第1節 位置と環境

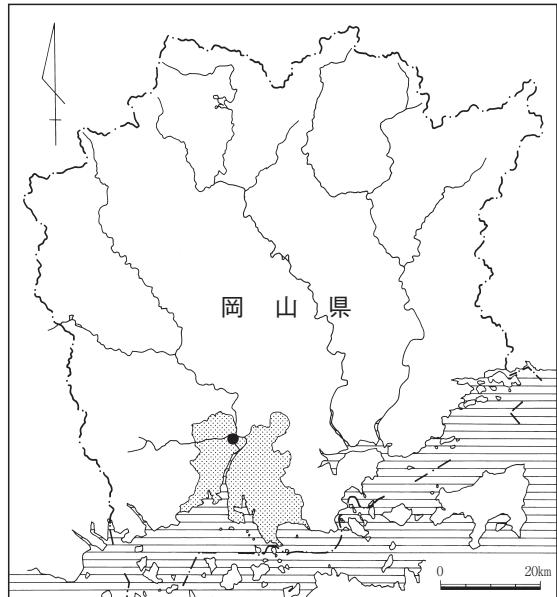
1 地理的環境

内出1号墳の所在する倉敷市真備町は、東と北は総社市、西は小田郡矢掛町と隣接し、南は倉敷市船穂地区・玉島地区に繋がっている。東の総社市とは備中地域を南北に貫流する高梁川によって隔てられ、西の矢掛町からは備後地域を源流とする小田川が流れ込み、町を東西に横切っている。また、小田川に沿っては古代から続く山陽道が町を東西に貫いている。山陽道は畿内から西国への主要交通路であり、高梁川は山陰地域から瀬戸内海に抜けるための交通路の一つであった。小田川も山陽道に沿った河川交通路として重要な位置にあり、真備町は東西南北の交通路が交わる結節点の一つであったと言える。

高梁川と小田川は町の南東部で合流し、倉敷市酒津方面へ流れ下っていくが、内出1号墳は、この合流点に近い二万地区に所在している。二万地区は小田川から南に入り込んだ谷筋を中心とした地域で、東には標高約120mの南山と標高104mの愛宕山があり、西は標高210mの反古山がそびえている。それほど広い谷ではないが、南へ深く入り込み低丘陵を越えると倉敷市船穂地区に至る。行政上は小田川に近い下二万地区と南の上二万地区に分かれている。現在、平地部分は水田として利用されているが、小田川に近い付近は氾濫時には広く冠水することがあり、古墳時代には低湿地であった可能性が高い。また、丘陵斜面は果樹園や竹林として利用されており、住宅地は主に丘陵裾や山裾に営まれている。遺物の散布地や古墳等の遺跡も多くはこうした丘陵上や、尾根筋に立地している。

2 歴史的環境

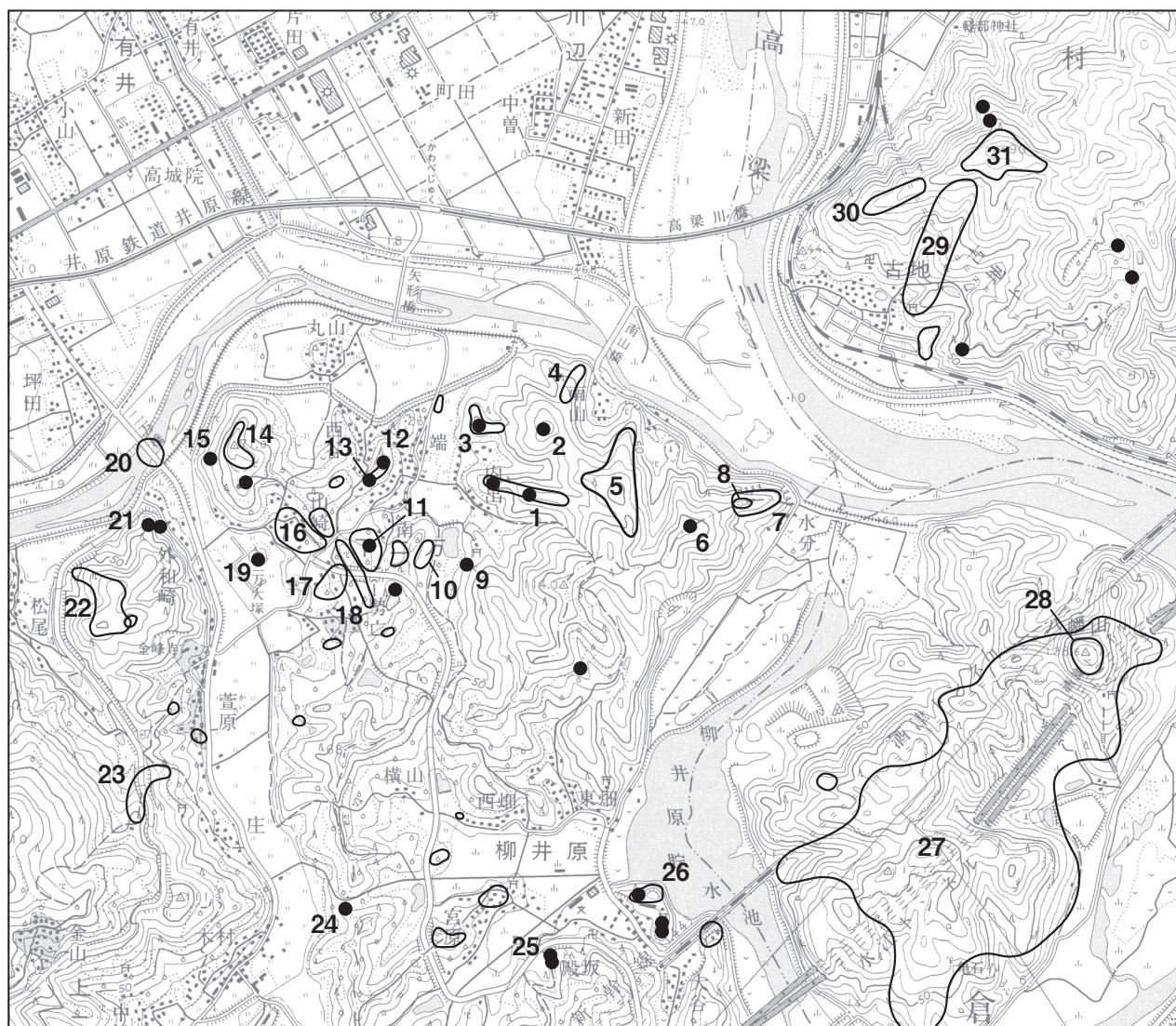
真備町内ではこれまで旧石器時代から縄文時代中期にかけての遺跡は確認されていない⁽¹⁾。真備町内で確認された最も古い時期の遺物は、縄文時代後期から晩期にかけての土器である。ほ場整備事業に伴って確認調査が行われた妹地区の蓮池尻遺跡でまとまった数が出土しているが、住居跡などの遺構は確認されていない⁽²⁾。弥生時代になるとやはり蓮池尻遺跡で前期～後期にかけての遺物とともに土壙や柱穴等も検出され、当該期の集落が存在したことがうかがえるようになる。また、蓮池尻遺跡では流水文銅鐸も発見されている⁽¹⁾。大正年間の出土で、現在は東京国立博物館に所蔵されている。箭田地区の西山遺跡では竪穴住居跡や貯蔵穴などが確認され、丘陵上にも人々が居住していたことがわかる⁽³⁾。弥生時代末期になると尾崎地区に黒宮大塚弥生墳丘墓が築かれる⁽⁴⁾。倉敷考古館によって発掘調査が行われ、墳丘から特殊器台等の供献土器、竪穴式石槨からは翡翠製勾玉と碧玉製



第12図 遺跡の位置

管玉各1点が出土している。以前は前方後方形の墳墓とされていたが、倉敷市による測量調査によつて楕円形と方形の墳丘墓が並んでいる可能性が高くなつた。また、先述の西山遺跡からは特殊器台を転用した土器棺が出土しており、同時期の墳墓があつたことがわかる。

古墳時代になると、吉備中枢の総社平野に隣接し、古代山陽道が横貫するという立地もあり、町内の丘陵上には多くの古墳が築かれるようになる。古墳時代前期に属する確実な例としては、箭田地区の西山1号墳と西山2号墳がある⁽³⁾。宅地造成にともなつて発掘調査が行われたもので、どちらも主体部は削平されていたが、径25m前後の円墳である。1号墳では周溝から壺形土器が出土し、2号墳からはやはり周溝内から前期の埴輪が検出されている。壺形土器は小田川と高梁川の合流点付替え工



- | | | | | |
|-----------|----------------|------------------|------------|-------------|
| 1 内出1号墳 | 2 天狗山古墳 | 3 小塹1号墳 | 4 南山北古墳群 | 5 南山古墳群 |
| 6 南山東古墳 | 7 南山城跡 | 8 南山明地古墳群・南山明地遺跡 | | 9 下二万神社裏山古墳 |
| 10 奥田池西遺跡 | 11 勝負砂古墳・勝負砂遺跡 | 12 経塹古墳(矢形2号墳) | | 13 矢形1号墳 |
| 14 山崎遺跡 | 15 山崎1号墳 | 16 横遺跡 | 17 勢亡遺跡 | 18 勝負砂西遺跡 |
| 19 二万大塚古墳 | 20 新二万橋遺跡 | 21 外和崎古墳 | 22 大谷大塚古墳群 | 23 萱原古墳群 |
| 24 経塹古墳 | 25 山上山1号墳 | 26 梁場山城跡 | 27 酒津山古墳群 | 28 酒津八幡山城跡 |
| 29 古地古墳群 | 30 古地西山古墳群 | 31 軽部山城跡 | | |

第13図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

事に伴って調査された南山城跡からも出土しており、城が築かれる前には前期古墳が所在していたことが想定されている⁽⁵⁾。南山城跡の西方に所在する南山明地古墳群も同時に調査されており、この前期古墳に続く4世紀後半から5世紀前半に築かれたと考えられている。10～15m程の円墳4基からなり、2～4号墳が調査された。4号墳の主体部のひとつには楽浪系鉄鋌が副葬されており、朝鮮半島との関係がうかがえる。なお、真備町では中期の古墳としては古くから有井地区の竜王塚古墳が知られている。以前は一辺20mの方墳とされていたが、近年の測量調査によって径約35mの円墳の可能性が高くなつた⁽⁶⁾。また、採集された埴輪などから5世紀後半の年代が与えられている。

5世紀後半以降、下二万地区に有力な古墳が集中して築かれるようになる。高梁川と小田川の合流点を見下ろす南山の尾根上に築かれた天狗山古墳は、戦前に乱掘が行われ、小札甲等の武具をはじめ鏡・馬具・鉄製武器が出土している。また、近年岡山大学によって発掘調査が行われ、周堤・周溝を巡らす墳長約60mの帆立貝形前方後円墳であることが確認された⁽⁷⁾。この時期では吉備において最大級の墳墓であり、造山古墳以後、徐々に古墳の規模が縮小していた総社平野に対して、真備地域の勢力拡大を示す古墳である。周辺に存在する勝負砂古墳や小塹古墳は、天狗山古墳とほぼ同時期か若干遅る時期に築かれた帆立貝形前方後円墳である。勝負砂古墳は墳長43m、岡山大学の調査によって、未盗掘の竪穴式石槨が発見され、短甲等の武具・馬具・鏡などが出土した⁽⁸⁾。竪穴式石槨の構造などから天狗山古墳と同様に、朝鮮半島との関連も指摘されている。天狗山古墳と同じ尾根の西下方に築かれた小塹古墳は測量調査によって墳長32m、天狗山古墳の二分の一の規模で築造されたことが指摘されている⁽⁹⁾。続く古墳時代後期に吉備で最初に畿内系の横穴式石室を備えた前方後円墳が築かれるのも二万の地である⁽¹⁰⁾。二万大塚古墳は墳長38mと小型の前方後円墳であるが、後円部に長さ9.1mの横穴式石室を備える。銅鏡や銅釧・鉄製武器・馬具などが出土している。二万地区には次のような逸話がある⁽¹¹⁾。660年に朝鮮半島の百済が唐・新羅連合軍によって滅ぼされた時、百済の遺臣達は日本に救援を求めた。時の齊明天皇は百済を助けるための軍を興すが、この時に二万人の兵が集まつたことから、二万郷と名付けられた。150年以上後の逸話だが、古墳時代中期末から後期にかけての二万地区の繁栄ぶりを反映しているのかもしれない。

古墳時代後期でも6世紀後半になると、箭田地区に箭田大塚古墳が築かれる⁽¹¹⁾。径約50mの円墳で、東南部に造り出しを持っている。主体部は全長19.1mの横穴式石室で、総社市のこうもり塚古墳、岡山市の牟佐大塚古墳とともに岡山県下三大巨石墳に数えられている。明治34年に発掘が行われ、单鳳環頭大刀柄頭や馬具など多くの副葬品が出土し、その一部は吉備寺に保管されている。

古代山陽道が通り、下道氏の本貫地であったため、真備町には飛鳥・奈良時代の遺跡も多く残されている。現在、真言宗御室派の吉備寺が立つ場所には箭田廃寺が存在していた。寺の庭には塔の芯礎等の礎石が残り、素弁蓮華文鬼板や重弁蓮華文鬼板が出土している。他にも岡田地区には岡田廃寺、妹地区に八高廃寺と同時期の古代寺院があり、箭田廃寺を含むこれら三寺院では備中式と称されるこの地域独特の瓦当文様を持つ軒丸瓦が知られている⁽¹²⁾。仏教と共に伝わった火葬の風習に伴う骨蔵器の発見も目につく。市場地区や妹地区などで墓地整備や工事中に偶然発見されたものが多いが、中には土師質の外容器に薬壺形の須恵器を収めた手厚いものもあり、吉備真備に近い人物の墓所だったのかも知れない⁽¹³⁾。尾崎地区では江戸時代に天平宝字7年(763)銘の買地券が掘り出されているこ

とも、吉備真備の存在と無関係ではないだろう⁽¹⁴⁾。

戦国期の真備地域は備中守護代であった庄氏の所領となるよう、矢掛町との境に猿掛城が築かれること⁽¹⁵⁾。猿掛城は標高298mの弥高山から北に派生した一支尾根先端に築かれており、眼下に山陽道と小田川を見下ろすことができる。小田川の対岸には標高315mの妹山が張り出してきており、山陽道と小田川を一度に扼する要衝に築かれた城と言える。また、近年小田川付け替え工事に伴い川辺地区と船穂町柳井原地区の境に所在する南山城跡が調査された⁽¹⁶⁾。小規模な城にもかかわらず、大規模な畝状堅堀などが確認され、高梁川が毛利氏と宇喜多氏の境目となった時期に毛利氏によって築かれた可能性が高いことが判明した。

大坂夏の陣の後は、真備地域には伊東氏が入り、江戸時代の大半を岡田に陣屋を置いたことから、岡田藩と呼ばれた。現在、陣屋跡は岡田小学校となっており、校内に陣屋で使われていた石組みの圍炉裏が残っている⁽¹⁾。

近代以降は、明治9年(1876)に箭田村、明治22年(1889)に二万村、呉妹村、菌村、岡田村が成立し、昭和25年に箭田村が箭田町に移行、その翌年には岡田村が川辺村と合併して大備村となる。昭和27年に、箭田町、二万村、呉妹村、菌村、大備村が合併して真備町が成立し、さらに昭和31年に穂井田村の北部が真備町に編入される⁽¹⁷⁾。平成17年、真備町の倉敷市への編入合併を経て、今日に至っている。

第2節 調査に至る経緯と経過

倉敷市真備町下二万地区に所在する有力古墳については、岡山大学考古学研究室によって「雄略朝プロジェクト」の名の下に平成10年から継続的な調査が行われた⁽¹⁰⁾。天狗山古墳を皮切りに、二万大塚古墳、勝負砂古墳と3基の有力墳が発掘調査され、雄略朝期にあたる5世紀後半から6世紀前半にかけて継続的に築造されたことが明らかとなった。この時期、吉備中枢の総社平野では墳長118mの宿寺山古墳を最後に巨大前方後円墳が姿を消し、6世紀後半のこうもり塚古墳まで大型古墳の築造が途絶えている。雄略天皇の治世には吉備勢力の反乱伝承が語られるなど、吉備地域で大きな政治的動乱があったことがうかがえる。総社平野の勢力衰退と入れ替わるように下二万地区に有力古墳が築かれたことは、このような事象を反映している可能性があると指摘されている。また、真備地域は奈良時代に吉備真備を輩出した下道氏の本貫地であるが、古墳時代前期から中期前半にかけては有力な古墳が認められない。そこに登場した下二万地区の有力古墳はまさに吉備真備のルーツを考える上で最も重要である。

現在、発掘調査の成果および調査によって導き出された各古墳の重要性を踏まえて、勝負砂古墳は県指定、天狗山古墳と二万大塚古墳は市指定の史跡となっている。しかし、史跡として十分な整備は行われておらず、日本遺産にも認定されている箭田大塚古墳(国史跡)と比較するとその認知度は低いと言わざるをえない。前述の重要性を踏まえれば、下二万地区に所在する古墳には箭田大塚古墳に匹敵する価値があり、それと一体的に整備・活用を諂ることが望ましく、また、吉備真備に繋がる遺跡として周知していく必要があるだろう。このため倉敷市教育委員会では下二万地区に所在する古墳について、その内容をさらに詳細に把握し、その歴史的価値を高めることを目的とした調査を実施す

ることとした。

下二万地区に数多くある古墳の中で、有力古墳ではあるが発掘調査が行われていないものとして、小塹古墳、経塹古墳（矢形2号墳）、内出1号墳がある。いずれも比較的規模が大きく、高い墳丘を持つ古墳であるが、測量調査が行われ、埴輪から天狗山古墳よりわずかに遡る時期の古墳とされる小塹古墳以外の2基は、築造時期を含めて詳細が不明である。そこで今回は、天狗山古墳を始めとする周囲の有力墳が帆立貝形や前方後円墳である中で、唯一の方墳であるという特異性を持っている内出1号墳の調査を実施し、その築造時期や構造などを把握することとした。

内出1号墳については、永山卯三郎の著した『吉備郡史 上巻』⁽¹⁸⁾に次のような記載があるのが最初である。

「六、内井出（打出）山上圓墳、

圓墳丘形 高九尺二寸 直径六六尺（十一間）

山下ヨリ埴輪圓筒ノ破片ヲ発見ス。

傳云、明治三十年頃發掘セラレ鈴 鏡 古刀ヲ出ス

ト云フ。」

径約20m、高さ約2.8mの円墳で、埴輪の破片が採集されること、明治30年頃に主体部が発掘され、鈴、鏡、刀が出土したことが記述されている。また、墳頂部には竪穴式石槨があり、盜掘を受けていたことが知られていた。

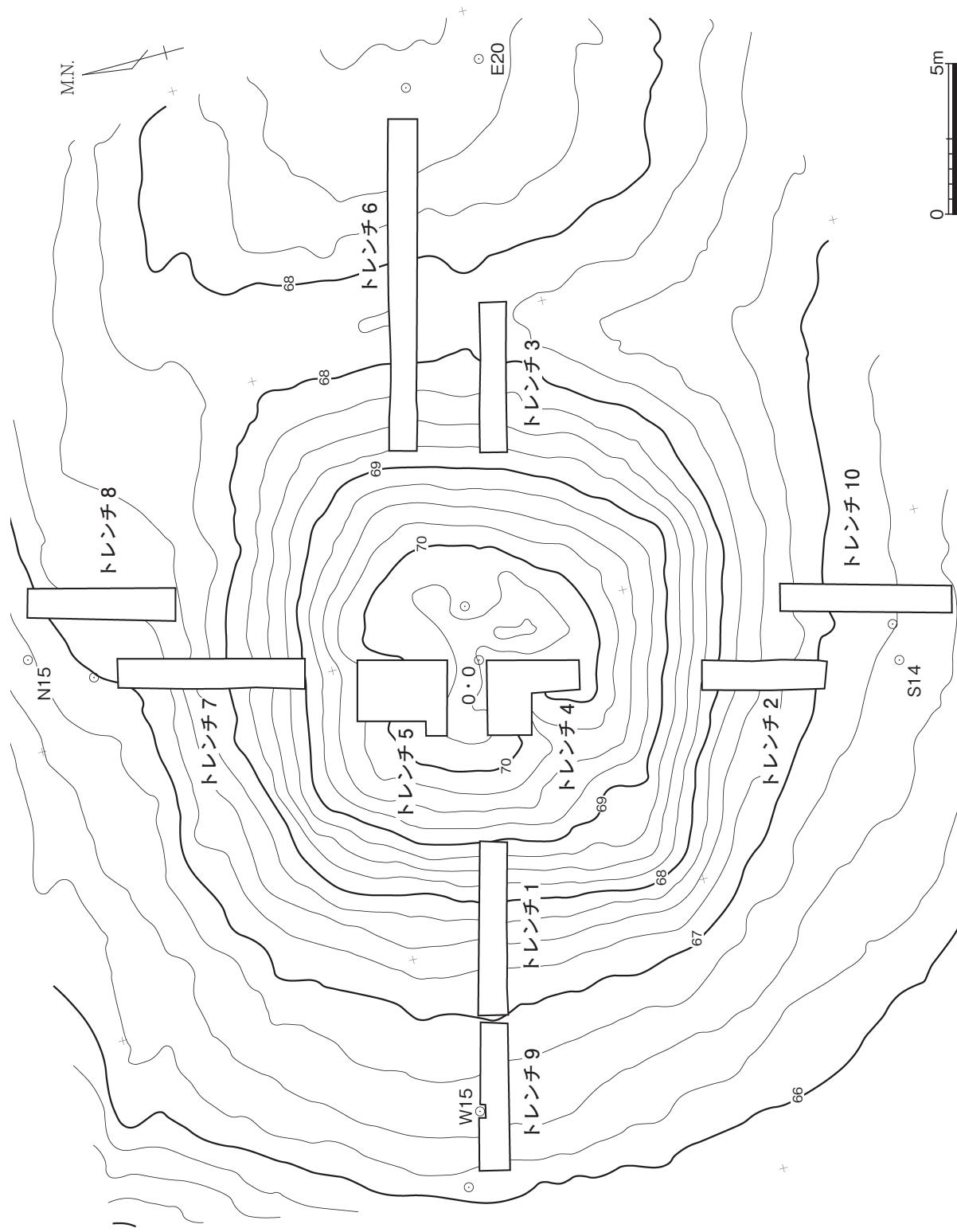
令和2年度には測量調査を実施し、一辺20m弱の方墳で、二段築成であることが推定された。また、墳頂部の比較的浅い位置に存在する竪穴式石槨はやや南寄りに位置していることが判明し、北側に平行してもう一つ埋葬施設が存在する可能性が考えられた⁽¹⁹⁾。

令和3年度の調査

初年度の調査は、墳丘の規模と外表施設及び墳頂南寄りに所在する竪穴式石槨の規模と構造の把握を目的として、令和3年10月26日から11月26日にかけて実施した。墳丘の北側を除く東西南の三方向にトレント1～3、墳頂部の竪穴式石槨の西よりにトレント4を設定した。墳丘に設定した3トレントでは、それぞれで墳端、埴輪列、葺石を確認することができ、東西の規模や構造を確認することができた。また、墳頂部に設定したトレント4においては、竪穴式石槨のおおよその規模が判明し、その構造が天狗山古墳、勝負砂古墳と類似したものであることが明らかとなった。

令和4年度の調査

2年目の調査は、墳頂北側に存在が推定されるもう一つの主体部と墳丘の南北の規模、ならびに東側の周溝の規模とその外側の状況を把握することを目的として、令和4年10月25日から11月28日にかけて実施した。墳頂部北よりにトレント5を、墳丘東側にはトレント3の北2mの位置に平行してトレント6を、墳丘北側にはトレント7を設定した。トレント5では想定していた主体部を確認できなかったが、2m以上の深さに掘り下げられた乱掘孔が確認された。トレント6では周溝の東側の肩を確認することができ、周溝の規模が確認できた。また、その外側には周堤等の遺構は確認されなかった。トレント7では墳丘北側の墳端、埴輪列、葺石を検出することができ、令和3年度に調査したトレント2と合わせて、墳丘南北の規模を確認することができた。また、周溝が北側にも続いている

第14図 トレンチ配置図 ($S=1/200$)

ることが確認された。

令和5年度の調査

3年目の調査は、墳丘外周部の構造、北側の周溝の規模、西側と南側の周溝の有無の確認を目的として、令和5年5月16日から6月7日にかけて実施した。墳丘北側にはトレンチ7から東へ1.3mの位置に平行してトレンチ8を、墳丘西側にはトレンチ1の西に続けてトレンチ9を、墳丘南側にはトレ

ンチ3の東側1.6mに平行してトレンチ10を設定した。トレンチ8では、周溝北側の立ち上がりを確認し、その規模を把握できた。しかし、盛土などをして周堤を成形した痕跡は認められなかった。トレンチ9では周溝は検出されず、さらに西側については緩やかに下っていく状況が確認された。トレンチ10では、墳丘の南側を区画する周溝を確認することができた。周溝の外側については、周堤は確認されなかった。また、墳端に須恵器の大型甕を設置していることも確認できた。

<調査日誌抄>

令和3(2021)年度

- 10月26日 器材搬入。T1～4を設定。T1・2・4の掘削開始。
10月27日 T3の掘削開始。
10月28日～11月4日 T1～T3において葺石および埴輪列を検出。
T4において豊穴式石槨の天井石3枚を確認。
11月5日 T4において豊穴式石槨の墓壙掘肩を検出。
11月9日 文化庁文化財第二課川畠調査官による現地視察および調査指導。
11月11日 T1の埴輪列・断面写真を撮影。
11月12日 T4の豊穴式石槨東小口を確認。T3の埴輪列・断面を写真撮影。
内出1号墳確認調査指導委員会。亀田委員、澤田委員、清家委員による調査指導。
11月16日 T2・T4の全景・断面等を写真撮影。
11月17日 T1～T3の葺石・埴輪列を写真実測。T2・T3の円筒埴輪取り上げ。
11月18日・19日 T1～T3の断面を実測・埋め戻し。
11月24日～26日 T4の豊穴式石槨を実測・埋め戻し。器材撤収。

令和4(2022)年度

- 10月25日 器材搬入。T5～7を設定・掘削開始。
10月26日 T5において乱掘孔を検出。T6において周溝の東側の肩を確認。
10月28日 T6において埴輪列を確認。T7において葺石を確認。
10月29日 T6において葺石を確認。T7において埴輪列を確認。
11月8日 T6の葺石・埴輪列を写真撮影・周溝の掘削完了。T7の周溝を掘削完了。
11月9日 T7の葺石・埴輪列を写真撮影。
11月11日 T7の断面を写真撮影。
11月12日 地元説明会を開催。26名が参加。
11月15日 T5の断面を実測。T6・T7の葺石・埴輪列を写真測量
内出1号墳確認調査指導委員会。亀田委員による調査指導。
11月16日 T6の断面を実測。
11月17日 T5・T7の断面を実測。T6・T7の埴輪を取り上げ。
内出1号墳確認調査指導委員会。澤田委員による調査指導。
11月18日 T5～7埋め戻し。器材撤収。

令和5(2023)年度

- 5月16日 器材搬入。T8～10を設定・掘削開始。
5月18日 T8の周溝内を掘削完了。T10を北側へ1m拡張。
5月23日 T10の拡張範囲で須恵器大型甕検出。
5月24日 T8の全景・断面を写真撮影。T9の断面を実測。

- 5月25日 T8の断面を実測。T9の全景・断面を写真撮影。
 T10の大型甕出土状況を写真撮影。
 内出1号墳確認調査指導委員会。亀田委員、澤田委員による調査指導。
- 5月26日 T8・T9埋め戻し。T10の大型甕出土状況を実測・取り上げ。
- 6月 1日 T10の全景・断面を写真撮影・断面等の実測。
- 6月 7日 T10埋め戻し。器材撤収。調査終了。

第3節 調査の組織

内出1号墳確認調査の事務及び発掘調査、報告書作成については、倉敷埋蔵文化財センターが担当した。また、事業の推進にあたっては、内出1号墳確認調査指導委員会及び文化庁文化財第二課、岡山県教育庁文化財課の指導助言を得た。

[内出1号墳確認調査指導委員会]

委 員 亀田修一 岡山理科大学生物地球学部教授（令和4年度より特任教授）
 委 員 澤田秀実 くらしき作陽大学音楽学部准教授（令和4年度より教授）
 委 員 清家 章 岡山大学学術研究院社会文化科学域教授

[指導・助言]

文化庁文化財第二課 文化財調査官 川畠 純
 岡山県教育庁文化財課 埋蔵文化財班総括主幹 河合 忍（令和4年度より総括副参事）
 埋蔵文化財班主幹 松尾佳子（令和4年度より副参事）

[調査体制]

教育長 井上正義（令和3～4年度）
 教育長 仁科 康（令和5年度）
 教育次長 黒瀬敏弘（令和3年度）
 教育次長 早瀬 徹（令和4～5年度）
 生涯学習部長 三宅健一郎（令和3～4年度）
 生涯学習部長 森 茂治（令和5年度）
 文化財保護課長 平田義雄
 埋蔵文化財センター館長 小野雅明
 埋蔵文化財センター主任 藤原好二
 埋蔵文化財センター学芸員 鍵谷守秀

調査にあたっては地権者をはじめとする地元の方々にはたいへんお世話になった。また、調査ならびに報告書の作成にあたって次の方々にはたいへん有益なご教示を賜った。記して感謝申し上げます。岡嶋隆司、寒川史也、木村 理、新納 泉、野崎貴博、原田悠希、伴 祐子、平井典子、福本 明、松木武彦、安川 満（敬称略）

第4節 調査の概要

1 調査区の概要

(1) 墳頂部(トレンチ4・5)の概要

調査前には墳頂部の乱掘孔に石材の一部が露出していたことから、箱式石棺あるいは竪穴式石槨の存在が推定された。また、この主体部は墳丘の中心からやや南寄りに位置することから、北側にも別の埋葬施設が存在することが想定された。このため、令和3年度に墳頂部南寄りに所在する主体部の構造と規模を把握するためにトレンチ4を、また、令和4年度に墳頂部の北寄りに想定された埋葬施設の有無を確認するためにトレンチ5を設定して調査を実施した。

トレンチ4(2.5m×3.1m・変形)(第15・16図)

トレンチ4は当初、乱掘孔に露出していた石材に係るかたちで、墳頂の基準点(0・0)から南へ25cm寄せ、東西2.5m、南北1.5mで設定したが、後に主体部の南側を確認するために、トレンチ東側部分を南へ1.6m拡大した。

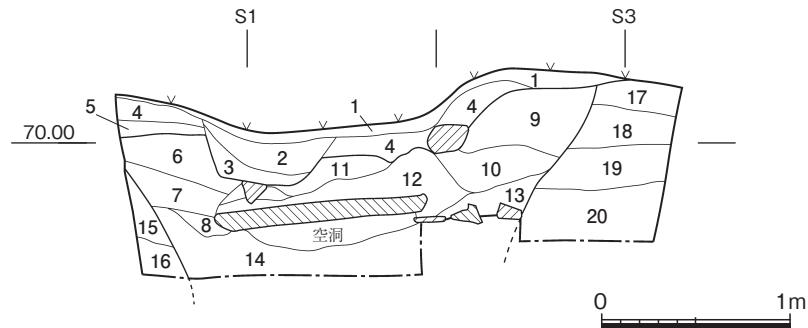
調査の結果、露出していた石材は竪穴式石槨の天井石であることが確認された。石槨の西半は大きく破壊されていたが、かろうじて東半部分は残存している状況であった。トレンチ調査であるため乱掘孔の輪郭は明確にできなかつたが、石槨西側の天井石が複数抜き取られ、小口部分の壁体も崩されていることから、乱掘は石槨西側から行われたことがわかる。また、トレンチ東壁の観察から、墓壙の存在も確認された。なお、副葬品などは全く検出されなかつた。

トレンチ内では東寄りで天井石3枚を確認している。最も西の1枚は長さ1.52m、幅0.35m、厚さ0.35mであるが、北側が下がった状態で、かろうじて半壊した壁体に架かっている。その東側のものは完全に北側が石槨内に落ち込んでいる。3枚目の天井石も北側が下がっているが、下側に10cm程の隙間があり、そこから石槨の東小口を覗くことができた。東小口は3枚目の天井石から東へ約1.3mの距離にあり、隙間が狭いため目視できなかつたが、天井石はさらに2~3枚が架かっていると推定される。なお、3枚目の天井石の上は淡黄色の被覆粘土(12層)が施されている。

石槨内は掘り下げていないため、石槨の高さや床の構造は不明である。トレンチ内においては壁面に当たる石材の残存状況が不良であるが、石の組み具合からかろうじて石槨北西コーナーと推定できる部分を確認することができた。石槨北西コーナーはNS0ラインから西へ1.82m、EW0ラインから南へ1.08mにあり、東小口との関係から石槨の長さは約3.0mと計測される。また、石槨の幅については、石槨北西コーナーと天井石の架かる石材の位置関係から、幅0.7~0.8mと推定される。なお、石槨の主軸は墳丘の東西辺および尾根に平行し、N-75°-Wとなる。

石槨東小口部分に関しては石積みがよく残っており、目視する限りでは、10~20cm大の石材を7~8段布積みにしていることが観察でき、下方の石材が比較的大きく、上方が小振りな傾向がある。また、石材と石材の間には粘土を詰めて固定し、壁面となる部分には赤色顔料を塗布しているようである。なお、その左右の側壁は内側に大きくはらみだしており、今にも崩れそうな状況である。

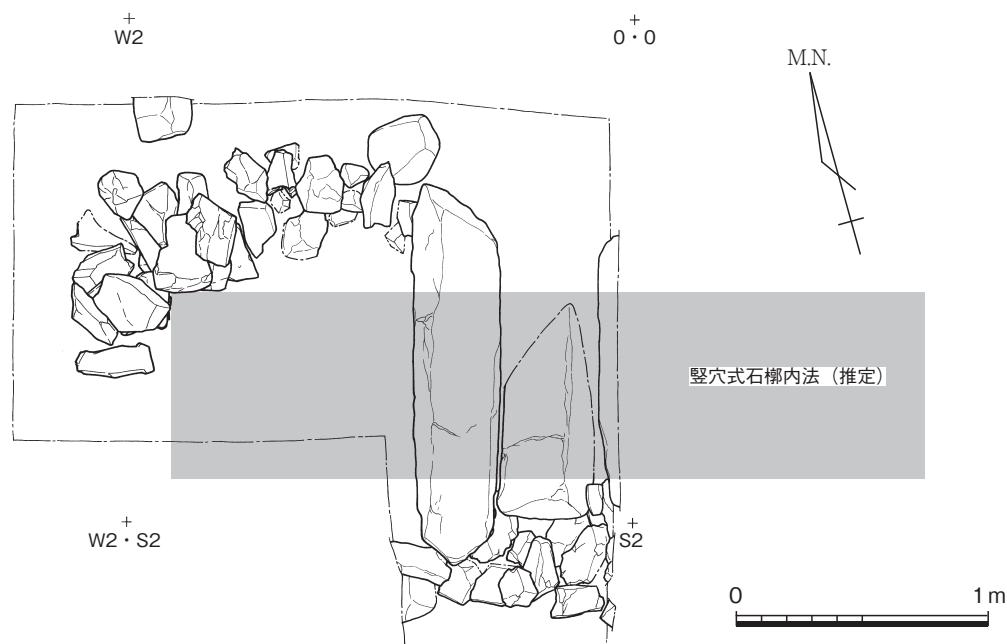
トレンチ内で見る限りでは、壁体の石材と墓壙の間にやはり10~20cm大の石材が詰め込まれているが、裏込石としては十分ではないようである。また、なるべく控長が長くなるように石材を積んで



トレンチ4東壁層序

1 黒褐色腐植土 (7.5YR3/1) 表土	11 にぶい橙色土 (7.5YR7/4) 墓壙内埋土
2 にぶい橙色土 (7.5YR7/3)	12 淡黄色粘土 (2.5Y8/3) 石槨被覆粘土
3 にぶい黄橙色土 (10YR7/3)	13 浅黄橙色土 (10YR8/4) 墓壙内埋土
4 浅黄橙色土 (10YR8/3)	14 明黄褐色土 (10YR7/6) 墓壙内埋土
5 浅黄橙色土 (10YR8/3)	15 黄橙色土 (10YR7/8) 墓丘盛土
6 浅黄橙色土 (10YR8/3) 墓壙内埋土	16 黄橙色土 (10YR7/8) 墓丘盛土
7 にぶい黄橙色土 (10YR7/4) 墓壙内埋土	17 にぶい黄橙色土 (10YR7/4) 墓丘盛土
8 明黄橙色土 (10YR7/6) 墓壙内埋土	18 浅黄橙色土 (7.5YR8/4) 墓丘盛土
9 浅黄橙色土 (7.5YR8/6) 墓壙内埋土	19 浅黄橙色土 (7.5YR8/3) 墓丘盛土
10 橙色土 (7.5YR8/8) 墓壙内埋土	20 にぶい橙色土 (7.5YR7/3) 墓丘盛土

第15図 トレンチ4東壁断面図 (S=1/40)

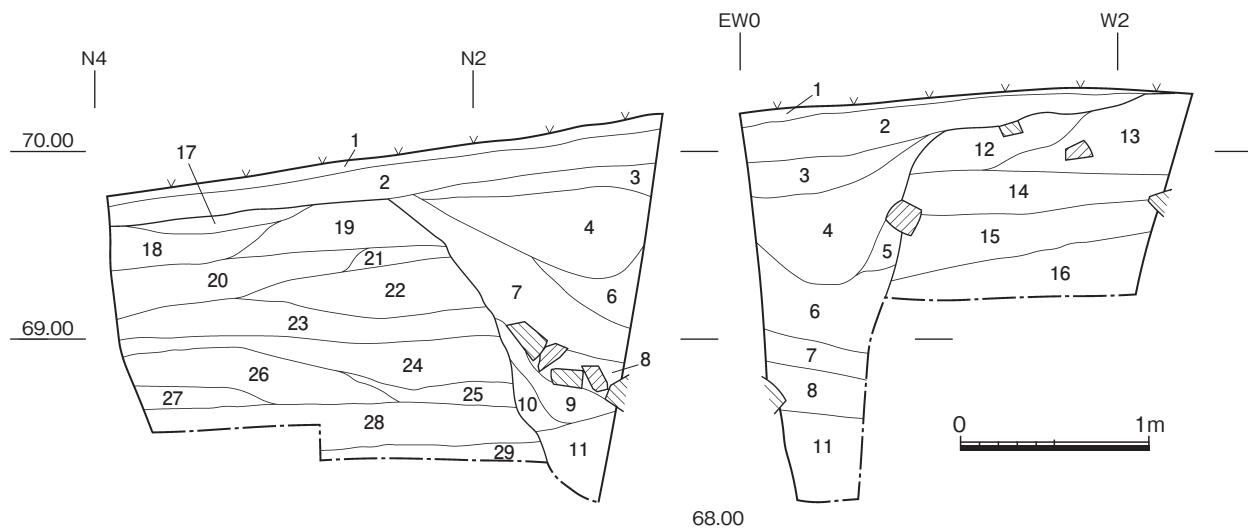


第16図 トレンチ4 竪穴式石槨平面図 (S=1/30)

いる傾向がうかがえる。

石槨の天井石は花崗岩で、壁体は地山の石、ホルンフェルスと考えられる。なお、NS0ラインから西へ90cmの壁体の裏側に、石槨主軸を挟んで対称的な位置に30cm大の花崗岩が配置されているが、その意味は不明である。

墓壙は墳頂部から掘り込まれており、石槨の被覆粘土を除くと墳丘盛土と同様に礫を多く含む土で



トレンチ5東壁・南壁層序

1 黒色腐植土	(7.5YR2/1)	表土
2 浅黄橙色土	(10YR8/3)	
3 白灰色微砂	(10YR8/2)	乱掘坑内埋土
4 にぶい黄橙色土	(10YR7/3)	乱掘坑内埋土
5 黄橙色土	(10YR8/6)	乱掘坑内埋土
6 浅黄橙色土	(10YR8/3)	乱掘坑内埋土
7 浅黄橙色硬質土	(10YR8/3)	乱掘坑内埋土
8 にぶい黄橙色土	(10YR6/3)	乱掘坑内埋土
9 にぶい黄橙色土	(10YR7/4)	乱掘坑内埋土
10 にぶい黄橙色土	(10YR7/3)	乱掘坑内埋土
11 にぶい黄橙色土	(10YR7/4)	乱掘坑内埋土
12 浅黄橙色土	(10YR8/3)	墳丘盛土
13 浅黄橙色土	(10YR8/4)	墳丘盛土
14 明黄褐色土	(10YR7/6)	墳丘盛土

15 にぶい橙色土	(7.5YR7/4)	墳丘盛土
16 橙色土	(7.5YR7/6)	墳丘盛土
17 浅黄橙色土	(10YR8/4)	墳丘盛土
18 浅黄橙色土	(10YR8/3)	墳丘盛土
19 浅黄橙色土	(10YR8/3)	墳丘盛土
20 白灰色土	(10YR8/2)	墳丘盛土
21 浅黄橙色土	(10YR8/3)	墳丘盛土
22 浅黄橙色土	(10YR8/3)	墳丘盛土
23 白灰色土	(10YR8/2)	墳丘盛土
24 浅黄橙色土	(10YR8/4)	墳丘盛土
25 浅黄橙色土	(10YR8/3)	墳丘盛土
26 にぶい橙色土	(5YR7/4)	墳丘盛土
27 明褐灰色土	(5YR7/2)	墳丘盛土
28 橙色土	(7.5YR6/8)	墳丘盛土
29 にぶい黄橙色土	(10YR7/2)	墳丘盛土

第17図 トレンチ5東壁・南壁断面図 (S=1/40)

埋め戻されているため、面的な検出が困難であった。トレンチ東壁では石槨南側の掘肩を確認できたが、北側については壁体が石槨内に崩れ落ちているため明確にしえなかつた。第15図で15・16層をきるラインは石槨内に土砂が流れ込んだ際の滑り面の可能性がある。

トレンチ5 (2.5m × 3m) (第17図)

墳頂部の北側には北に向かって開く浅い窪みが存在することから、これをもう一つの主体部の乱掘坑の痕跡ではないかと考え、トレンチ5を設定した。トレンチ5は、墳頂の基準点(0・0)から南へ50cmの地点から、東西2.0m、南北3.0mで設定したが、後に乱掘坑の西の肩を確認するために、南側部分を西へ50cm拡大した。

調査の結果、もう一つの埋葬施設を確認することはできなかったが、深さ2m以上に及ぶと推定される乱掘坑が確認された。南壁に係る掘肩はほぼ垂直に近く、東壁でみても約70°と急な角度で掘り込まれている。乱掘坑からは遺物が全く出土していないため、乱掘が行われた時期は不明確である。ただし、同様の乱掘孔は近隣の勝負砂古墳でも確認されており、この乱掘が勝負砂古墳の乱掘と近い時期に行われた可能性もある。

乱掘坑内の標高68.7～69.0m付近には15～20cm大の角礫を含む層(8層)が認められる。この角礫は、盛土中に含まれる他の角礫より大ぶりで、質もよいことなどから、石槨の壁体を構成していた石材と考えられる。南寄りの主体部の側壁が乱掘の影響によって崩れ落ちたものである可能性を考えられるが、やや距離があることや乱掘が南寄りの主体部よりさらに深くにまで及んでいることを考えると、さらに深い位置に別の埋葬施設があり、その壁体石材が掘り上げられている可能性も否定できない。

トレント内では地山に達することができなかったため、盛土の厚さは2m以上に及ぶことがわかる。また、盛土は28層の上面を境に上下で大きく異なっている。28層の上面は68.67m付近にあり、ほぼ水平である。28・29層は27層以上と異なり、地山礫をほとんど含まず、硬くしまった層である。28層と29層の境も確認できる範囲ではほぼ水平である。28層の上に盛られた26・27層は墳丘の外側から内側に傾斜するように盛られている。墳丘築造過程における土手状盛土の可能性があるが、限定された範囲での確認であり、盛った高さもやや低いことから、今後の検証が必要である。

(2) 墳丘(トレント1～3・6～10)の概要

トレント1～3・6・7は墳丘の構造を把握するために、古墳の四周に設定したトレントである。また、トレント8～10は周溝や周堤の有無を確認するために設定したものである。なお、各トレントは樹木等をよけて設定したため、中途半端な位置や長さで設定されているものもある。以下に個々のトレントについて解説する。

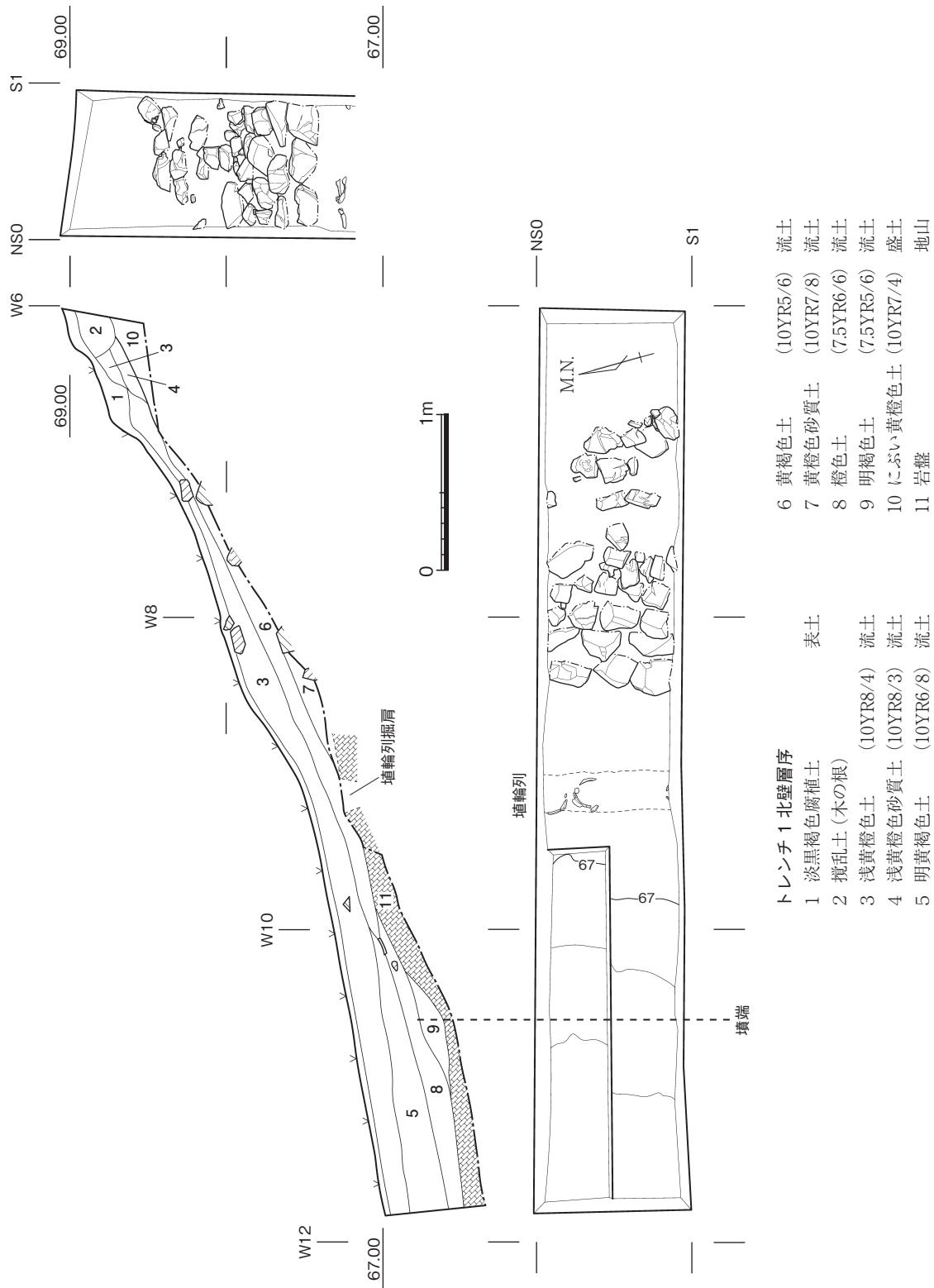
トレント1(1m×5.8m)(第18図)

トレント1は墳丘西側の構造を把握するために、墳頂の基準点(0・0)から西へ6mの地点から幅1.0m、長さ5.8mで設定した。その結果、葺石・埴輪列・墳端を検出することができた。

墳端は基準点(0・0)から西10.6m、標高66.6mにあり、その西は緩やかに下っている。埴輪列は基準点(0・0)から西へ約9mに南北方向に並んでいる。検出面の高さは、標高67.25mである。墳端から埴輪列までの距離は1.3m、この間は地山削り出しで、葺石を並べていた痕跡は確認できない。埴輪はトレント内の北側に2本があり、南壁にもう1本がわずかに掛かっているが、その間に1本分の空間がある。後世に抜き取られたような痕跡を確認できず、最初から置かれていなかった可能性もある。基底部を残すのみであるが、3本とも円筒埴輪のようで、地山に幅25cm程の溝を掘って据え付けられている。葺石の下端は基準点(0・0)から西へ約8.5m、標高67.4m付近にある。墳端と葺石下端の比高は約80cmである。また、埴輪列から葺石下端までの距離は約50cmである。トレント内で検出した葺石は、下端に30cm大の大きな石3個を並べ、上に行くほど石が小さくなる傾向があり、標高68mまでは横目地がよく通り、5列になるのが確認できる。それより上は標高68.5mまで認められるが、疎らで抜け落ちているものと考えられる。円筒埴輪以外の出土遺物としては、流土中より蓋などの形象埴輪が出土している。

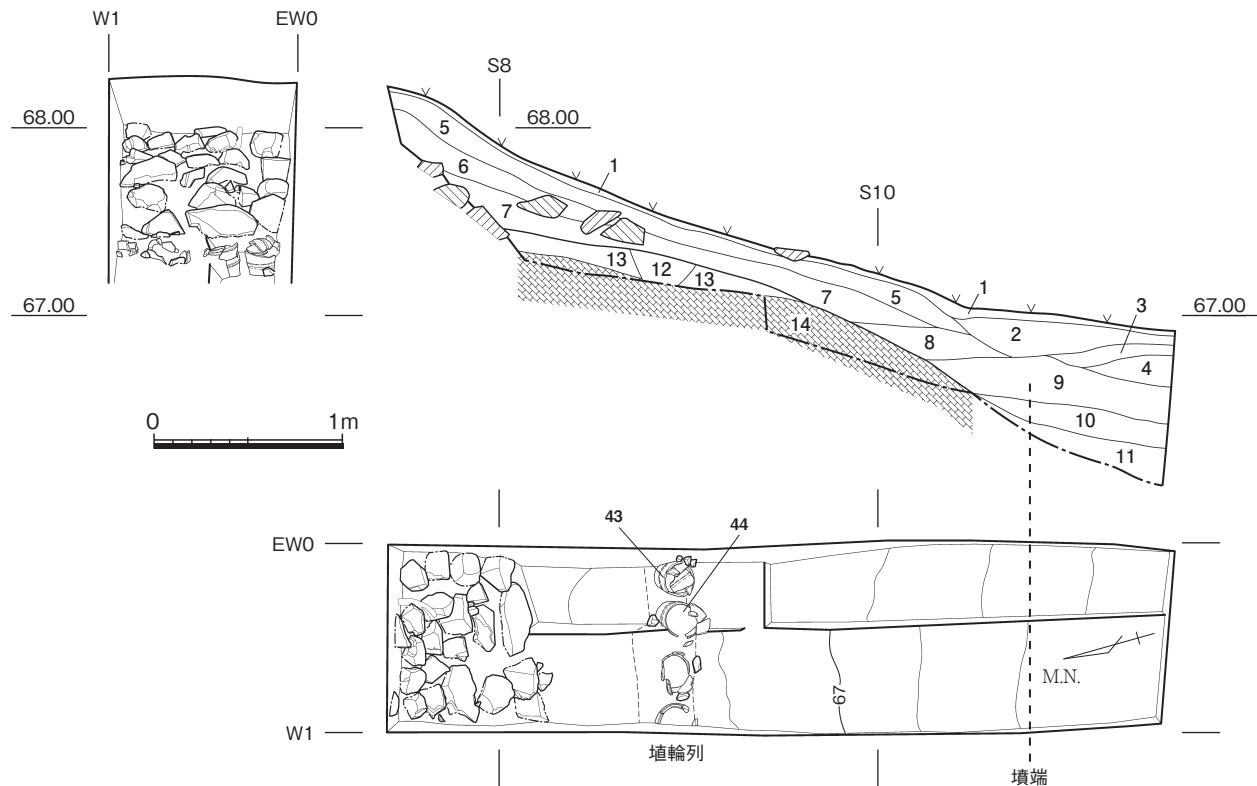
トレント2(1m×4.1m)(第19図)

トレント2は墳丘南側の構造を把握するために、墳頂の基準点(0・0)から南へ7.4mの地点から幅1.0m、長さ4.1mで設定した。ここでは葺石・埴輪列を検出することができたが、墳端については明確に押さえることができなかった。



第18図 トレンチ1北壁断面図・平面図・立面図 (S=1/40)

調査時には、墳端を基準点(0・0)から南10.6m付近と推定し、10・11層を自然堆積層と考えていた。しかし、令和5年度調査におけるトレンチ10の状況から、墳端は基準点(0・0)から南10.8m付近にあり、この付近の精査が不十分であったと考えられる。また、これに伴い10・11層は周溝内埋土の可能性がある。埴輪列は基準点(0・0)から南へ約8.9mに東西方向に並んでいる。検出面の高さは、



トレンチ2東壁層序

1 淡黒褐色腐植土	表土	8 にぶい橙色土 (7.5YR6/4) 流土
2 浅黄橙色土 (10YR8/4)	流土	9 にぶい黄橙色土 (10YR7/3) 流土
3 浅黄橙色砂質土 (10YR8/3)	流土	10 浅黄橙色硬質土 (10YR8/4) 周溝内埋土?
4 にぶい黄橙色土 (10YR7/4)	流土	11 にぶい黄橙色土 (10YR7/4) 周溝内埋土?
5 浅黄橙色土 (7.5YR8/4)	流土	12 明黄褐色土 (10YR7/6) 墓輪掘肩内埋土
6 にぶい黄橙色土 (10YR6/4)	流土	13 明黄褐色土 (10YR7/6) 盛土
7 にぶい黄橙色土 (10YR6/4)	流土	14 岩盤 地山

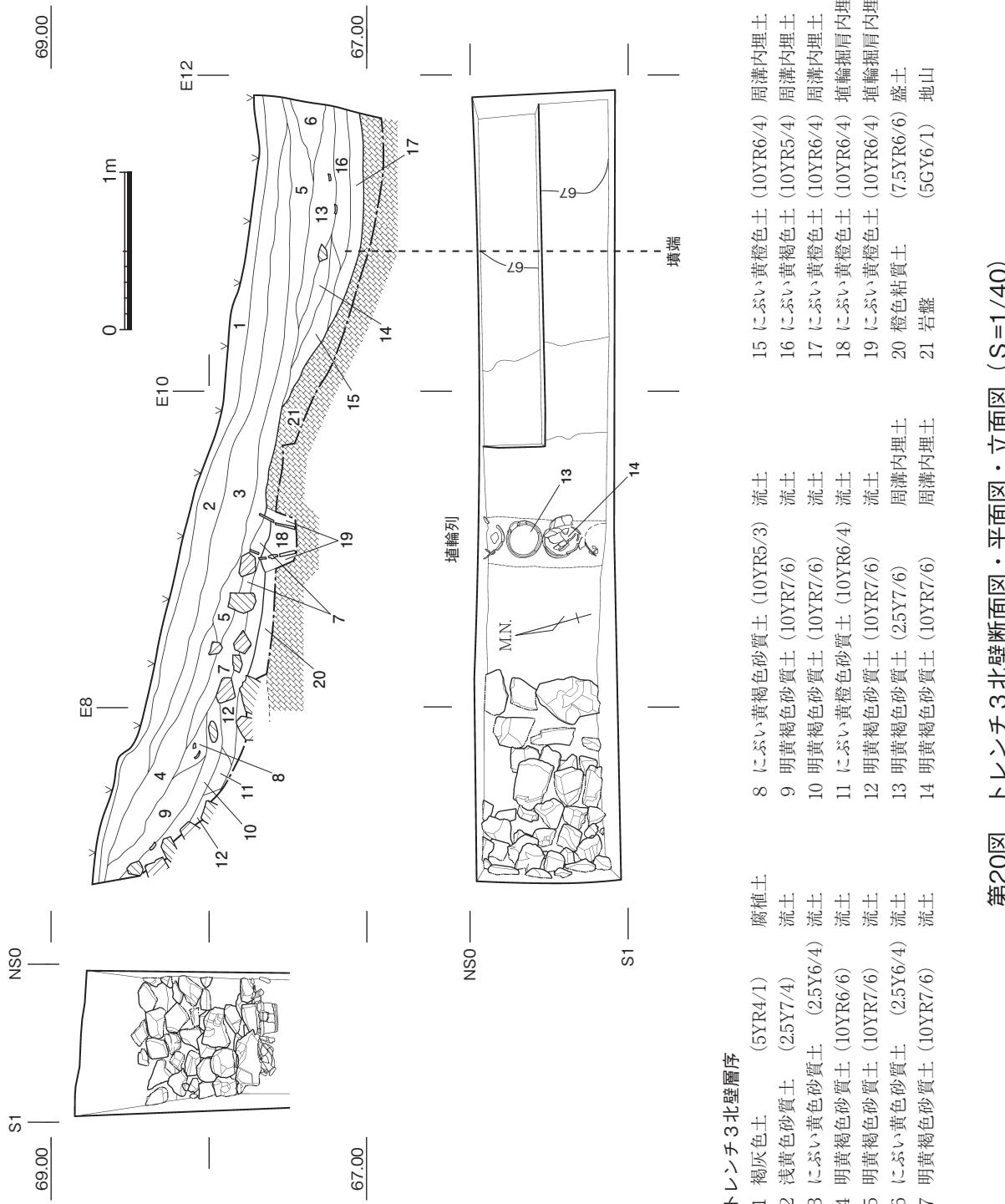
第19図 トレンチ2東壁断面図・平面図・立面図 (S=1/40)

標高67.35mである。墳端から墓輪列までの距離は約1.8m、墓輪列より南側では葺石を並べていた痕跡は確認できない。墓輪はトレンチ内に4本が確認でき、すべて円筒墓輪のようである。一段目の平坦面には厚さ10cm程の盛土がなされており、墓輪は盛土に幅30cm程の溝を掘って据え付けられている。葺石の下端は基準点(0・0)から南へ約8.3m、標高67.4m付近から始まる。墓輪列から葺石下端までの距離はトレンチ東側で約70cm、西側で約55cmと平行ではない。トレンチ内で検出した葺石は、標高68.0mまで、5列になるのが確認できる。下端の1列には長さ60cmほどの大きな石も使用されているが、上に行くほど石が小さくなっている。なお、トレンチ内で縦目地は確認できない。円筒墓輪以外の出土遺物としては、流土中より蓋形墓輪や須恵器・中世土器が出土している。

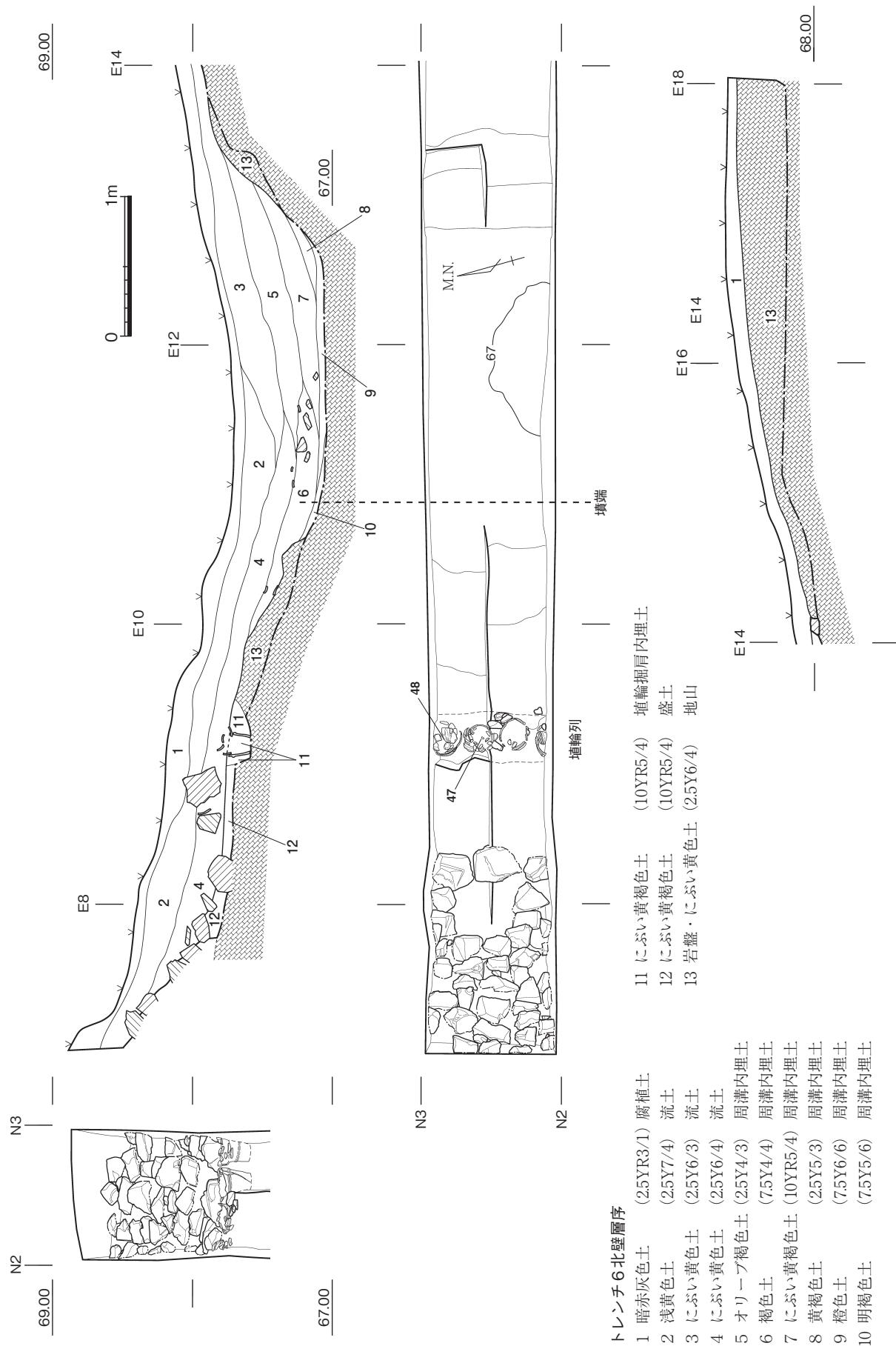
トレンチ3 (1m×5m) (第20図)

トレンチ3は墳丘東側の構造を把握するために、墳頂の基準点(0・0)から東へ6.9mの地点から幅1.0m、長さ5.0mで設定した。その結果、葺石・墓輪列・墳端を検出することができた。

墳端は基準点(0・0)から東へ10.9m、標高67.0mにあり、その東は周溝底で、東西方向にはほぼ水平となっている。墓輪列は基準点(0・0)から東へ約9mに南北方向に並んでいる。検出面の高さは、



標高67.7mである。墳端から埴輪列までの距離は約1.8m、この間は地山削り出しで、葺石を並べていた痕跡は確認できない。埴輪はトレンチ内に4本が並び、いずれも円筒埴輪のようである。一段目の平坦面には厚さ10cm程の盛土がなされており、埴輪列は幅25cm程の溝を掘って据え付けられている。葺石の下端は基準点(0・0)から東へ約8.2m、標高67.7m付近から始まる。墳端と葺石下端の比高は約70cmである。また、埴輪列から葺石下端までの距離は約80cmである。葺石の下端にはやはり長さ40cm程の大きなものが含まれる。2・3列目は小振りの石が並び、下端の石とほぼ同じ高さで



葺かれている。4列目には20cm大のやや大きな石が葺かれ、ここから1列ごとに高くなつて、墳丘二段目の斜面を形成している。トレンチ内では8列目までを確認している。なお、トレンチ内で縦目地は確認できない。

円筒埴輪以外の出土遺物としては、流土中より蓋形埴輪や朝顔形埴輪が出土している。

トレンチ6 (1m × 11.1m) (第21図)

トレンチ6は墳丘東側の構造及び周溝の規模、周溝外側の様子を把握するために、墳頂の基準点(0・0)から東へ6.9m、NS0ラインから北へ2mの地点から幅1.0m、長さ11.1mで設定した。その結果、葺石・埴輪列・墳端および周溝外側の立ち上がりを検出し、周溝の幅を確認することもできた。

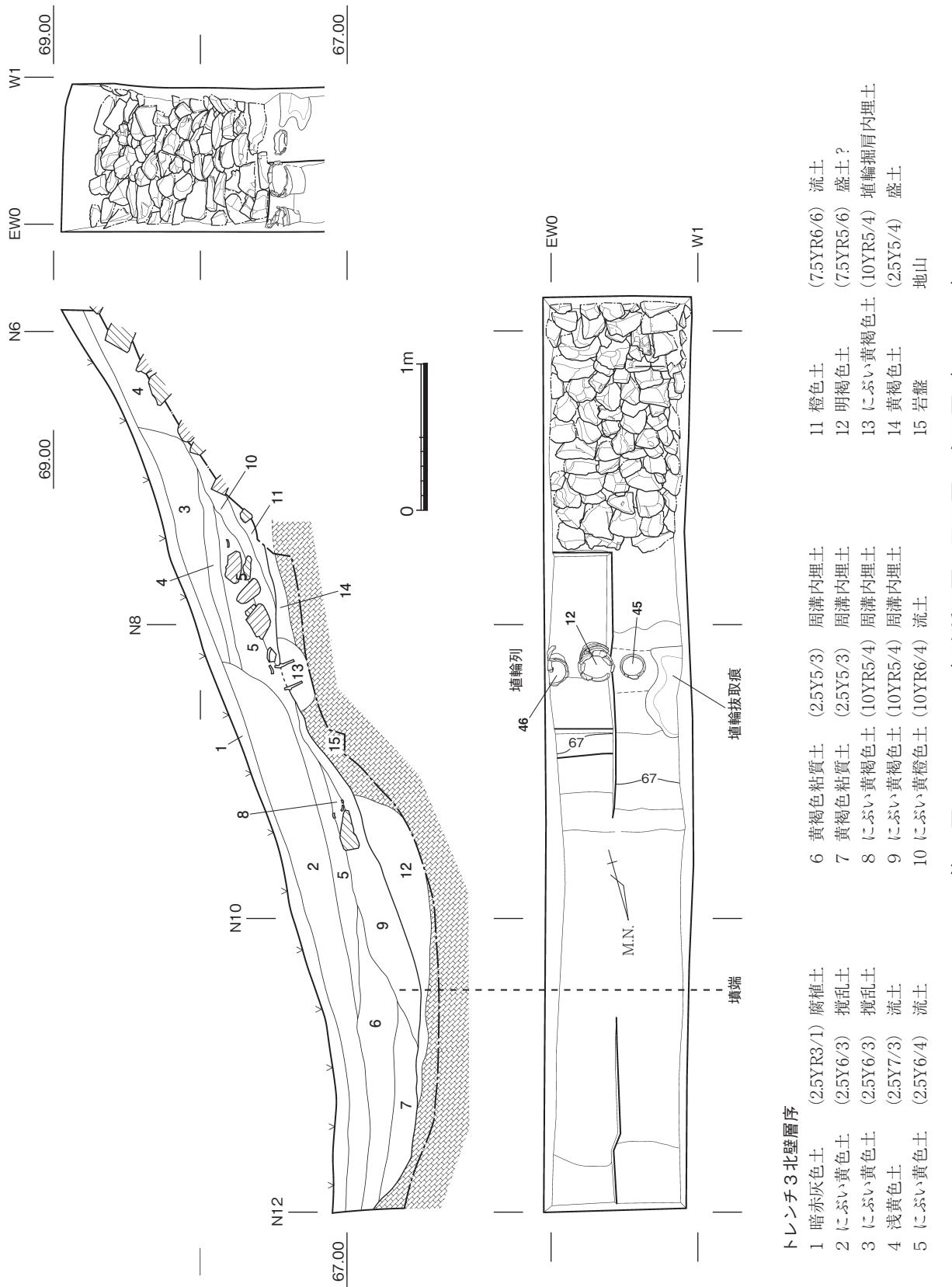
墳端はNS0ラインから東へ約10.8m、標高67.1mにあり、その東は周溝底で、ほぼ水平となつていて。埴輪列はNS0ラインから東へ約9mに南北方向に並んでいる。検出面の高さは、標高67.7mである。墳端から埴輪列までの距離は約1.4m、この間は地山削り出しで、葺石を並べていた痕跡は確認できない。埴輪はトレンチ内に4本が並び、いずれも円筒埴輪のようである。一段目の平坦面には厚さ6~7cm程の盛土がなされており、埴輪列は盛土と岩盤に幅35~40cm程の溝を掘って据え付けられている。葺石の下端はNS0ラインから東へ約8.4m、標高67.7m付近から始まる。墳端と葺石下端の比高は約60cmである。また、埴輪列から葺石下端までの距離は約60~70cmである。葺石の下端にはやはり長さ30cm程の大きなものが含まれる。トレンチ3と同様に2・3列目は小振りの石が並び、下端の石とほぼ同じ高さで並べられている。4列目には20cm大のやや大きな石が葺かれ、ここから1列ごとに高くなつて、墳丘二段目の斜面を形成している。トレンチ内では8列目までを確認している。なお、トレンチ内で縦目地は確認できない。一方、墳端から東へは周溝底がほぼ水平に1.8m程続き、NS0ラインから東へ約12.6mで周溝外側の立ち上がりとなる。周溝外側の肩は、NS0ラインから東へ約13.4m、周溝底との比高差は80cm程である。

出土遺物としては円筒埴輪のほかに朝顔形埴輪がある。

トレンチ7 (1m × 6.1m) (第22図)

トレンチ7は墳丘北側の構造及び周溝の有無を確認するために、墳頂の基準点(0・0)から北へ5.9mの地点から幅1.0m、長さ6.1mで設定した。その結果、葺石・埴輪列を検出し、さらに墳丘の北側に周溝が存在することを確認できたが、墳端については課題を残した。

まず、墳端付近については他のトレンチの様相と異なり、地山をやや急な角度で削り込み、そこに明褐色土(12層)が堆積していることが確認された。この掘削は人為的なものと考えられるが、明褐色土(12層)に遺物が含まれておらず、時期は不明確であり、古墳築造以前の遺構の可能性もある。古墳に伴うものとすれば、後述のトレンチ10で確認された大型甕のようなものを据え付けるための掘削の可能性も考えられる。いずれにしても、すぐ上に堆積したにぶい黄褐色土(9層・埴輪片を含む)からが周溝内埋土であり、明褐色土(12層)の上面が墳丘第一段斜面と考えられる。その場合、墳端は基準点(0・0)から北へ10.5m、標高66.5m付近となるが、平行するトレンチ8では後述のように基準点(0・0)から北へ10.0mより内側に墳端が位置すると想定されることから、この付近だけの例外的な様相の可能性が高い。周溝底は基準点(0・0)から北へ11.7m付近まで緩い登り傾斜で、その外側は傾斜が急になり、周溝外側の立ち上がりと考えられた。



埴輪列は基準点(0・0)から北へ約8.3m付近に東西方向に並んでいる。検出面の高さは、標高67.5mである。墳端から埴輪列までの距離は約2.1m、比高差は約1.0m、この間は葺石を並べていた痕跡は確認できない。埴輪は本来はトレンチ内に4本が据えられていたようであるが、最も西側の埴輪については抜き取られたと考えられる搅乱坑が検出された。残る3本はいずれも円筒埴輪のようである。なお、一段目の平坦面には厚さ10cm程の盛土がなされており、埴輪列は幅30～50cm程の溝を掘って据え付けられている。

葺石の下端は基準点(0・0)から北へ約7.5m、標高67.5m付近から始まる。墳端と葺石下端の比高は約1.0mである。また、埴輪列から葺石下端までの距離は約60cmである。葺石の下端には長さ30cm程の石が使用されているが、上方にも同じくらいの石が積まれており、特に下段に大きな石が置かれているというように見えない点も他のトレンチとは異なっている。トレンチ内では13～14列目までを確認しており、7列目までは横目地がよく通っているが、それより上はやや乱れている。なお、トレンチ内で縦目地は確認できない。

出土遺物としては円筒埴輪のほかに蓋形埴輪がある。

トレンチ8 (1m×5m) (第23図)

トレンチ8は墳丘北側の周溝の規模および周堤の有無を把握するために、墳頂の基準点(0・0)から北へ10.1m、EW0ラインから東へ1.4mの地点から幅1.0m、長さ5.0mで設定した。その結果、周溝の外側の立ち上がりを確認できた。また、盛土を施したような周堤は確認されなかった。なお、トレンチ内で墳端は確認できておらず、さらに墳丘側になると想定される。

周溝底は標高66.9m付近で、ほぼ水平である。基準点(NS0)から北へ約11.3m付近で周溝の北側の立ち上がりが始まり、約12m付近に外側の肩があると推定される。この付近は岩脈や木の根の搅乱によって土層が乱れているため、肩の正確な位置は不明である。周溝の外側には盛土等ではなく、自然の地形が少しづつ下っている状況である。

遺物としては周溝内埋土から埴輪片が少量出土している。

トレンチ9 (1m×5m) (第24図)

トレンチ9は墳丘東側の周溝および周堤の有無を把握するために、トレンチ1の延長線上、墳頂の基準点(0・0)から西へ12m地点から西へ幅1.0m、長さ5.0mで設定した。その結果、ここでは周溝も周堤も確認されなかった。

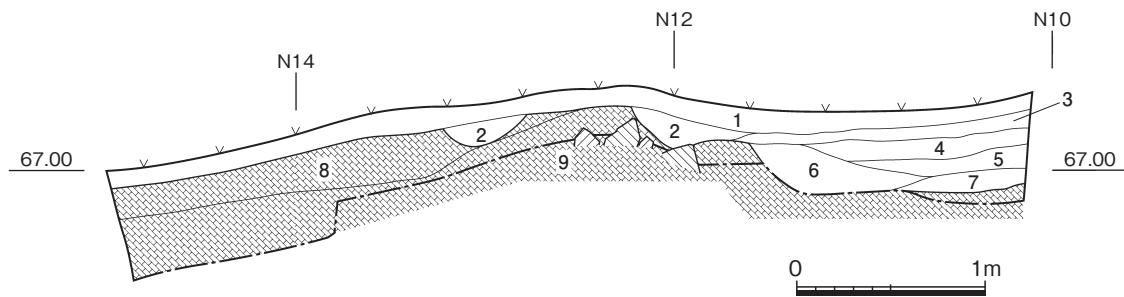
基準点(0・0)から西へ14mまでは地山がほぼ水平に続く。14m付近に岩脈があって、少し土層が乱れているが、ここから西へは自然に下っていくようである。

遺物としては流土中から円筒埴輪片や形象埴輪片が出土している。

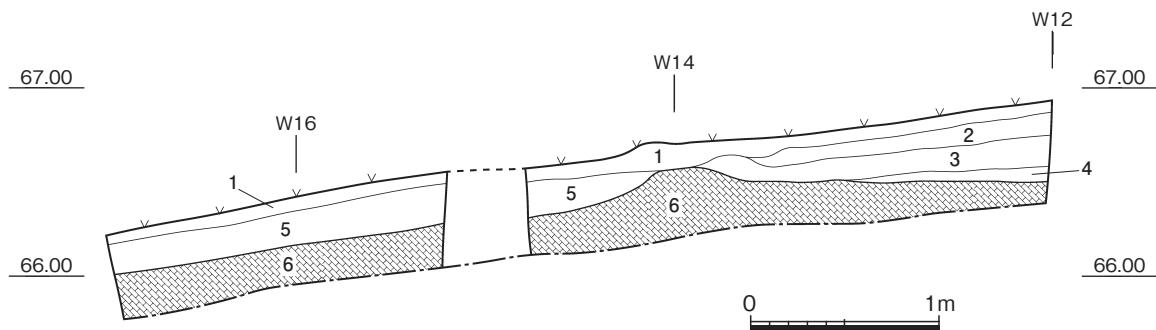
トレンチ10 (1m×5.8m) (第25・26図)

トレンチ10は墳丘南側の周溝および周堤の有無を把握するために、墳頂の基準点(0・0)から南へ10m、EW0ラインから東へ1.5mの地点から幅1.0m、長さ5.8mで設定した。その結果、周溝の存在を確認できたが、盛土を施した周堤等は確認されなかった。また、墳端に孔をうがって大型甕を設置していたことがわかった。

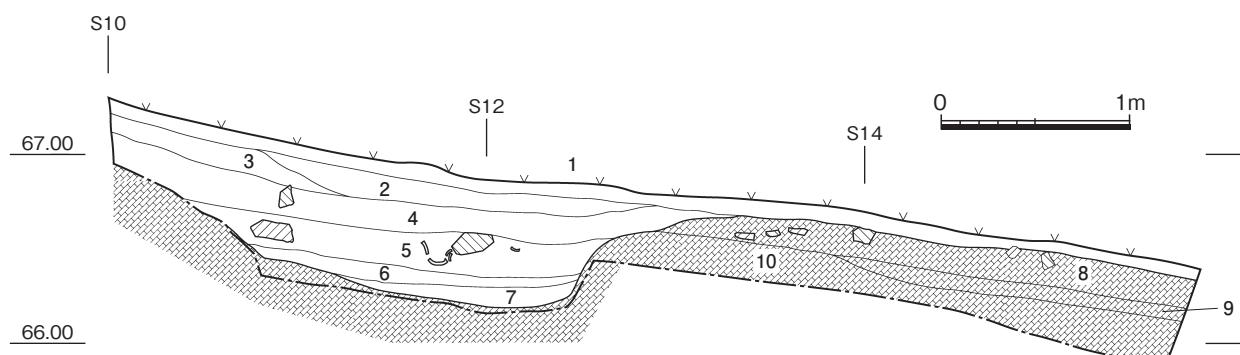
墳端はNS0ラインから南へ10.8m、標高66.5mにあり、その南は周溝底で、やや南向きに下がつ



第23図 トレンチ8東壁断面図 (S=1/40)



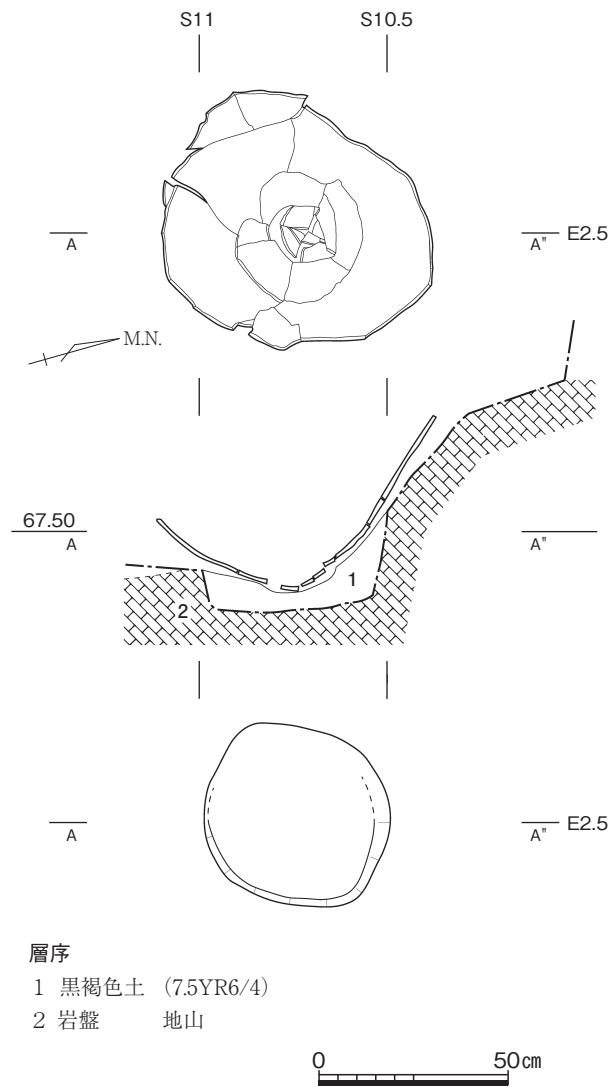
第24図 トレンチ9北壁断面図 (S=1/40)



トレンチ10東壁層序

1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 腐食土	6 橙色土 (7.5YR6/6) 周溝内埋土
2 浅黄色土 (2.5Y7/4) 流土	7 灰黄色土 (2.5Y6/2) 周溝内埋土
3 黄褐色土 (2.5Y5/3) 流土	8 にぶい黄色土 (2.5Y6/3) 自然堆積層
4 にぶい黄色土 (2.5Y6/4) 流土	9 黄褐色土 (2.5Y5/3) 自然堆積層
5 黄褐色土 (2.5Y5/3) 周溝内埋土	10 岩盤 地山

第25図 トレンチ10東壁断面図 (S=1/40)



第26図 トレンチ10
大型甕出土状況 (S=1/20)

い平坦面を有し、3はその平坦部に浅い凹線状のくぼみを持つ。受け部は短く横に延び、端部は丸くおさめている。2・3の立ち上がりはほぼ垂直であるが、他はやや内傾している。

6～10は高壺である。6・7は、やや丸みをおびた壺部に先端部がわずかに外傾する口縁部を持つ。7は、2条の突帯下に櫛描き風の沈線文が施されている。8・9は有蓋高壺である。8のつまみは全て失われており、その剥離痕が残っているのみである。天井部中央内面には、直径2.6cm程度の同心円当て具痕がいくつも重なって残っている。9は、破片は少ないものの図面上で完形に復元できたものである。口径10.2cm、器高9.5cmを測り、壺部の立ち上がりはわずかに内傾し、受け部はやや下方に張り出している。壺部下半から脚部上位にかけてはカキ目を施し、脚端部の平坦面には2条の浅い凹線をめぐらす。また、脚部には三角形の透かし孔が3か所認められる。10は内外面ともナデが施された丁寧なつくりの脚部で、透かし孔は認められない。全体的につくりがシャープで、胎土や焼成、色調など、9とはタイプの違う高壺である。

11は壺である。胴部中央やや上寄りに2条の凹線をめぐらし、その間に刺突文を施している。胴

ている。周溝外側の立ち上がりはNS0ラインから南へ12.4m、標高66.2m付近から始まり、肩へと続く。周溝外側の肩はNS0ラインから南へ12.6m、標高66.6m付近であり、その外側は南に向かってなだらかに下っていく。

須恵器の大型甕はNS0ラインから南へ10.75m、ちょうど墳端にあたる線上に設置されていた。EW0ラインからは東に2.5mとなる。大型甕を設置するにあたっては、墳丘一段目の地山を抉って、そこに直径50cm、深さ10cm程の孔を開けている。大型甕はここで潰れた状態で検出された。

出土遺物としては、大型甕以外にも須恵器甕2点、須恵器高壺1点、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪の可能性のあるものがある。

2 遺 物

(1) 須恵器(第27図)

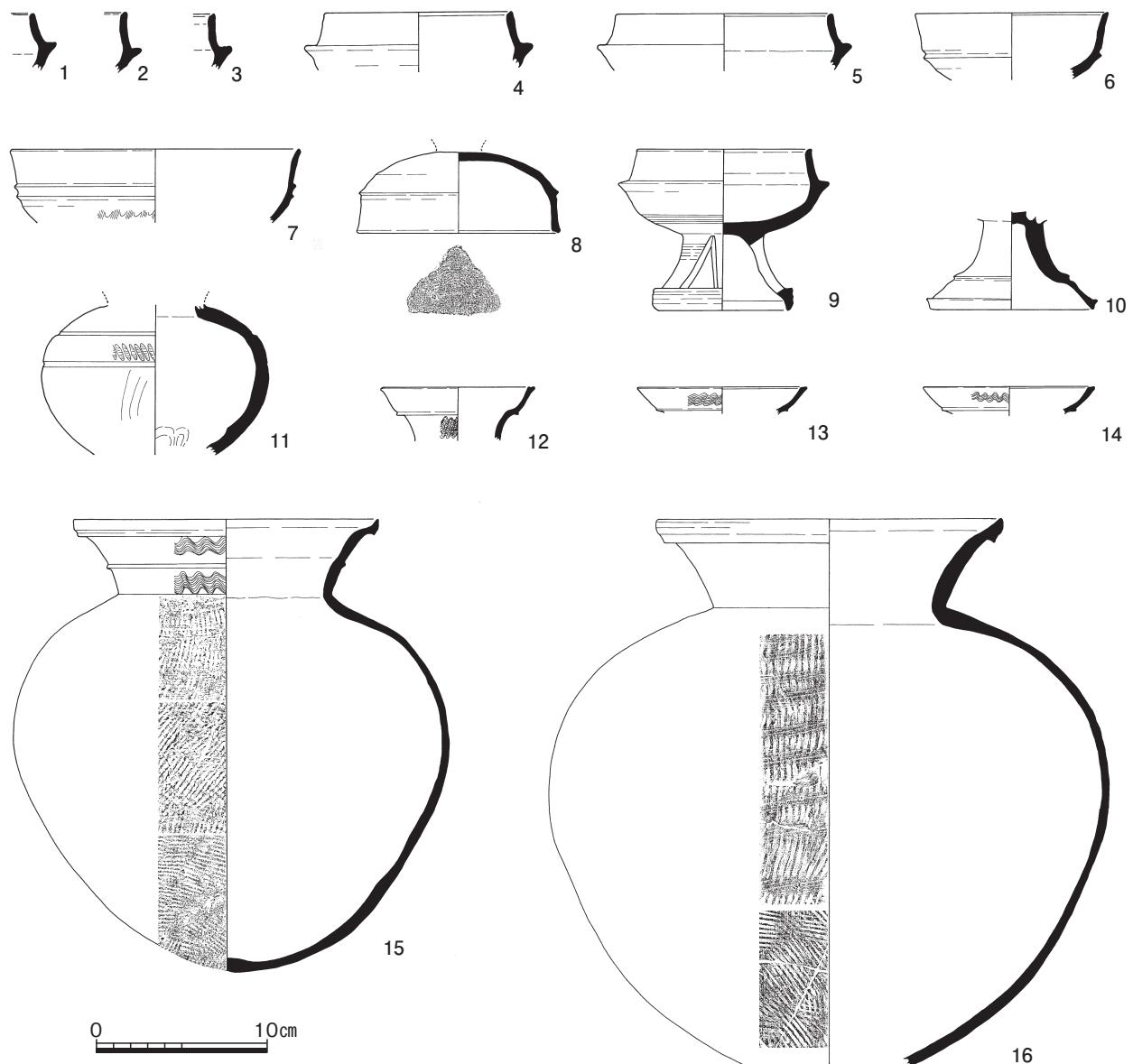
今回の調査で出土した須恵器は、古墳の南側に設定したトレンチ2及びトレンチ10からのものに限られ、その量も概して少ない。また、トレンチ10から出土した甕を除けばその多くが小片で、全体的な形状がわかるものも少ない。

1～5は壺身で、1～3については小片のため口径は不明である。いずれも立ち上がりの端部に狭

部下半にはヘラ記号と思われる3条の沈線が認められ、内面下端には指頭圧痕が残る。

12～14は頸である。12は頸部に、13・14は口縁部にそれぞれ櫛描き波状文を有する。13・14は大きく外方へ広がる口縁部を持ち、その端部を平坦に仕上げている。12の口縁端部もほぼ平坦であるが、中央部を凹線状に浅く凹ませている。

15・16は中型の甕で、いずれもトレンチ10から出土した。15は、肩の張った胴部と逆ハの字形に開く頸部をもつ。断面三角形の小さな突帯で上下二段分けられた頸部には、それぞれ櫛描き波状文を有する。胴部外面の上2/3にはやや粗い平行叩きを、下1/3にはやや細かい平行叩きを施している。胴部内面には直径4cm程度の同心円当て具痕がわずかに残っている。16は15とほぼ同じ器形をもつがひと回り大きく、頸部には突帯や櫛描き波状文は認められない。胴上半部には、縦方向の平行叩きを、下半部には不定方向の平行叩きを施す。また、胴上半部には、幅8mm程度の板状工具によると思われる3～5条の深い沈線が横方向にめぐっている。胴部内面には15と同様、直径4cm程度の同心円当て



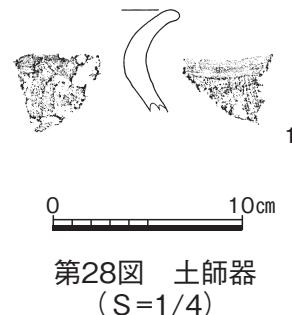
第27図 須恵器 (S=1/4)

具痕がわずかに認められる。なお、今回報告できなかつたが、トレンチ10からは大型の甕がもう1点、墳端部に据えられた状態で検出されている。

今回出土したこれら須恵器の年代については、小片が多くまた個体数も少ないため、多くを明らかにすることは困難であるが、**8・9**は概ねTK23からTK47、**10**はそれより1段階古いTK208の特徴を有していると思われ、実年代としては5世紀中頃から末頃にかけての時期が考えられる。

(2) 土師器(第28図)

1は土師器の甕と考えられる。トレンチ10の流土中から出土した。肩部の接合する破片がいくつかあるが、全体形は不明である。口縁部はナデ調整で、端部を丸く收める。頸部より下は、外面に縦方向のハケメが認められ、内面はヘラケズリで仕上げられている。胎土には0.5~2mm大の石英・長石が多く含まれ、内外面ともに明るい赤褐色(5YR5/6)を呈する。



第28図 土師器
(S=1/4)

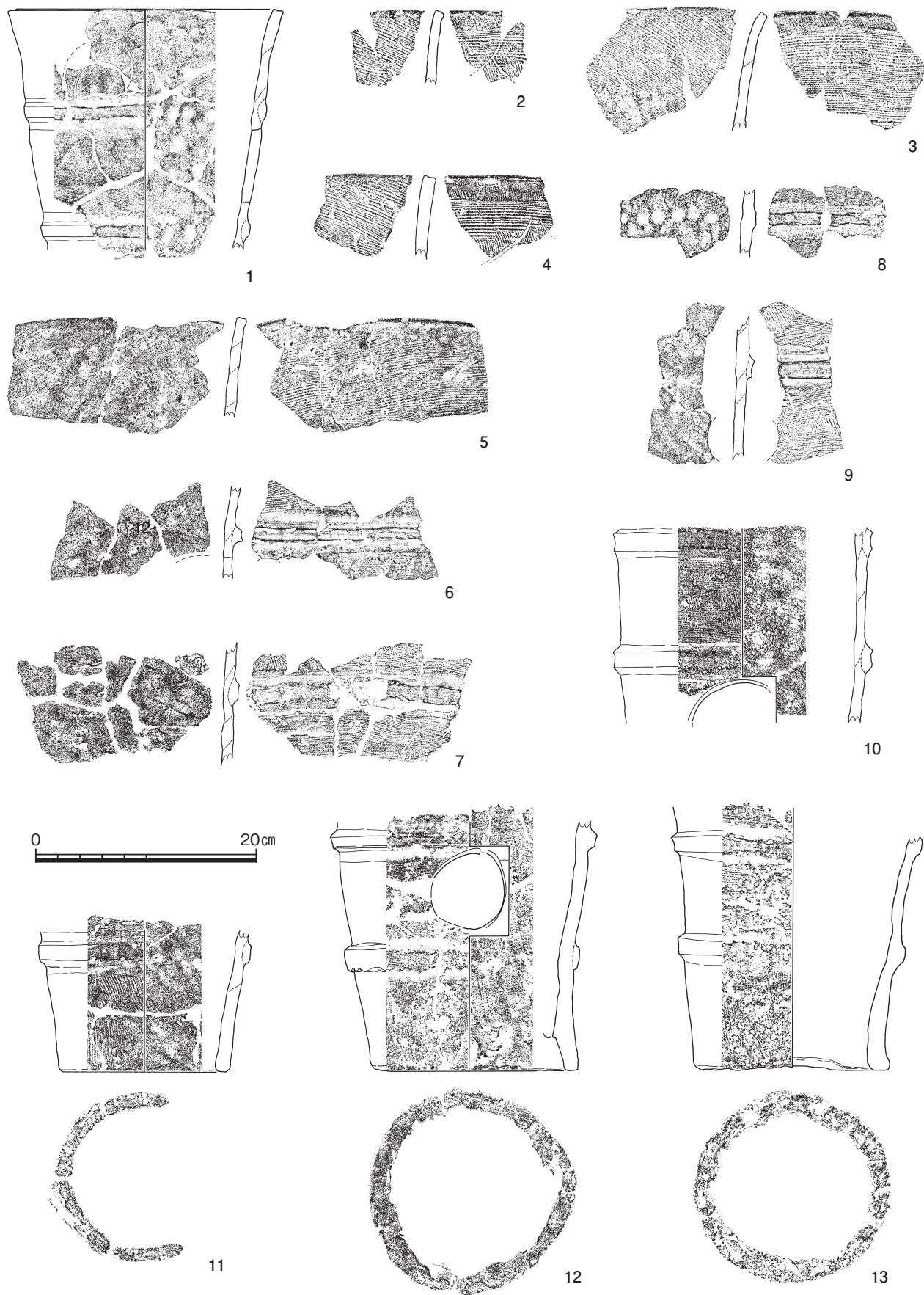
(3) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(第29~33図)

埴輪は墳頂部のトレンチ4・5を除く墳丘の各トレンチから出土している。埴輪列の原位置にとどまるものは18個体を確認しているが、すべてを取り上げたわけではなく、半数の9個体を持ち帰っている。また、流土中からも多数が出土しており、これらのの中には墳頂から流れ落ちてきたものも含まれていると考えられる。なお、完形に復元できたのは2個体のみであった。黒斑のあるものは認められず、須恵質のものが含まれている。以下、円筒埴輪については外面調整のヨコハケの有無によって分けて解説する。

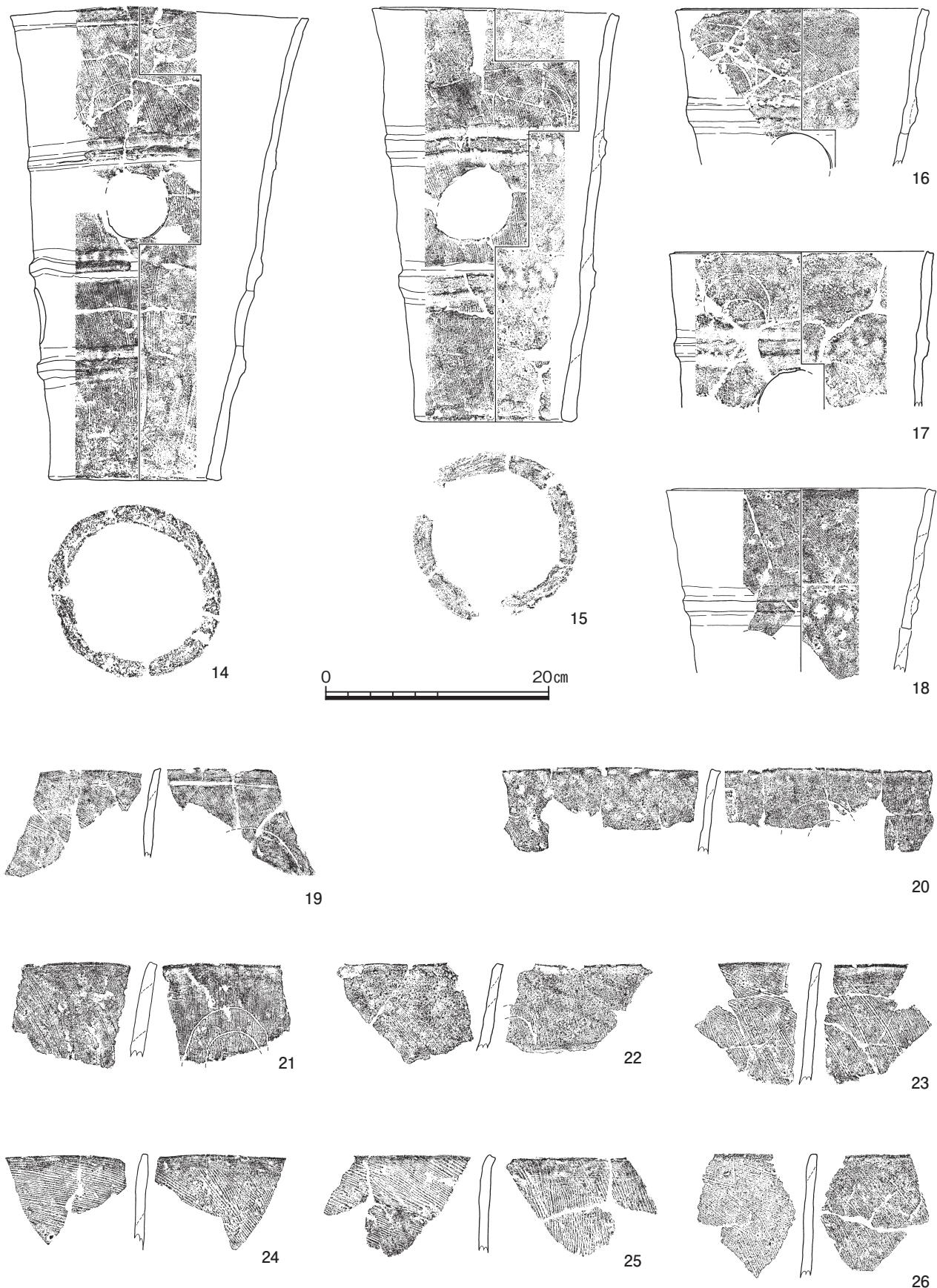
1~13は外面にヨコハケを施す個体である。静止痕が斜めに傾くBd種ヨコハケが卓越するが、Bc種ヨコハケと思われる個体(**3・12**)も認められる。**1・12**のようにハケメの密度が10本/cmを越える細かいものがある一方、**2~5・10・11**のように5本/cm程度の目の粗いものやその中間的なものもあり、数種類のハケ工具が使用されたことがわかる。**6**は突帯の上下でハケメの粗密が異なっており、1個体に2種類のハケ工具が使用されたことがわかる。**1・10**などからはヨコハケの静止痕が3.5~4cm間隔であることがわかる。**1~5**の口縁をみると、端部整形はヨコナデで、端面は強いナデによって凹んでいる。突帯は強いヨコナデで成形されており、突出度が弱く、断面が偏平なものが多い。**12**の最下段突帯のみは押圧技法で成形されている。内面調整は、ナナメハケのもの(**2~4**)と斜め方向のナデのもの(**1~5・12**)がある。突帯の内面には、突帯を貼り付ける際の指圧痕が認められる。**13**は焼成があまく、内外面の剥離が著しいため、調整の観察が困難であるが、第二段に透かし孔が開けられていないことが確認できる。底径は**11**が15.4cmに復元でき、**12・13**は18cm前後と一回り大きい。

14~49は外面調整がタテハケあるいはナナメハケの個体である。**14~35**は内面にタテハケあるいはナナメハケが認められ、**36~49**は内面に斜め方向の強いナデが施される。

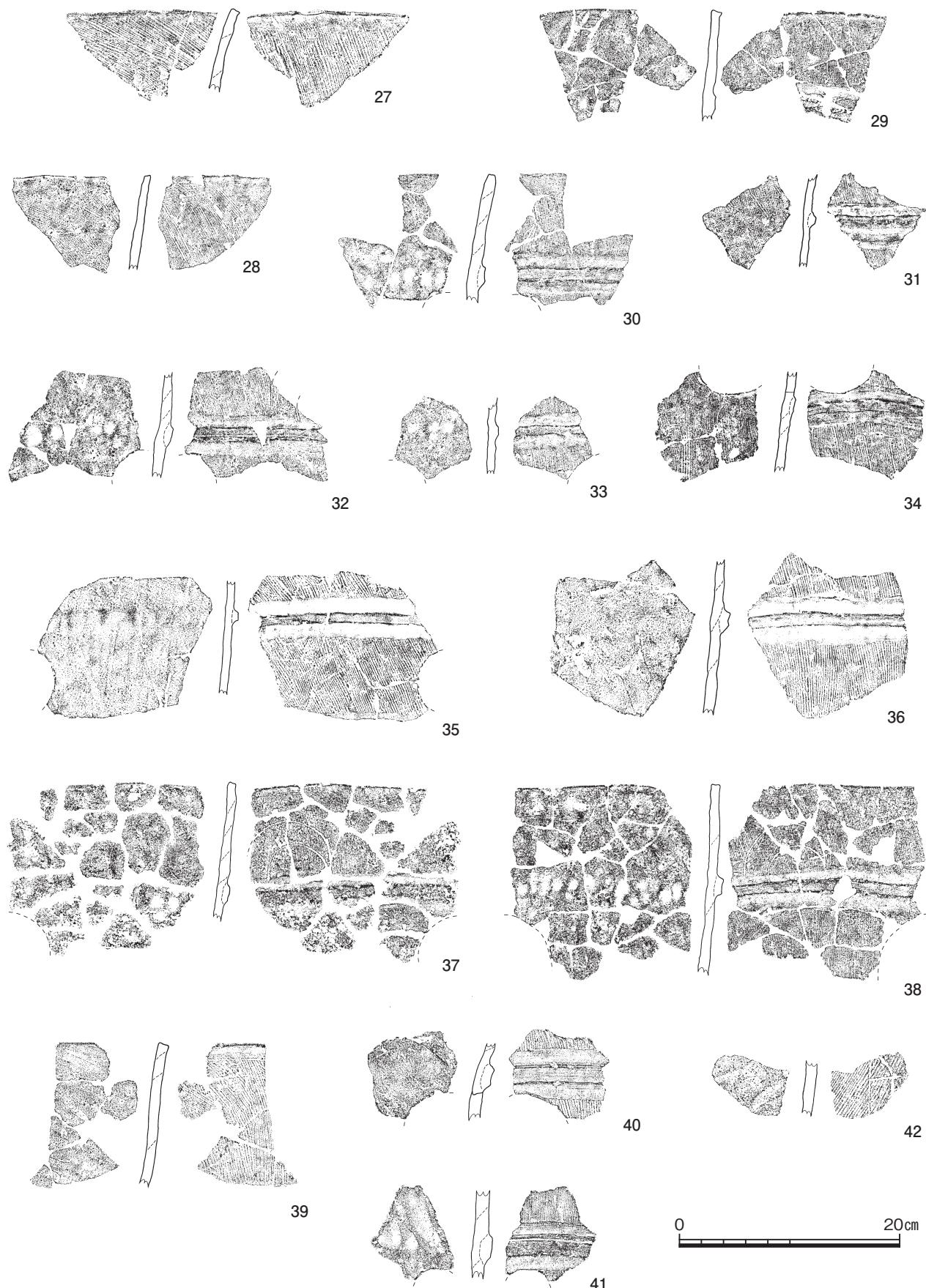
14・15は全体を復元できた個体である。**14**は四段構成で、復元口径26.6cm、高さ42.0cm、底径15.5cmである。端部整形はヨコナデであるが、端面は凹んでいない。口縁から1~1.5cm程下に沈線を巡らせる。同じ特徴を**19**が持つおり、同形と思われるヘラ記号とあわせて、同一工人の手に帰



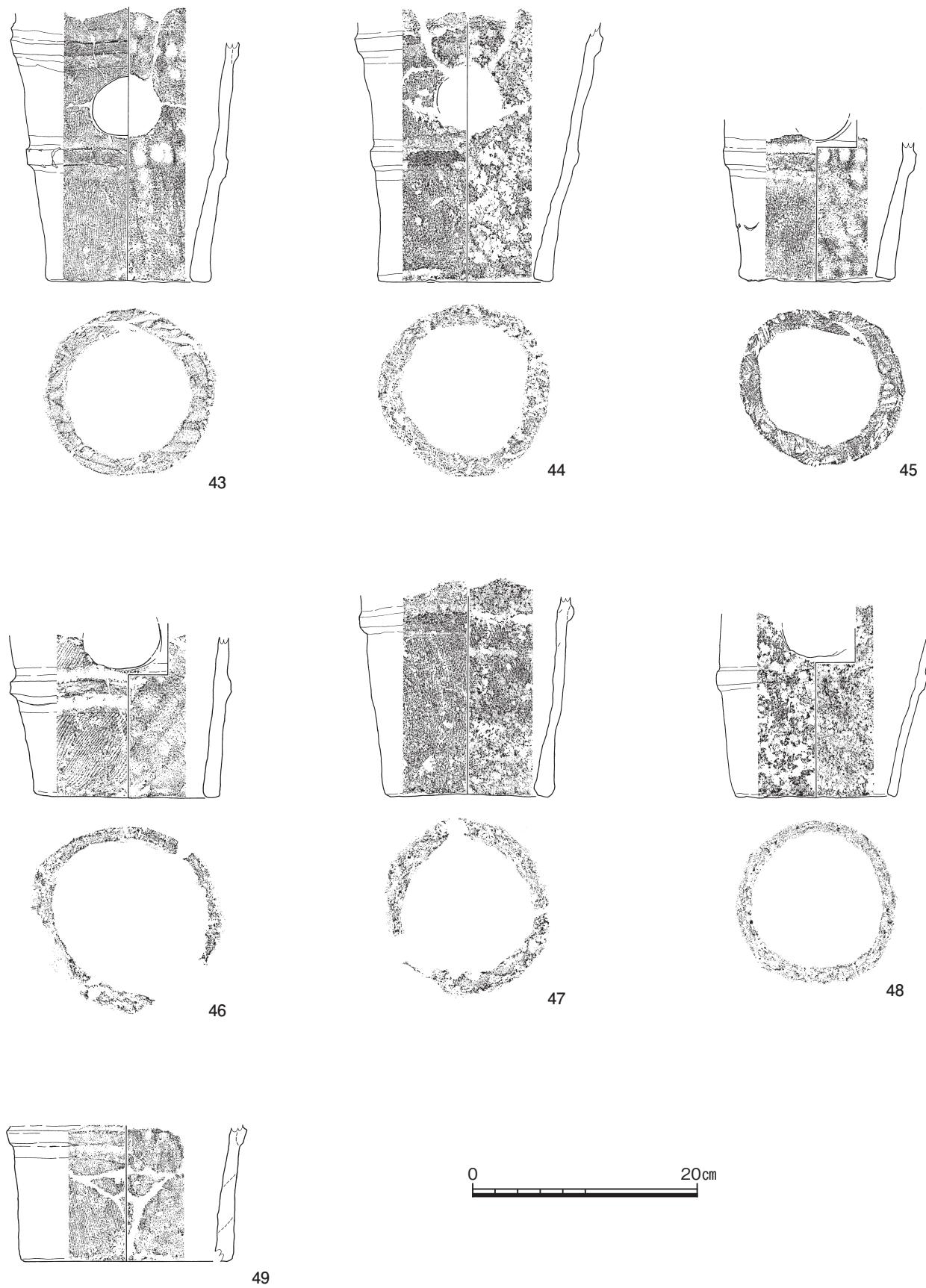
第29図 円筒埴輪1 (S=1/5)



第30図 円筒埴輪2 (S=1/5)



第31図 円筒埴輪3 (S=1/5)



第32図 円筒埴輪4 (S=1/5)

する可能性がある。

15は三段構成である。口の部分はひずんでおり、径20.5～25.5cm、高さ36.8cm、底径14.6cmである。底部高が12.5cmとやや高く、段幅も11.6cmと広い。また、口縁から7cm程下に浅い沈線が一周する。さらに口縁から16cm程下、第二段にも部分的に同様の沈線が認められる。この沈線の位置は、**14**の第二～三段の間の突帯の位置にほぼ対応しており、突帯貼り付けの為のアタリ線⁽²⁰⁾であった可能性がある。同様の沈線は**24**にも確認できる。

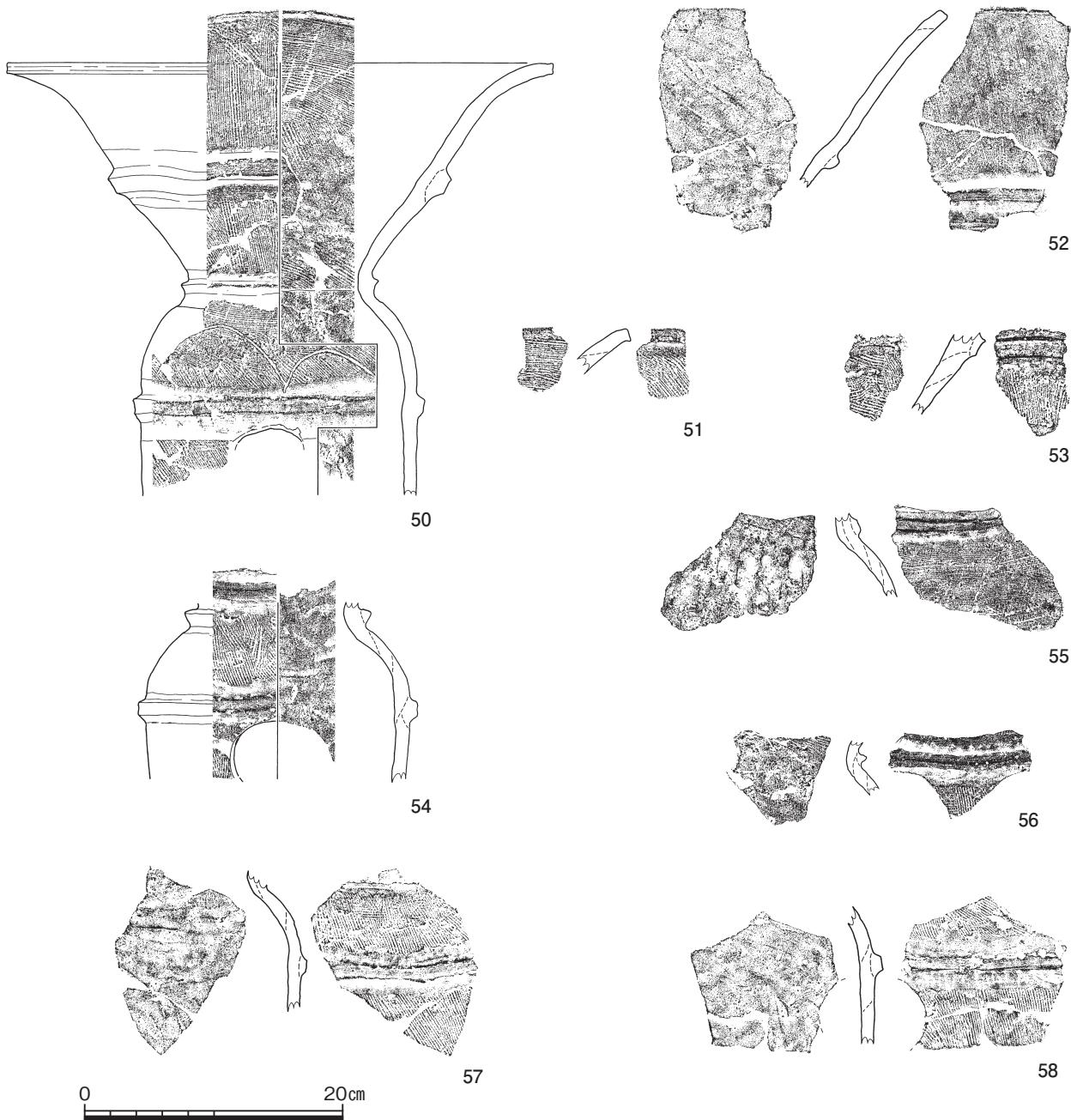
1～30・37～39の口縁をみると、端部整形はヨコナデであるが、端面が強いナデによって凹んでいるもの(**15・16～18・20～22・29・37～39**)、凹みが弱く、やや外反するもの(**14・19・23・25・27・28**)、凹みが弱いが外反しないもの(**24・26・30**)などのバリエーションが認められる。ハケメの密度は多くても10本/cmまでで、それを越える細かいものは認められない。突帯はやはり強いヨコナデで成形されており、突出度が弱く、断面が偏平なものが多い。**35・36**はやや突帯がしっかりしているが、朝顔形埴輪の破片である可能性がある。**43**の突帯では3～5cm間隔で貼り付けた粘土の継ぎ目が観察できる。**47**の底部高は15.5cmであり、他の個体が10.5cm前後であることと比較して高いものとなっている。底径は、第二段より上の外面調整が不明な**49**が18cmを越えるのを除くと、15cm前後のものばかりである。**43・45**の底端面には棒状の圧痕が残る。

50～58は朝顔形埴輪である。すべて流土中からの出土であり、埴輪列に属するとわかる個体は確認されていない。また、完形に復元できるものもない。円筒埴輪と同様に外面調整にはヨコハケを施すもの(**50・55**)とそうでないものがある。

50は段部以下が失われているが、肩部より上は復元することができた。口縁部径41.0cm、段部径21.2cmを計る。口縁部と受部、肩部と段部の間の突帯の断面は偏平な台形であるが、受部と肩部の間の突帯の断面は三角形である。外面調整はタテハケかナナメハケが主体であるが、口縁部内面と肩部外面上方に部分的にヨコハケが施される。焼成が部分的に大きく異なり、須恵質に近いほどよく焼けている面がある一方、その反対側は焼けがあまくぼろぼろになっている。**51**は口縁部の破片である。口縁端部が外側にややつまみ出されている。**52**も口縁部であるが、内面は斜め方向の強いナデで仕上げられている。**53**は受部の破片である。内面にランダムな方向のハケメが認められる。**54**は肩部から段部の破片であるが、段部径20.2cmに復元できた。外面調整はタテハケであるが、**50**と同様に受部と肩部の間の突帯断面が三角形である。**55・56**は肩部上方の破片である。**55**の外面調整はヨコハケで、突帯の断面は偏平な台形状であるが、**56**の外面調整はタテハケで、突帯の断面は三角形である。**57・58**は肩部から段部にかけての破片で、同一個体と考えられる。外面調整は粗いタテハケ、内面には斜め方向のナデが認められる。概して朝顔形埴輪の突帯は円筒埴輪と比較してしっかりとしているようである。

ヘラ記号は円筒埴輪に5種類、朝顔形埴輪に1種類の計6種類が確認できた。部位が不明な**42**と朝顔形埴輪**50**を除くと、すべて口縁部に刻まれている。もっとも多いのはかぎ爪形のヘラ記号で、**1・15～17・20～22・32・37・38**に認められる。

その他のヘラ記号は1、2点づつしか確認できなかった。**2**は全形がわからないが、「人」字状のヘラ記号である。**4**は「八」字状である。**14**は上向きの半円弧形を呈し、**19**も同形かもしれない。**42**

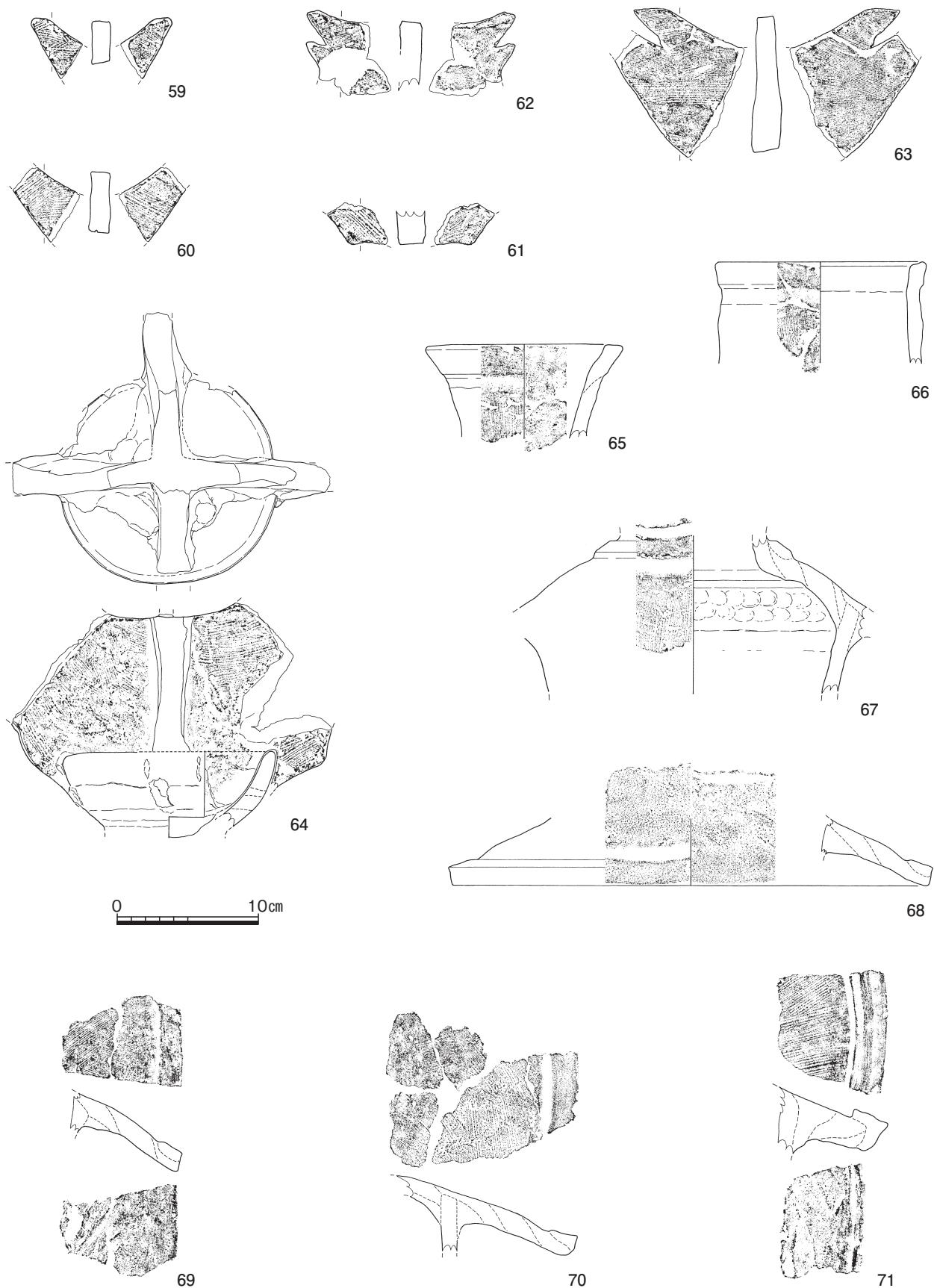


第33図 朝顔形埴輪 (S=1/5)

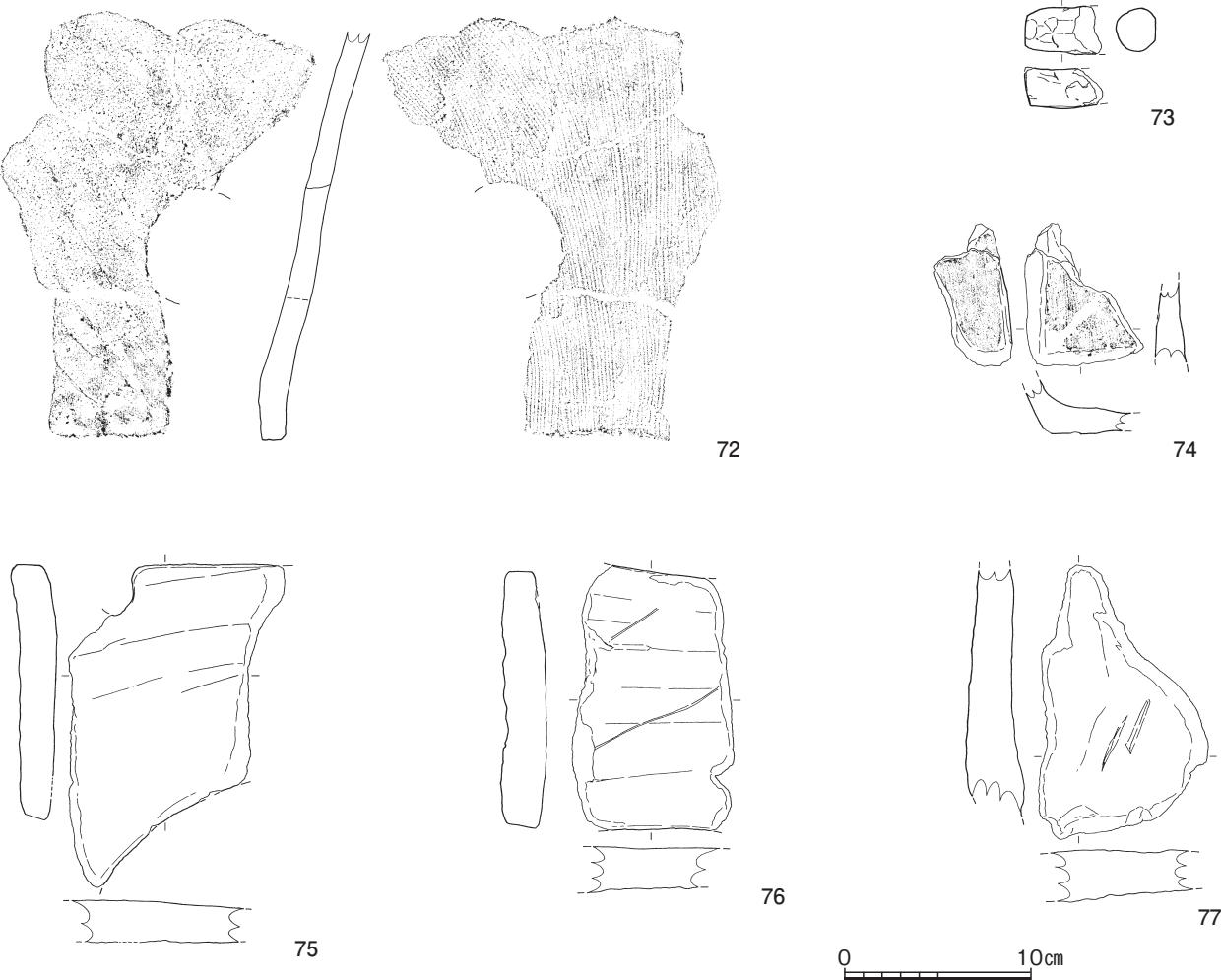
は全体形が不明ではあるが、半月形の真ん中を区切ったような形状である。朝顔形埴輪50のヘラ記号は肩部に刻まれており、大小の半円弧を並べたような形状である。

(4) 形象埴輪(第34・35図)

器種が確定できるものは蓋形埴輪のみで、他には家形埴輪の可能性があるものと形態の不明なものがある。蓋形埴輪は墳丘四方の各トレンチから出土しているが、墳頂部のトレンチ4・5からの出土はない。ただ、64のように葺石の上で検出されたものもあり、本来は墳頂に並べられていたものが転落したものと考えられる。飾り板の破片5点(59～63)、飾り板受部1点(64)、軸受部2点(65・66)、笠部5点(67～71)、台部1点(72)を実測した。飾り板は小片ばかりで、全形のわかるものはない。どの個体も沈線などの文様はなく、両面にハケメ調整が施され、端面はヘラケズリで成形され



第34図 形象埴輪1 (S=1/4)



第35図 形象埴輪2 (S=1/4)

ている。59～61は硬い焼き質や橙色の色調などがよく似ており、同一個体と考えられる。64は立ち飾り部の基部から飾り板受部にかけてである。失われている軸は飾り板受部と連続一体作りで、飾り板受部の底は円盤充填で作られている。立ち飾り部は上から差し込まれ、さらに粘土を充填して接合を強固にしている。65・66は軸受部である。65は軸受部口縁を外側に張り出させ、66は口縁の2cm程下をくぼめることで突帯を表現している。外面はいずれもタテハケである。67～71は笠部の破片である。67は笠上半部と台部の接合部である。軸受部下端突帯は笠部上端に下がり、笠部中央突帯はないようである。笠部の外面はタテハケ、内面に指圧痕が残る。68～71は笠下半部で、いずれも笠部先端に突帯があるが、笠部中央突帯はないようである。68・69・71の外面はタテハケであるが、70の外面はやや乱雑なハケメである。68は笠部径34cmほどに復元できる。71は厚手で軒の出が小さいのが特徴である。72は台部の破片である。径6cm程の透孔があり、外面はタテハケ、内面は斜方向のナデで仕上げられている。

73・74はいずれも小片であるが、家形埴輪の破片と推定される。73は径5cmほどの丸い断面の破片でややそりがある。鰐木か棟木の破片と考えられる。74は建物の壁体、角の部分の破片の可能性がある。外面はタテハケである。

75～77はすべて墳丘西側のトレンチから出土しており、同一個体の可能性があるが、器種は不明

である。表面の風化が進んでいるが、どれも片面のみにヘラケズリか強いヨコナデの調整が認められる。76・77には線刻かとも思えるものが確認できるがはっきりしない。

第5節 まとめにかえて

1 墳丘の規模と外表施設

各トレンチの調査成果から導き出される内出1号墳の規模等は以下のとおりである。墳端はトレンチ1で基準点(0・0)から西へ10.6m、トレンチ3で基準点(0・0)から東へ10.9m、トレンチ6で基準点(0・0)から東へ10.8mであったことから、東西の規模は21.4～21.5mとなる。墳丘北側の墳端については、トレンチ7では基準点(0・0)から北へ10.5mであったが、掘削が認められるなどの例外的な状況であった。平行するトレンチ8では基準点(0・0)から北へ10.0mより内側と想定されるため、第36図では基準点(0・0)から北へ10.0m付近で表現している⁽²¹⁾。墳丘南側の墳端はトレンチ10で基準点(0・0)から南へ10.9mの位置にあったことから、南北の規模は20.9～21.4mとなる。墳端の高さは、尾根続きのトレンチ6が標高67.1mで最高所となり、その南側のトレンチ3で標高67.0mである。墳丘の南北のトレンチ7とトレンチ10で標高66.5mと最も低い数値となり、尾根が下がっていく西側のトレンチ1では標高66.6mであった。墳端の高低差は最大60cmである。墳頂部は乱掘などによって築造時の状況を残していないと考えられ、本来の高さは不明であるが、現在の標高は70.5mであるので、現状の墳丘高は最大4m、最小でも3.4mとなる。墳丘平面に比較して高さが高く高塚墳丘であると言える。

墳丘一段目は地山を削り出して成形されており、葺石は認められない。また、一段目の平坦面幅は肩が不明瞭になっているため不明確である。埴輪列は平坦面の中央に並べられていたと考えられ、墳丘二段目の葺石端から50～70cm離れて並べられている。また、平坦面には埴輪を設置するための溝を掘る前に、厚さ10cm弱の置土(盛土)が行われている。出土した埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪があるが、トレンチ内では蓋形埴輪などの形象埴輪が並べられていた形跡は確認できない。また、埴輪列の埴輪は基底部付近しか残っておらず、そのうち上まで復元できたのは円筒埴輪1個体のみであり、朝顔形埴輪が墳丘上にどのように並べられていたかも不明である。

葺石端はトレンチ1で基準点(0・0)から西へ8.5m、トレンチ3で基準点(0・0)から東へ8.2m、トレンチ6で基準点(0・0)から東へ8.4mであったことから、墳丘二段目の東西の規模は16.7～16.9mとなる。南北の葺石端については、トレンチ7で基準点(0・0)から北へ7.5m、トレンチ2で基準点(0・0)から南へ8.2mの位置にあったことから、墳丘二段目の南北の規模は15.7mとなる。東西と南北で1m以上の違いがあることがわかる。これには墳丘東側における葺石端の構造の違いも影響していると思われる。墳丘の西南北の葺石は、裾部にやや大ぶりの石を並べ、2列目から小振りの石を斜面に沿って埋め込んでいる。しかし、東側に限っては3列ほどを平坦に葺いて、4列目から斜面の葺石が始まる。平坦部分の幅は60cm程である。この構造的な相違の理由は不明である。

トレンチ5での盛土最深部は標高68.15mであり、ここからは高さ2.35m以上の盛土が行われていることがわかる。東の尾根からの傾斜と確認できる地山の最高所から推定される基準点(0・0)付近での地山の標高は約67.5mであり、確認できた盛土最深部との比高は65cm程である。旧地表面を確

認していないが、墳丘の二段目についてはほぼ盛土で築成されていると考えてよいだろう。

周溝は西側を除く三方向で確認された。尾根との切り離し部分である東側の周溝は、底幅約1.8mで、トレンチ6からトレンチ3に向かってはわずかに下がっているようである。北側では周溝底幅が不明確であるが、外側の立ち上がりはトレンチ7で基準点(0・0)から北へ11.7m、トレンチ8で基準点(0・0)から北へ11.3mであり、西に向かって開くようである。また、周溝底の標高もトレンチ7で66.5m、トレンチ8で66.9mと東から西へ向かって下がっている。南側の周溝は底幅約1.6m、墳端部分で標高66.5m、外側の立ち上がり部分で標高66.2mとやや南向きに下がっている。西側では周溝は確認されなかつたが、開墾によって削平されている可能性もある。なお、周堤はどの面でも確認されなかつた。

内出1号墳は一辺21.5m、高さ4mの二段築成の方墳で、西側を除く三方に周溝を巡らせるが、周堤は持たないことがわかつた。また、外表施設としては一段目の墳丘平坦面に埴輪を巡らせ、葺石は二段目の斜面に葺かれていること、一段目の斜面は地山削り出しで成形されていることが確認された。

2 埋葬施設

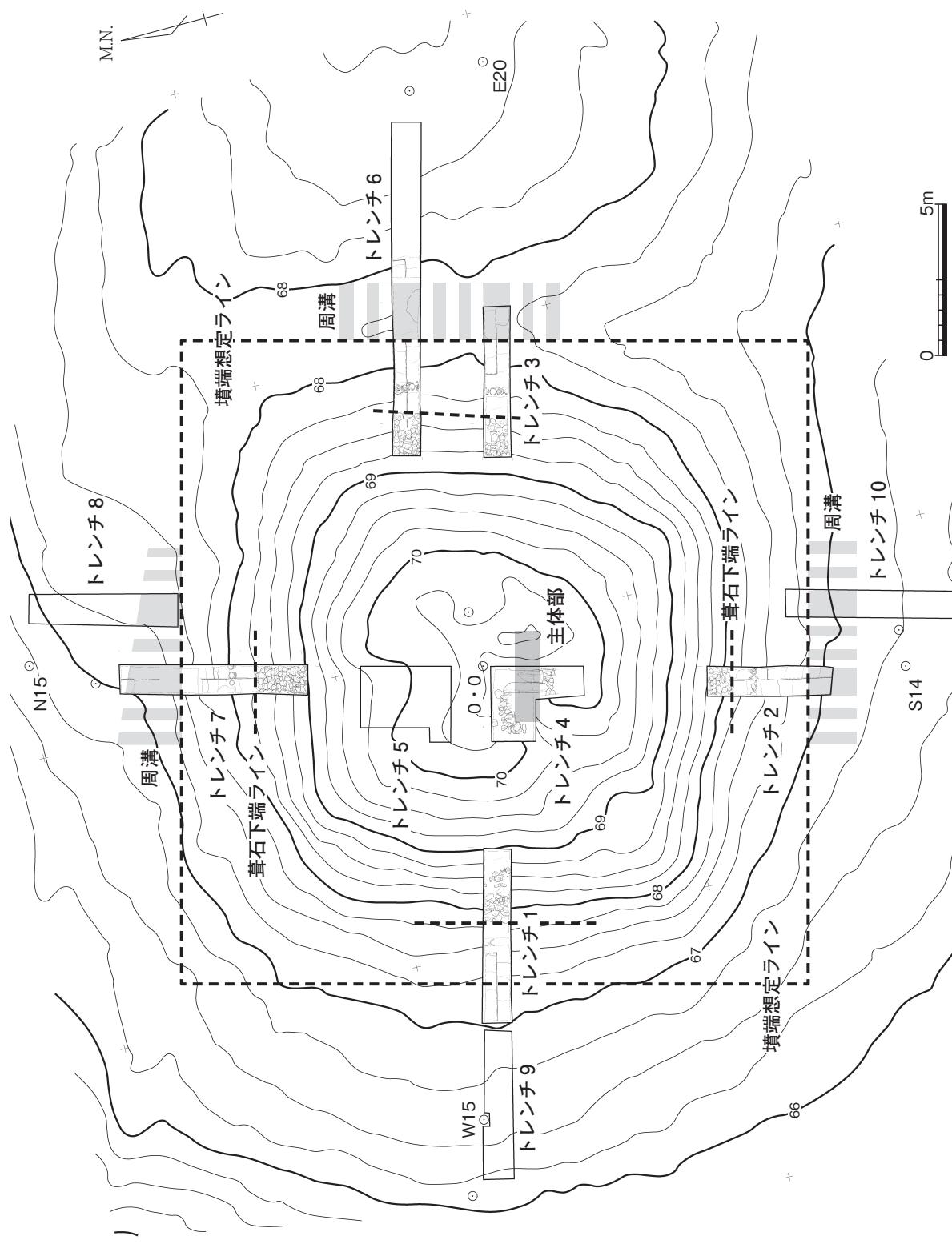
埋葬施設としては、墳頂部南寄りに竪穴式石槨1基が確認された。墳頂部から掘り込まれた墓壙内に構築されたもので、内法は長さ約3.0m、幅0.7~0.8mと推定されるが、高さや床の構造は確認できていない。主軸は墳丘の東西辺および尾根に平行し、N-75°-Wとなる。石槨東小口の観察から10~20cm大の石材を布積みにし、石材と石材の間には粘土を詰めて固定していることがわかる。石材は地山の石、ホルンフェルスとみられ、壁面には赤色顔料が塗布されているようである。天井石は比較的細長い花崗岩を用いているのも特徴の一つである。

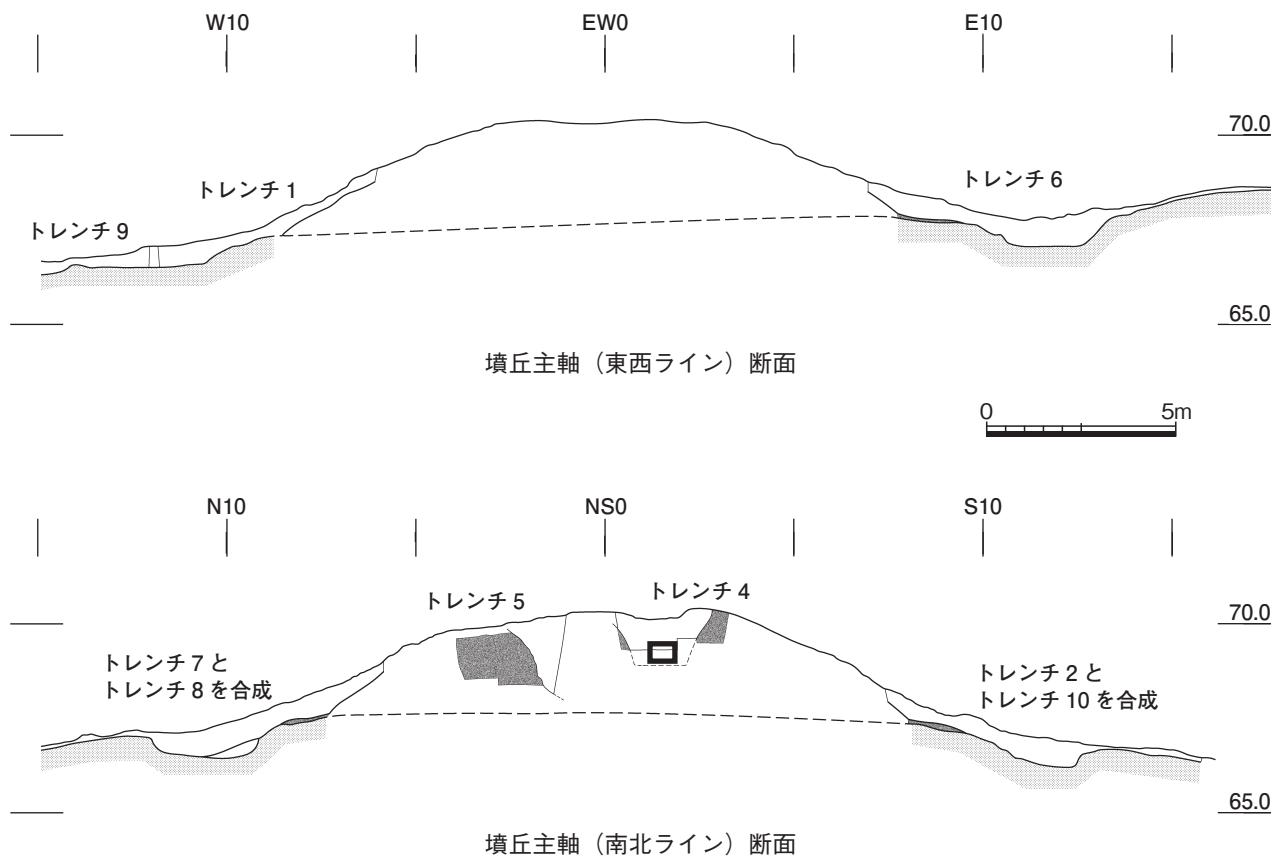
なお、北側に空間を残して南寄りに竪穴式石槨が構築されていることから、もう1基の埋葬施設構築を予定していたが、何らかの事情で断念されたことが想定される。また、ここに穿たれた深い乱掘孔は、今回調査した主体部を狙ったものではなく、さら深い位置に別の埋葬施設が存在することを想定して掘削されたものと推定される。乱掘孔埋土に含まれる15~20cm大の角礫は、その埋葬施設が竪穴式石槨であり、壁体が抜かれ、掘り上げられたものであるかもしれない。天狗山古墳や勝負砂古墳は墳丘構築に先立って埋葬施設を設け、深い位置に主体部が存在している。同様の構築方法が内出1号墳でも行われている可能性はあるだろう。また、小田川中流域の長福寺裏山古墳群に属する仙人塚古墳(笠岡市走出)は帆立貝式の前方後円墳で、現在の墳頂から約2m下の深い位置に第一主体である竪穴式石槨があり、その1.5m上にも第二主体として竪穴式石槨を構築している⁽²²⁾。内出1号墳の墳丘深くに別の主体部が存在するとしたら、類例の一つになると言えるだろう。ただ、乱掘孔の埋土に副葬品の残滓や粘土などが認められないため、乱掘は空振りに終わった可能性もある。

3 遺物の時期

内出1号墳の主体部からは副葬品が検出されなかつたので、遺物としては各トレンチから出土した須恵器と土師器・埴輪である。このうち古墳築造時期の手がかりとなるのは須恵器と埴輪である。須恵器では、トレンチ10から出土した高環10がTK208、トレンチ2から出土した高環8・9がTK23~TK47に属すると考えられる⁽²³⁾。円筒埴輪は外面調整にタテハケのみのものが卓越するが、Bd種ヨコハケを有する個体が一定量含まれることから、川西編年のIV期からV期への移行期に該当すると

第36図 内出1号墳墳丘平面図 (S=1/200)





第37図 墳丘の構造 (S=1/200) 黒塗り部分は盛土、アミ点部分は地山。

考えられる⁽²⁴⁾。

暦年代にすると内出1号墳の遺物は5世中葉から後半にかけてに属すると言え、やや幅がある。須恵器が出土状況があまりよくないうえ、墳丘深部に別の埋葬主体の存在が疑われることもあわせて、古墳の築造年代を絞りきれないところである。墳丘深部に別の埋葬主体を想定するなら、古相の須恵器が築造年代を示し、新しい須恵器は今回調査した主体部の葬送に伴う可能性が高い。今回調査した竪穴式石槨が内出1号墳で唯一の主体部であれば、古相の須恵器は短期間ではあるが伝世されたものと考えられる。

二万地域に所在する古墳群のうち、岡山大学考古学研究室によって測量および発掘調査が行われた天狗山古墳・勝負砂古墳・小塙古墳については、副葬品や埴輪などから5世紀後半の比較的近似した時期に集中して築かれたことが指摘されている⁽⁸⁾。そのなかでも勝負砂古墳が5世紀後半、小塙古墳が5世紀後葉、天狗山古墳が5世紀末～6世紀初頭の年代感が示されている⁽⁷⁾。墳丘深部に別の埋葬主体が存在するか否かにかかわらず、内出1号墳は、埴輪にヨコハケを伴わない天狗山古墳よりは明らかに先行し、勝負砂古墳・小塙古墳にもやや先行するか並行する時期に築かれたと言える。

4 内出1号墳の位置付け

内出1号墳が築かれた5世中葉から後半にかけては、造山古墳・作山古墳・宿寺山古墳と続いてきた吉備中枢地域における巨大古墳築造が途絶える時期である。入れ替わるように高梁川西岸に天狗山古墳が備中において該期最大の古墳として登場する。内出1号墳は天狗山古墳のすぐ南の尾根上に築

かれており、その関係が重要となる。まずは天狗山古墳とさらに時期的に近い位置付けの勝負砂古墳と比較した場合の相違点・共通点を見てみたい。最大の違いとしては墳形と規模があげられる。内出1号墳は一辺21m程の方墳であるが、天狗山古墳は墳長57m、勝負砂古墳は墳長約43mの帆立貝形前方後円墳であり、そこには大きな格差が見て取れる。しかし、墳丘の築造方法には共通点が認められる。地山を削り出して周溝を巡らせ、その上に盛土を高く積み上げていること、さらに平面規模に比して高さが高い、いわゆる「高塚墳丘」であることが挙げられる。また、勝負砂古墳では葺石は認められないが、天狗山古墳と内出1号墳は葺石が墳丘二段目にのみ施されることも共通している。埋葬主体については、内出1号墳が墳丘構築後に、墳頂部から墓壙を掘る墳丘先行型であるのに対し、天狗山古墳・勝負砂古墳は石槨を構築した後に墳丘を盛り上げていく墳丘後行型である。ただ、石槨の構造は3者ともよく似ている。平面形が比較的幅広で、壁体に角礫を用いて、ほぼ垂直に積み上げる。石の隙間には粘土が充填され、壁面には赤色顔料が塗布されることなどである。

相違点もあるが、ここは共通点を重視すべきであろう。内出1号墳の周辺には、先行する5世紀前半代の古墳として、南山古墳群や南山明地古墳群が存在する。そのうち南山21号墳⁽²⁵⁾や南山明地2～4号墳⁽⁵⁾が調査されているが、これらは低墳丘であり、その主体部も箱式石棺や礫床である。これらとの相違をみると、内出1号墳は天狗山古墳や勝負砂古墳と同じ葬送概念に基づいて築造されたものと考えられる。また、高い墳丘や石槨の構造は渡来系の要素であることが指摘されている⁽²⁶⁾。内出1号墳に5世紀中葉の築造時期を与えた場合、下二万においてそうした要素を持った最初期の古墳ということになる。

次に内出1号墳と近い時期に築かれた方墳と比較してみたい。採り上げるのは出土須恵器(TK23～TK47)や埴輪(川西IV～V期)から5世紀後半の年代が与えられている総社市福井の中山6号墳⁽²⁷⁾と総社市秦の一丁塹4号墳⁽²⁸⁾である。

中山6号墳は一辺約13m、二段築成の方墳である。尾根頂部に立地し、隣接する中山7号墳は、石蓋土壙を主体部とする小墳であり、ほぼ単独で立地するものと考えてよいだろう。墳丘の南側に区画溝が掘られているとされるが、土層断面図を見ると周溝が巡っていた可能性もあるのではないだろうか。墳丘高はそれほどでもなく、高塚墳丘ではないようである。葺石は認められず、一段目を巡る埴輪列がよく残っていた。円筒埴輪はV期のもので、外面調整にタタキが認められた。人物・動物・家形など豊富な形象埴輪も検出されている。埋葬主体は竪穴式石槨2基で、墓壙を掘って構築したものである。第一主体は長さ2.88m、幅0.75m、第二主体は大破していたが、第一主体よりやや小さめに復元されている。副葬品としては両石槨から玉類や鉄製品が多く出土している。特に棺に使用されたと推定される鎌の出土は、竪穴式石槨と合わせて渡来系の要素として評価されている⁽²⁶⁾。

内出1号墳と中山6号墳を比較した場合、内出1号墳が時期的に先行し、規模が一回り以上大きく、墳丘高も際立っている。埴輪の調整技法にも違いがある。共通点としては、尾根頂部に単独で立地する点、渡来系の竪穴式石槨を主体部とし、その第一主体と規模が近似する点が挙げられる。

一丁塹4号墳は14×15mの方墳で、前期から続く一丁塹古墳群の中の1基として、尾根筋に立地している。墳丘の周囲にははっきりとした周溝が巡らされているが、明確な葺石や埴輪列は確認されていない。円筒埴輪はヨコハケを施すものが含まれ、IV期からV期への移行期のものである。形象埴

輪では人物と馬が出土している。主体部は竪穴式石槨であるが、内部が調査されていないので詳細は不明である。なお、墳丘上に大型の須恵器甕が設置されていた。

内出1号墳と一丁塙4号墳では、やはり内出1号墳が規模が一回り以上大きい。立地も一丁塙4号墳が前期からの古墳群の中の1基として存在するのに対し、内出1号墳は単独で立地する。時期的には内出1号墳に並行する時期と考えられ、埴輪の調整技法も似ているが、一丁塙4号墳の円筒埴輪のほうがやや厚手で、径も大きく、しっかりした作りである。大型の須恵器甕による墳丘祭祀や周溝の存在は共通点と言える。

高田貴太は、吉備地域の渡来系竪穴式石室や木槧を採用した古墳をA、Bの2つの類型に大別した。A類型は直径20~30m以上の円墳や中大型の帆立貝形前方後円墳で、海上交通を掌握し、先進文物の導入に積極的であった地域集団の首長層であり、B類型は直径あるいは一辺が10m程度の円墳や方墳で、初期須恵器や鍛冶生産など新來の生産活動に従事する集団の有力層と評価した⁽²⁷⁾。内出1号墳は形状は方墳であるが、その規模や天狗山古墳に準ずる立地、周辺に新來の生産遺跡が確認できないことなどからA類型に当たるとしている。下二万地域ではA類型の古墳が、方墳から始まり帆立貝形前方後円墳へと変遷していくこととなる。しかし、内出1号墳や勝負砂古墳からは主要交通路たる河川や古代山陽道方面を望むことが難しい。そこには天狗山古墳との階層的な関係を読み取る余地が残されている可能性がある。中山6号墳と主体部規模が近似し、大型の須恵器甕による祭祀を一丁塙4号墳と共通とするといったことから、内出1号墳にはB類型との類似点もある。いずれにしても天狗山古墳をはじめとした下二万地域の古墳相互の関係について、時期差をどのように評価するか、立地なども含めた検討が今後の課題となるだろう。

註

- (1) 真備町史編纂委員会『真備町史』1979
- (2) 高畠知功『蓮池尻遺跡 新庄尾上遺跡ほか 美野条理遺跡 二反田遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告62 岡山県教育委員会 1986
- (3) 正岡睦夫・山磨康平・平井勝『西山遺跡』真備町教育委員会 1979
- (4) 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報 第13号』倉敷考古館 1977
- 藤原好二「黒宮大塚墳丘墓測量調査報告」『倉敷埋蔵文化財センターワン報17』倉敷市教育委員会 2020
- (5) 物部茂樹・米田克彦・岡本泰典・藤井翔平・石田為成・弘田和司・大橋雅也・四田雅人・尾上元規・白石純・渡邊綏子・半田章太郎・隅英彦・平尾良光『南山城跡 南山明地古墳群 南山明地遺跡』岡山県教育委員会 2022
- (6) 松木武彦『竜王塙古墳第三次測量調査概報』岡山大学考古学研究室 2004
- (7) 村井嵐雄「岡山県天狗山古墳出土の遺物」『MUSEUM 250号』東京国立博物館 1966
- 松木武彦・和田剛・寺村裕史編『天狗山古墳』岡山大学考古学研究室 天狗山古墳発掘調査団 2014
- (8) 岡山大学考古学研究室編『勝負砂古墳調査概報』(株)学生社 2009
- (9) 澤田秀実・松木武彦・仲田周平『小造山古墳・小塙古墳 測量調査報告書』岡山大学考古学研究室 2014
- (10) 新納泉・三浦孝章『二万大塚古墳』二万大塚古墳発掘調査団 2018
- (11) 中野雅美『箭田大塚古墳』真備町教育委員会 1984
- (12) 伊藤晃「20 初期寺院と瓦」『吉備の考古学』福武書店 1987
- (13) 中田啓司「備中真備町市場の一火葬墳墓」『古代吉備 第3集』「古代吉備」編集部 1959
間壁葭子・近藤益二「真備町妹坂本火葬墓」『倉敷考古館研究集報 第16号』倉敷考古館 1981
- (14) 間壁忠彦・間壁葭子「天平宝字7年「矢田部益足之買地券文」(白髮部毘登富比壳墓地博券)の検討」

- 『倉敷考古館研究集報 第15号』倉敷考古館 1980
- (15) 畑 和良「猿懸城合戦と毛利氏の備中国計略」『倉敷の歴史 第20号』倉敷市 2010
- (16) 畑 和良「備中南山城の縄張りとその成立背景」『倉敷の歴史 第29号』倉敷市 2019
前掲(5)文献
- (17) 山陽新聞社『岡山県大百科事典 上』1980
- (18) 永山卯三郎『吉備郡史 上巻』1971
- (19) 藤原好二「内出1号墳測量調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報18』倉敷市教育委員会 2022
- (20) 突帯の割り付け線の可能性もあるが、突帯間の幅を均等にする意識があったかどうか不明確であるので、ここでは仮に「アタリ線」とした。
辻川哲朗「円筒埴輪の突帯設定技法の復元 - 墓輪需要形態検討の基礎作業として - 」『埴輪論叢 第1号』
埴輪検討会 1999
- (21) 北側の墳端については、西に向かって拡がる可能性もある。
- (22) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葭子『長福寺裏山古墳群』長福寺裏山古墳群・関戸廃寺調査推進委員会 1965
- (23) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
川合 忍「地域報告 岡山県」『中期古墳研究の現状と課題V』中国四国前方後円墳研究会 2021
- (24) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌 第64巻第5号』日本考古学会 1978
- (25) 鍵谷守秀・小野雅明・藤原好二『広江・浜遺跡 南山21号墳』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第14集
倉敷市教育委員会 2011
- (26) 高田貫太「5,6世紀の日朝交渉と地域社会」『考古学研究 第53巻第2号』考古学研究会 2006
高田貫太『古墳時代の日朝関係 - 新羅・百濟・大加耶と倭の交渉史 - 』(株)吉川弘文館 2014
高田貫太「古墳時代中期における中国・四国地域の竪穴式石室・竪穴系横口式石室・木槧～朝鮮半島東南部との比較を通して～」『中期古墳研究の現状と課題III』中国四国前方後円墳研究会 2019
- (27) 伊藤 晃・浅倉秀昭・平井 勝・江見正己・中野雅美・小延祥夫・椿 真治・柴田英樹・蛯原啓介
『藪田遺跡 金黒池東遺跡 奥ヶ谷窯跡 中山遺跡・中山古墳群 西山遺跡・西山古墳群 服部遺跡 北溝手遺跡 窪木遺跡 高松田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121 日本道路公団中国支社岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1997
- (28) 谷山雅彦・高橋進一・村田 晋『一丁丸古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告23 総社市教育委員会 2014

参考文献

- 青木 敬『古墳築造の研究 - 墳丘からみた古墳の地域性 - 』(有)六一書房 2003
- 青木 敬『土木技術の古代史』(株)吉川弘文館 2017
- 一瀬和夫「円筒埴輪」『考古資料大観 第4巻 弥生・古墳時代 墓輪』小学館 2004
- 宇垣匡雅「宿寺山古墳の研究(1)」『環瀬戸内の考古学 - 平井 勝 氏追悼論文集 下巻』古代吉備研究会 2002
- 宇垣匡雅「古墳の墳丘高」『考古学研究 第57巻第2号』考古学研究会 2010
- 宇垣匡雅「4. 周濠の地方伝播に関する一試論 - 吉備の事例を中心に - 」『天狗山古墳』
岡山大学考古学研究室 天狗山古墳発掘調査団 2014
- 大阪府立近つ飛鳥博物館『年代のものさし - 陶邑の須恵器 - 』2006
- 寒川史也「岡山県」『中期古墳研究の現状と課題VI』中国四国前方後円墳研究会 2022
- 松木武彦「吉備の蓋形埴輪 - 器財埴輪の地域性研究に関する予察 - 」『古代吉備 第16集』古代吉備研究会 1994
- 吉井秀夫「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究 第49巻第3号』考古学研究会 2002
- 行田裕美・木村祐子『長畠山北古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集 津山市教育委員会 1992

出土遺物観察表

1 須恵器観察表

番号	トレンチ番号	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴
			口径	脚径	器高				
1	トレンチ2	壺身	-	-	-	良好	内 外 灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y6/1	0.1~0.5mm砂粒	
2	トレンチ2	壺身	-	-	-	良好	内 外 黄灰色 2.5Y5/1 灰色 5Y5/1	0.1~0.5mm砂粒	
3	トレンチ2	壺身	-	-	-	良好	内 外 黄灰色 2.5Y6/1 灰色 N6/	0.1~1.5mm砂粒	
4	トレンチ2	壺身	(11.0)	-	-	良好	内 外 灰オーブル色 5Y6/2 浅黄色 7.5Y7/3	0.5~1mm砂粒	
5	トレンチ2	壺身	(12.8)	-	-	良好	内 外 灰色 7.5Y6/1 灰色 10Y6/1	0.1~0.5mm砂粒	
6	トレンチ2	高壺	(11.4)	-	-	良好	内 外 灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	微砂粒	
7	トレンチ2	高壺	(16.8)	-	-	良好	内 外 灰オーブル色 5Y6/2 暗オーブル色 2.5GY4/1	微砂粒	
8	トレンチ2	有蓋高壺	(11.8)	-	-	良好	内 外 灰オーブル色 5Y6/2 灰色 5Y6/1	微砂粒	蓋 内面に当て具痕
9	トレンチ2	有蓋高壺	(10.2)	(7.8)	9.5	やや軟質	内 外 灰白色 2.5Y7/1 灰色 5Y5/1	微砂粒	
10	トレンチ10	高壺	-	10.1	-	良好	内 外 灰白色 7.5Y7/1 灰色 N7/	0.1~0.5mm砂粒	脚部
11	トレンチ2	壺	-	-	-	良好	内 外 灰白色 5Y5/1 灰オーブル色 5Y4/2	微砂粒	胴部にヘラ記号
12	トレンチ2	甌	(9.0)	-	-	良好	内 外 灰オーブル色 5Y6/2 灰色 7.5Y4/1	0.5mm砂粒	頸部に櫛描き波状文
13	トレンチ2	甌	(10.0)	-	-	やや軟質	内 外 浅黄色 2.5Y7/3 灰色 5Y5/1	0.5mm砂粒	口縁部に櫛描き波状文
14	トレンチ2	甌	(10.0)	-	-	やや軟質	内 外 灰白色 2.5Y7/1 暗オーブル色 2.5GY3/1	微砂粒	口縁部に櫛描き波状文
15	トレンチ10	甌	(17.8)	-	(27.5)	良好	内 外 灰白色 7.5Y7/1 暗オーブル色 5Y4/3	微砂粒	頸部に櫛描き波状文
16	トレンチ10	甌	(20.0)	-	-	やや軟質	内 外 灰色 5Y5/1 灰褐色 5YR5/2	微砂粒	

2 墳輪観察表

番号	出土地点	種類・器種	法量(cm)	形態・技法上の特徴	胎土・焼成等の特徴	色調
1	T10	円筒 口縁部から 段部	口径: 24.8 口縁部高: 9.5 段幅: 11.0 (1/3周)	ヘラ記号あり。透かし孔あり。 外面: ヨコハケ (Bd 種・8~12本/cm)。突帯は強いヨコナデ。 内面: 斜方向の強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土: 0.5~2mm大の石英・長石を多く含む。 0.5mm大の黒色粒を含む。 焼成: 不良・土師質	外面: にぶい橙色 (7.5YR6/4) 内面: 黄橙色 (7.5YR7/8) 断面: 灰オーブル色 (5Y6/2)
2	T7	円筒 口縁部	-	ヘラ記号あり。3と同一個体。 外面: 一次調整タテハケ (5本/cm) 後、ヨコハケ (6本/cm)。 内面: ナナメハケ (6本/cm)。	胎土: 0.5~2mm大の石英・長石を多く含む。 0.5mm大の黒色粒を含む。 焼成: 良好・須恵質	外面: 明褐灰色 (7.5YR7/2) 内面: にぶい橙色 (7.5YR6/4) 断面: 灰色 (5Y5/1)
3	T7	円筒 口縁部	-	2と同一個体 外面: ヨコハケ (Bc 種・6本/cm)。突帯は強いヨコナデ。 内面: 口縁部から7cmまではナナメハケ (6本/cm)、以下は斜方向の強いナデ。	胎土: 0.5~1mm大の石英・長石を多く含む。 0.1~0.5mm大の黒色粒を含む。 焼成: 良好・須恵質	外面: 灰黄色 (2.5Y6/2) 内面: にぶい黄橙色 (10YR7/2) 断面: 灰色 (5Y6/1)
4	T1	円筒 口縁部	-	ヘラ記号あり。 外面: 一次調整タテハケ (5~6本/cm) 後、ヨコハケ (4~5本/cm)。 内面: ナナメハケ (5~6本/cm)。	胎土: 0.5~1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成: 良好・土師質	外面: 橙色 (7.5YR6/6) 内面: 橙色 (7.5YR6/6) 断面: 浅黄色 (2.5Y7/4)
5	T3	円筒 口縁部	-	6と同一個体か。 外面: ヨコハケ (Bd 種・5本/cm)。 内面: 斜方向の強いナデ。	胎土: 0.5~2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成: 良好・須恵質	外面: 灰白色 (2.5Y7/1) 内面: 黄白色 (2.5Y5/1) 断面: 灰白色 (2.5Y7/1)
6	T3	円筒 段部	-	透かし孔あり。5と同一個体か。 外面: ヨコハケ (Bd 種・6~13本/cm)。突帯は強いヨコナデ。 内面: 斜方向の強いナデ。	胎土: 0.5~3mm大の石英・長石を多く含む。 焼成: 良好・須恵質	外面: 灰白色 (N8/) 内面: 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 断面: 灰白色 (10Y7/1)
7	T6	円筒 段部	-	外面: ヨコハケ (Bd 種・7~8本/cm)。突帯は強いヨコナデ。 内面: 斜方向の強いナデ。	胎土: 1~2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成: 良好・土師質	外面: にぶい黄橙色 (10YR7/4) 内面: にぶい黄橙色 (10YR7/4) 断面: 灰白色 (2.5Y7/1)

番号	出土地点	種類・器種	法量 (cm)	形態・技法上の特徴	胎土・焼成等の特徴	色調
8	T1	円筒 段部	-	外面：一次調整タテハケ（9本/cm）後、ヨコハケ（Bd種・10本/cm）。突帯は強いヨコナデ。内面：強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。焼成：良好・須恵質	外面：灰色 (5Y5/1) 内面：灰黄色 (2.5Y6/2)
9	T3	円筒 段部	-	透かし孔あり。 外面：ヨコハケ（Bd種・7本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。突帯の内面はヨコナデ	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。0.1mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：良好・須恵質	外面：灰黄色 (2.5Y6/2) 内面：灰色 (7.5Y6/1) 断面：灰色 (7.5Y6/1)
10	T6	円筒 段部	段部径：22.5 段幅：10.5 (1/3周)	上下の段部に透かし孔各2孔を直交に配置する。 外面：一次調整タテハケ（5本/cm）後、ヨコハケ（Bd種・7本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：1～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/4) 内面：にぶい黄褐色 (10YR5/4) 断面：にぶい黄色 (2.5Y6/4)
11	T3	円筒 基底部	底径：15.4 底部高：10.5 (2/3周)	外面：基底部はタテハケ（6本/cm）。第二段はヨコハケ（9本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。1～2mm大の赤色粒を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明褐色 (7.5YR5/8) 内面：明褐色 (7.5YR5/8) 断面：褐灰色 (10YR6/1)
12	T7 埴輪列	円筒 第二段から 基底部	底径：18.8 底部高：10.0 段幅：10.5 (1周)	透かし孔あり。 外面：一次調整タテハケ（10本/cm）後、第二段はヨコハケ（Bd種・11本/cm）。最下段突帯に押圧技法。第二段突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明赤褐色 (5YR5/6) 内面：明赤褐色 (5YR5/6)
13	T3 埴輪列	円筒 第二段から 基底部	底径：17.7 底部高：10.5 ～11.0 段幅：9.5 (1周)	透かし孔無し。 外面：第二段・第三段はヨコハケ（7～8本/cm）。基底部はタテハケ（5本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：全体的に不明瞭。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：黄褐色 (10YR5/8) 内面：黄褐色 (10YR5/8)
14	T3 埴輪列	円筒 口縁部から 基底部	口径：26.6 器高：42.0 底径：15.5 口縁部高：13.0 段幅：8.7～10.0 底部高：10.3 (1周)	ヘラ記号あり。第二段・第三段に透かし孔2孔を直交に配置。 外面：タテハケ（7本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：口縁部はナナメハケ（7本/cm）。第二段以下はタテハケ（5～6本/cm）。突帯の内面に指圧痕かヨコナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。0.5～2mm大の赤色粒を多く含む。0.1mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：良好～不良・土師質	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6) 断面：黄灰色 (2.5Y6/1)
15	T10	円筒 口縁部から 基底部	口径：20.5～25.5 器高：36.8 底径：14.6 口縁部高：12.4 段幅：11.9 底部高：12.5 (ほぼ完形)	ヘラ記号あり。透かし孔あり。 外面：タテハケ（8～10本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：口縁部・第二段の内面にタテハケ（9～10本/cm）。基底部の内面は斜方向の強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～3mm大の石英・長石を多く含む。2～5mm大の赤色粒を含む。 焼成：良好・土師質	外面：明黄褐色 (10YR6/6) 内面：明黄褐色 (10YR7/6) 断面：灰白色 (10YR7/1)
16	T10	円筒 口縁部	口径：22.6 口縁部高：9.5 (1/6周)	ヘラ記号あり。透かし孔あり。 外面：タテハケ（7～8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（7本/cm）。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～1mm大の赤色粒を多く含む。0.5mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明黄褐色 (10YR6/6) 内面：明黄褐色 (10YR7/6) 断面：褐灰色 (10YR6/1)
17	T10	円筒 口縁部	口径：23.6 口縁部高：8.5 (2/3周)	ヘラ記号あり。透かし孔あり。 外面：タテハケ（7～8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（7～8本/cm）。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。1mm大の赤色粒を多く含む。0.5mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明黄褐色 (10YR7/6) 内面：明黄褐色 (10YR7/6) 断面：明黄褐色 (10YR7/6)
18	T3	円筒 口縁部	口径：24.0 口縁部高：10.5	透かし孔あり。 外面：タテハケ（9～10本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（9本/cm）。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・須恵質	外面：灰白色 (N7/) 内面：灰オリーブ色 (5Y6/2) 断面：灰白色 (2.5Y7/1)
19	T3	円筒 口縁部	-	ヘラ記号あり。 外面：タテハケ（8本/cm）。 内面：ナナメハケ（8本/cm）。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。0.5mm大の赤色粒を含む。 焼成：不良・土師質	外面：浅黄橙色 (7.5YR8/6) 内面：橙色 (7.5YR7/6) 断面：にぶい黄橙色 (10YR7/3)
20	T2	円筒 口縁部	-	ヘラ記号あり。29と同じ個体か。 外面：タテハケ（10本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（8本/cm）。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：黄橙色 (7.5YR9/8) 内面：黄橙色 (7.5YR7/8) 断面：灰色 (5Y5/1)
21	T6	円筒 口縁部	-	ヘラ記号あり。 外面：タテハケ（8本/cm）。 内面：ナナメハケ（9本/cm）。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (5YR6/6) 内面：にぶい橙色 (7.5YR6/4) 断面：暗黃色 (2.5Y5/2)
22	T7	円筒 口縁部	-	ヘラ記号あり。 外面：タテハケ（7～8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（7本/cm）。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。1mm大の黒色粒を含む。 焼成：良好・須恵質	外面：黄灰色 (2.5Y6/1) 内面：灰色 (5Y5/1) 断面：灰色 (7.5Y5/1)
23	T9	円筒 口縁部	-	外面：ナナメハケ（5～6本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（9本/cm）。	胎土：1～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：灰黄色 (2.5Y6/2) 断面：灰オリーブ色 (5Y6/2)
24	T2	円筒 口縁部	-	外面：ナナメハケ（6本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（6本/cm）。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：灰黄褐色 (10YR6/2) 内面：にぶい橙色 (5YR6/4) 断面：灰色 (5Y6/1)
25	T1	円筒 口縁部	-	外面：タテハケ（5～6本/cm）。 内面：ナナメハケ（6本/cm）。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。1～2mm大の赤色粒を含む。 焼成：不良・土師質	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：にぶい橙色 (7.5YR6/4) 断面：浅黃色 (2.5Y7/3)
26	T3	円筒 口縁部	-	外面：ナナメハケ（8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（7本/cm）。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・須恵質	外面：褐灰色 (10YR6/1) 内面：褐灰色 (10YR5/1) 断面：灰白色 (10YR7/1)
27	T10	円筒 口縁部	-	外面：タテハケ（7本/cm）。 内面：ナナメハケ（5本/cm）。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を含む。0.5mm大の黒色粒をわずかに含む。 焼成：良好・土師質	外面：にぶい黄色 (2.5Y6/3) 内面：橙色 (7.5YR6/6) 断面：黄灰色 (2.5Y6/1)
28	T10	円筒 口縁部	口縁部高：8.5	31と同一個体か。 外面：ナナメハケ（7～9本/cm）。 内面：ナナメハケ（8本/cm）。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を含む。0.5mm大の黒色粒をわずかに含む。 焼成：良好・土師質	外面：明黄褐色 (10YR7/6) 内面：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 断面：灰色 (7.5Y6/1)
29	T2	円筒 口縁部	口縁部高：8.5	20と同一個体か。 外面：タテハケ（9本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（8本/cm）。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：明黄褐色 (10YR6/6) 内面：にぶい黄橙色 (10YR6/4) 断面：灰黄褐色 (10YR6/2)
30	T3	円筒 口縁部	口縁部高：9.5	透かし孔あり。 外面：タテハケ（8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（単位不明瞭）。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を含む。1～3mm大の赤色粒を含む。 焼成：不良・土師質	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：浅黄橙色 (7.5YR8/6) 断面：灰白色 (5Y7/1)

第2章 内出1号墳

番号	出土地点	種類・器種	法量 (cm)	形態・技法上の特徴	胎土・焼成等の特徴	色 調
31	T10	円筒 段部	-	28と同一個体か。 外面：タテハケ（7本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：タテハケ（7本/cm）。突帯の内面はヨコナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を含む。0.5mm大の黒色粒をわずかに含む。 焼成：良好・土師質	外面：灰色 (5Y5/1) 内面：橙色 (7.5YR7/6) 断面：灰色 (5Y6/1)
32	T6	円筒 段部	-	ヘラ記号あり。透かし孔あり。 外面：タテハケ（8～9本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：タテハケ（8本/cm）。タテハケ後、斜方向の強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：にぶい褐色 (7.5YR6/3) 内面：にぶい褐色 (7.5YR6/3) 断面：灰黄褐色 (10YR6/2)
33	T1	円筒 段部	-	透かし孔あり。 外面：タテハケ（9本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ナナメハケ（9本/cm）。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：にぶい黄橙色 (10YR6/4) 内面：黄灰色 (2.5Y6/1) 断面：黄灰色 (2.5Y6/1)
34	T7	円筒 段部	-	透かし孔あり。 外面：タテハケ（7～9本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：タテハケ（7本/cm）。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 2mm大の赤色粒を含む。 焼成：良好・土師質	外面：浅黄橙色 (10YR8/4) 内面：浅黄橙色 (7.5YR8/4) 断面：灰黄色 (2.5Y7/2)
35	T10	円筒 段部	-	透かし孔あり。36と同一個体か。 外面：タテハケ（5～8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：上の段部はナナメハケ（5～6本/cm）。突帯の内面は指圧痕。下の段部は斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 0.5～3mm大の黒色粒を含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6) 断面：灰色 (5Y5/1)
36	T10	円筒 段部	-	35と同一個体か。 外面：タテハケ（5～6本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～3mm大の石英・長石を含む。 0.5～2mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：灰黄色 (2.5Y6/2) 断面：灰黄色 (2.5Y6/2)
37	T6	円筒 口縁部	口縁部高：10.0	ヘラ記号あり。透かし孔あり。 外面：タテハケ（9本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土：1～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明黄褐色 (10YR7/6) 内面：明黄褐色 (10YR7/6) 断面：にぶい黄橙色 (10YR7/4)
38	T2	円筒 口縁部から 段部	口縁部高：9.5	ヘラ記号あり。透かし孔あり。 外面：タテハケ（9本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6) 断面：褐灰色 (7.5YR5/1)
39	T3	円筒 口縁部	-	40と同一個体か。 外面：タテハケ（8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6) 断面：にぶい橙色 (7.5YR6/4)
40	T3	円筒 段部	-	透かし孔あり。39と同一個体か。 外面：タテハケ（5～6本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。突帯の内面にユビナデ。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：橙色 (7.5YR7/6) 断面：褐灰色 (10YR5/1)
41	T6	円筒 段部	-	外面：タテハケ（8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：1～5mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (5YR7/6) 内面：灰褐色 (7.5YR5/2) 断面：にぶい黄橙色 (10YR6/4)
42	T3	円筒 口縁部？	-	ヘラ記号あり。 外面：タテハケ（6本/cm）。 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：明赤褐色 (5YR5/6) 内面：暗灰黄色 (2.5Y5/2) 断面：暗灰黄色 (2.5Y5/2)
43	T2 墓輪列	円筒 第二段から 基底部	底径：14.2 底部高：11.0 段幅：9.5～10.0 (1周)	透かし孔あり。 外面：タテハケ（10本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：黄褐色 (10YR5/8) 内面：黄褐色 (10YR5/8)
44	T2 墓輪列	円筒 第二段から 基底部	底径：15.6 底部高：11.0 段幅：10.0 ～11.0 (1周)	透かし孔あり。 外面：タテハケ（8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～15mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明褐色 (7.5YR5/6) 内面：明褐色 (7.5YR5/6)
45	T7 墓輪列	円筒 基底部	底径：13.9 底部高：11.0 (1周)	透かし孔あり。 外面：タテハケ（11本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・須恵質	外面：黄褐色 (2.5Y5/3) 内面：にぶい黄褐色 (10YR5/4)
46	T7 墓輪列	円筒 基底部	底径：16.5 底部高：10.0 (1周)	透かし孔あり。 外面：ナナメハケ（4～5本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 0.5mm大の黒色粒を多量に含む。0.5～1mm大の赤色粒をわずかに含む。 焼成：不良・土師質	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/4) 内面：明褐色 (7.5YR5/6)
47	T6 墓輪列	円筒 基底部	底径：15.0 底部高：15.5 (1周)	透かし孔あり。 外面：タテハケ（8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ？。	胎土：0.5～3mm大の石英・長石を多く含む。 0.5～1mm大の赤色粒をわずかに含む。 焼成：不良・土師質	外面：明黄褐色 (10YR6/6) 内面：明黄褐色 (10YR6/6)
48	T6 墓輪列	円筒 基底部	底径：14.4 底部高：10.5 (1周)	透かし孔あり。 外面：タテハケ。突帯は強いヨコナデ？。 内面：斜方向の強いナデ。突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6)
49	T10	円筒 基底部	底径：18.8 底部高：11.0 (1/6周)	透かし孔あり。 外面：タテハケ（9本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～5mm大の石英・長石を多く含む。 0.5mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6) 断面：灰色 (7.5Y6/1)
50	T10	朝顔 口縁部から 肩部	口径：41.0 口縁部高：9.5 受部高：7.5 肩部高：9.5 段部径：21.2 (1周)	ヘラ記号あり。透かし孔あり。 外面：口縁部はナナメハケ後タテハケ（5～8本/cm）。 肩部上半にヨコハケ（7本/cm）。肩部下半にナナメハケ（8本/cm）。その他はタテハケ（7～8本/cm）。 突帯は強いヨコナデ。 内面：口縁部と受部はヨコハケ（7本/cm）。肩部以下は斜方向の強いナデ。中位突帯・頸部突帯の内面はヨコナデ。段部突帯の内面に指圧痕。	胎土：0.5～3mm大の石英・長石を多く含む。 0.1～1mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：不良・土師質（部分的に須恵質）	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6) 断面：灰色 (5Y5/1)
51	T3	朝顔 口縁部	-	外面：タテハケ（7本/cm）。 内面：ヨコハケ（7本/cm）。	胎土：1mm大の石英・長石を含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：橙色 (7.5YR6/6) 断面：にぶい黄褐色 (10YR5/3)
52	T10	朝顔 口縁部	-	外面：タテハケ（9本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：斜方向の強いナデ。突帯の内面はナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 0.5～1mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明赤褐色 (2.5YR5/8) 内面：明赤褐色 (2.5YR5/8) 断面：明赤褐色 (2.5YR5/8)
53	T7	朝顔 受部	-	外面：タテハケ（5～8本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：ハケ（6本/cm）。突帯の内面はヨコナデ。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 1.5mm大の赤色粒をわずかに含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR6/8) 内面：橙色 (7.5YR6/8) 断面：灰色 (5Y6/1)
54	T1	朝顔 肩部	段部径：20.2 肩部高：7.5 (1/6周)	透かし孔あり。 外面：タテハケ（6本/cm）。突帯は強いヨコナデ。 内面：強いヨコナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 0.5～1mm大の赤色粒を含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：橙色 (7.5YR7/6) 断面：灰黄褐色 (10YR6/2)

番号	出土地点	種類・器種	法量 (cm)	形態・技法上の特徴	胎土・焼成等の特徴	色 調
55	T6	朝顔 肩部	-	外面：ヨコハケ(Bd種・8本/cm)。突帯は強いヨコナデ。 内面：受部はナナメハケ(8本/cm)後ヨコナデ。斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 0.5～1mm大の黒色粒を含む。 焼成：良好・須恵質	外面：灰色 (5Y6/1) 内面：にぶい黄褐色 (10YR7/4) 断面：灰色 (5Y6/1)
56	T9	朝顔 肩部	-	外面：タテハケ(6本/cm)。突帯は強いヨコナデ。 内面：受部はナナメハケ？。突帯の内面はヨコナデ。 肩部は斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 2～5mm大の赤色粒を含む。 焼成：良好・土師質	外面：灰黄褐色 (10YR6/2) 内面：にぶい黄褐色 (10YR7/4) 断面：灰色 (7.5Y6/1)
57	T9	朝顔 肩部	-	55と同一個体か。 外面：タテハケ(5本/cm)。突帯は強いヨコナデ。 内面：肩部はヨコナデ。段部は斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 0.5mm大の黒色粒を含む。 焼成：良好・土師質	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 断面：灰色 (7.5Y6/1)
58	T9	朝顔 肩部	-	57と同一個体か。 外面：肩部はナナメハケ(5本/cm)。突帯は強いヨコナデ。段部はタテハケ(6本/cm) 内面：斜方向の強いナデ。	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 1mm大の赤色粒をわずかに含む。0.5mm大の黒色粒をわずかに含む。 焼成：良好・土師質	外面：明黄褐色 (10YR7/6) 内面：橙色 (7.5YR7/6) 断面：灰色 (7.5Y6/1)
59	T7	蓋 飾り板	-	60・61と同一個体か。 ハケメ(7本/cm)。	胎土：0.1～3mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR6/8) 断面：にぶい黄褐色 (10YR5/3)
60	T7	蓋 飾り板	-	59・61と同一個体か。 ハケメ(6～8本/cm)。	胎土：0.1～5mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR6/8) 断面：にぶい黄褐色 (10YR5/3)
61	T7	蓋 飾り板	-	59・60と同一個体か。 ハケメ(6本/cm)。	胎土：0.5～3mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：橙色 (7.5YR6/8) 断面：にぶい黄褐色 (10YR5/3)
62	T2	蓋 飾り板	-	ハケメ(9～10本/cm)。	胎土：0.5～1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：赤褐色 (5YR4/6) 断面：橙色 (5YR6/8)
63	T1	蓋 飾り板	-	ハケメ(7～10本/cm)。	胎土：0.1～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明赤褐色 (2.5YR5/6) 断面：灰褐色 (7.5YR4/2)
64	T3	蓋 飾り板・ 飾り板受部	飾板受部径：15.1 (ほぼ1周)	飾板はハケメ(7本/cm)。 飾板受部は粘土紐積上げで、内外面にナデ。	胎土：0.1～5mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：橙色 (5YR6/6) 断面：にぶい黄色 (2.5Y6/4)
65	T7	蓋 軸受部	軸受部径：13.9 (1/3周)	67と同一個体か。 外面：口縁部に突帯、その下はタテハケ(10本/cm)。 内面：口縁部に沿って指圧痕。そのほかはナデ。	胎土：0.1～1mm大の石英・長石を多く含む。 0.1mm大の赤色粒をわずかに含む。 焼成：良好・土師質	外面：褐灰色 (7.5YR5/1) 内面：明赤褐色 (2.5YR5/8) 断面：明赤褐色 (2.5YR5/8)
66	T9	蓋 軸受部	軸受部径：14.9 (1/8周)	外面：口縁部に突帯、その下はタテハケ(8本/cm)。 内面：ナデ	胎土：0.1～5mm大の石英・長石を多く含む。 0.5～1mm大の赤色粒をわずかに含む。 焼成：不良・土師質	外面：明赤褐色 (2.5YR5/6) 内面：明赤褐色 (2.5YR5/6) 断面：明赤褐色 (2.5YR5/6)
67	T7	蓋 笠部	-	65と同一個体か。 軸受部下端突帯がある。笠上半部外面はタテハケ(8本/cm)。 笠上半部内面に指圧痕。笠下半部の剥離面にタテハケ(10本/cm)。その他はナデ	胎土：0.1～3mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：褐灰色 (5YR4/1) 内面：橙色 (2.5YR6/8) 断面：橙色 (2.5YR6/8)
68	T1	蓋 笠下半部	笠部径：34.0 (1/8周)	笠部先端を肥厚。外面にタテハケ(10本/cm)。台部との剥離面にハケメ(9本/cm)。その他はナデ	胎土：0.1～1mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：明赤褐色 (2.5YR5/8) 内面：明赤褐色 (2.5YR5/8) 断面：明赤褐色 (2.5YR5/8)
69	T1	蓋 笠下半部	-	笠部先端を肥厚。外面にタテハケ(11本/cm)。 台部との剥離面にタテハケ(8本/cm)。その他はナデ	胎土：0.1～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：にぶい赤褐色 (5YR5/3) 内面：にぶい赤褐色 (5YR5/3) 断面：褐灰色 (5YR4/1)
70	T7	蓋 笠部	-	笠部先端を肥厚。外面にハケメ(7本/cm)。台部外 面にタテハケ(8本/cm)。その他はナデ	胎土：0.1～2mm大の石英・長石を多く含む。 1mm大の赤色粒をわずかに含む。 焼成：不良・土師質	外面：明赤褐色 (2.5YR5/6) 内面：橙色 (2.5YR6/8) 断面：褐灰色 (7.5YR4/1)
71	T9	蓋 笠部	-	笠部先端を肥厚。外面にタテハケ(6～7本/cm)。 その他はナデ	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 0.5～2mm大の赤色粒をわずかに含む。 焼成：良好・土師質	外面：にぶい赤褐色 (5YR4/4) 内面：にぶい赤褐色 (5YR4/4) 断面：灰オリーブ色 (5Y3/2)
72	T3	蓋 台部	-	外面にタテハケ(5本/cm)。内面は斜方向のナデ	胎土：1～2mm大の石英・長石を多く含む。 0.5～1mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：良好・土師質	外面：にぶい赤褐色 (5YR5/3) 内面：褐灰色 (7.5YR4/1) 断面：黑褐色 (7.5YR3/1)
73	T10	家? 櫛木 or 棚木?	-	ナデ	胎土：0.5～2mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：橙色 (5YR6/8) 断面：橙色 (5YR6/8)
74	T10	家? 壁体?	-	外面：タテハケ(8～9本/cm)。 内面：ナデ	胎土：0.1～2mm大の石英・長石を多く含む。 1mm大の黒色粒を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：橙色 (5YR6/8) 内面：橙色 (5YR6/8) 断面：灰オリーブ色 (5YR5/2)
75	T1	不明	-	ヘラケズリが強いヨコナデ	胎土：0.5～3mm大の石英・長石を多く含む。 0.1～0.5mm大の黒色粒を含む。 焼成：不良・土師質	外面：明赤褐色 (5YR5/8) 断面：黄褐色 (2.5Y5/4)
76	T9	不明	-	二条の線刻？あり。 ヘラケズリが強いヨコナデ	胎土：0.5～3mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明赤褐色 (5YR5/8) 断面：灰黄色 (2.5Y6/2)
77	T9	不明	-	二条の線刻？あり。 ヘラケズリが強いヨコナデ	胎土：0.5～3mm大の石英・長石を多く含む。 焼成：不良・土師質	外面：明赤褐色 (5YR5/1) 断面：にぶい黄色 (2.5Y6/4)

付 編

内出1号墳出土遺物の胎土分析

岡山理科大学 白石 純

1 はじめに

この胎土分析では、内出1号墳から出土した初期須恵器の胎土分析を実施し、これらの生産地や胎土の特徴について検討した。分析は蛍光X線分析法で行った。

2 分析方法・試料

蛍光X線分析法は、胎土の元素濃度を測定し、その元素濃度から分析した須恵器の胎土的差異について検討する方法である。測定した元素は、 SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 、 RbO_2 、 SrO 、 ZrO_2 の13元素である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：エレメントアライザー JSX-3203EV（日本電子）を使用した。

測定条件：X線照射径3mm、電流1.00mA、電圧30kV、測定時間300秒、測定室は真空の条件で測定した。

定量値は、ファンダメンタル・パラメーター法により算出した。また、毎回の定量値の再現性があることを確認するため、地質調査所の標準試料 JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JB-1a（玄武岩）の3試料の定量値を求めて、装置の安定性を確認している。

測定試料：分析試料は、試料表面の汚れを除去後、乾燥した試料を乳鉢（タンクスティンカーバイト製）で粉末（100～200メッシュ）にしたものを加圧成形機で約10tの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる元素を横軸と縦軸にとり、散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。

分析試料は、第1表に示している内出1号墳のトレンチ2とトレンチ10から出土した須恵器の杯、穂、高杯、甕の24点である。また、生産地の比較須恵器としては総社市奥ヶ谷窯跡、大阪府陶邑窯跡群、韓国の慶尚南道地方窯跡と古墳出土陶質土器である。

3 分析結果

この分析では CaO （酸化カルシウム）、 K_2O （酸化カリウム）、 Rb_2O （ルビジウム）、 SrO （ストロンチウム）の4元素で散布図を作成し生産地推定を行った。

第1・2図は生産地窯跡（総社市奥ヶ谷窯跡、大阪府陶邑窯跡群、韓国の慶尚南道地方窯跡と古墳出土陶質土器）の領域を示した散布図に、内出1号墳出土の須恵器をプロットした図である。この両散布図から内出1号墳出土の須恵器は、ほぼ一つのグループにまとまる傾向にある。

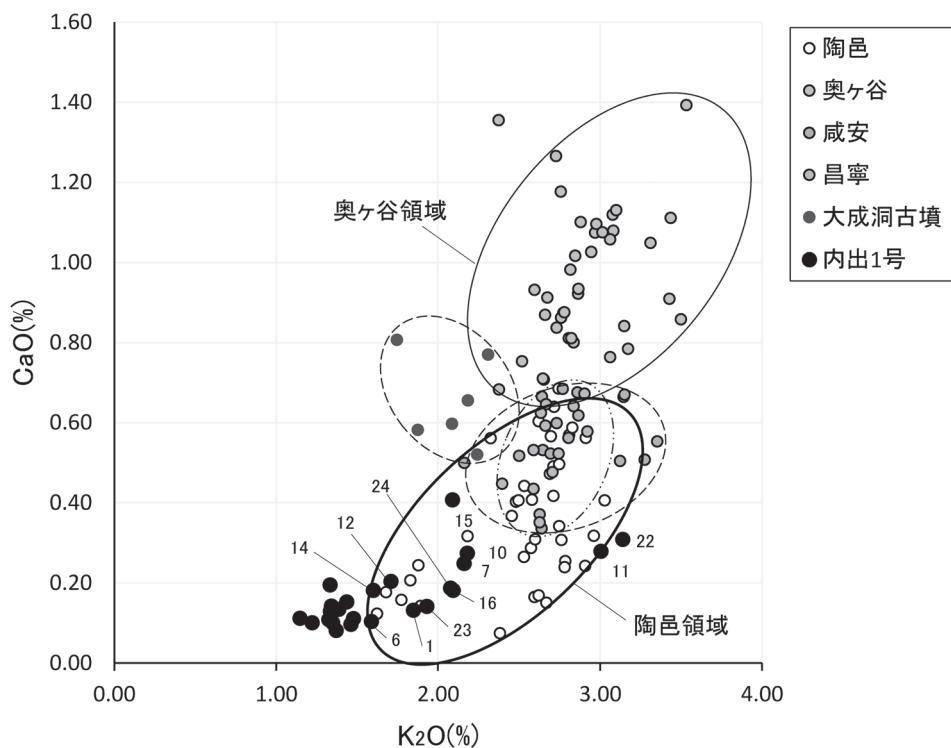
第1図では、陶邑領域に試料番号1（高杯）、6（杯身）、7（壺か穂）、10（高杯）、11（穂）、12（穂）、14（高

杯)、15(甕)、16(甕)、22(甕)、23(甕)、24(甕)の12点が入り、第2図では、陶邑領域に5(杯身)、7(壺か穀)、10(高杯)、11(穀)、15(甕)、16(甕)、22(甕)、23(甕)の8点が入った。このように内出1号墳の須恵器は陶邑領域に1/2から1/3ほどが分布している。

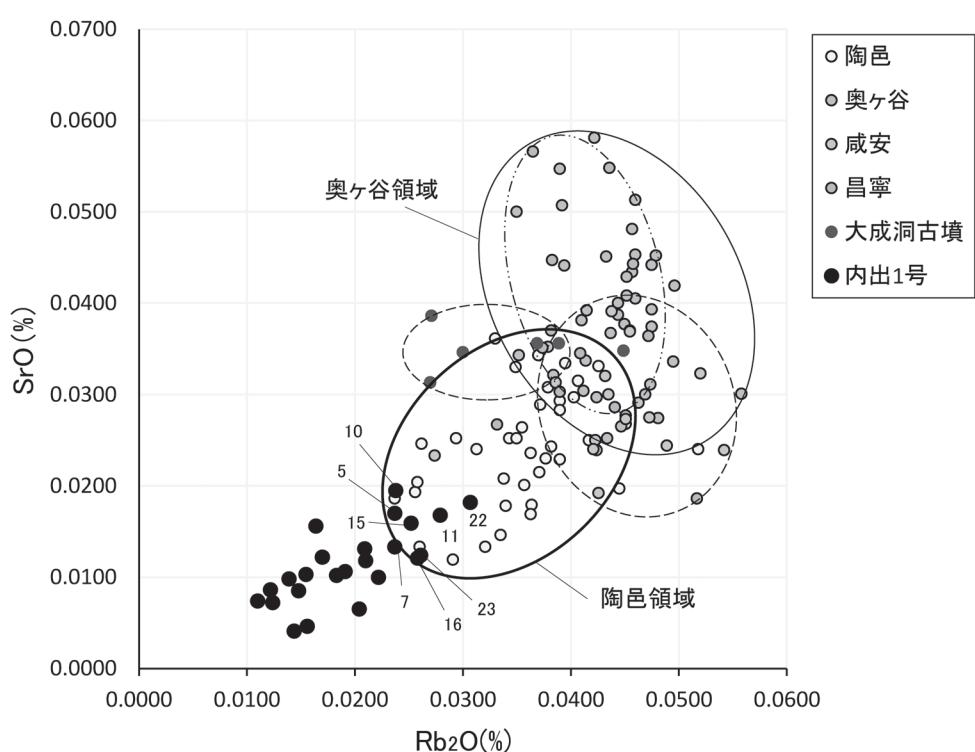
以上、内出1号墳出土のすべての須恵器は陶邑産と推定できないが、陶邑領域に入らなかったものも陶邑領域に近い分布であった。また、これまでの分析では陶邑産の須恵器には、CaO、K₂O、Rb₂O、SrOの各元素の濃度(%)が少ない傾向があることがわかっている。なお、今後の課題として生産地である陶邑窯跡群内のほかの窯跡や韓国の全羅道の須恵器を分析し産地推定を行う必要がある。

第1表 内出1号墳出土須恵器の胎土分析結果(%)

分析番号	出土位置		器種	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	掲載番号
	トレンチ	層位																
1	10	大甕周辺	高杯	67.43	1.22	18.97	9.80	0.02	0.00	0.13	0.25	1.85	0.21	0.0210	0.0118	0.0054	0.0819	10
2	2	流土中	杯身	68.23	1.14	18.82	9.40	0.01	0.00	0.20	0.51	1.33	0.26	0.0139	0.0098	0.0023	0.0718	4
3	2	流土中	杯身	67.41	1.17	19.44	9.90	0.01	0.00	0.10	0.26	1.35	0.25	0.0155	0.0103	0.0031	0.0810	5
4	2	南半	杯身	68.22	1.18	18.93	9.79	0.00	0.00	0.08	0.05	1.37	0.26	0.0124	0.0072	0.0048	0.0926	1
5	2	流土中	杯身	68.35	1.17	18.42	9.86	0.02	0.00	0.10	0.21	1.46	0.29	0.0237	0.0170	0.0058	0.0764	2
6	2	流土中	杯身	67.15	1.19	19.12	10.18	0.02	0.00	0.10	0.26	1.59	0.27	0.0170	0.0122	0.0008	0.0976	3
7	2	流土中	壺か穀	61.04	1.20	20.88	13.84	0.01	0.00	0.25	0.26	2.16	0.26	0.0237	0.0133	0.0000	0.0700	11
8	2	流土中	高杯	68.62	1.17	18.62	9.70	0.01	0.00	0.14	0.02	1.34	0.27	0.0110	0.0074	0.0061	0.0852	9
9	2	流土中	高杯(蓋)	67.84	1.25	19.11	9.94	0.01	0.00	0.11	0.24	1.15	0.24	0.0122	0.0086	0.0051	0.0790	8
10	2	流土中	高杯	62.61	1.28	21.13	11.31	0.01	0.00	0.27	0.82	2.18	0.26	0.0238	0.0195	0.0013	0.0913	7
11	2	流土中	穀	64.41	1.38	21.24	8.90	0.01	0.00	0.28	0.46	3.01	0.21	0.0279	0.0168	0.0024	0.0586	12
12	2	流土中	穀	67.10	1.35	20.34	8.94	0.01	0.00	0.20	0.09	1.71	0.15	0.0222	0.0100	0.0006	0.0793	13
13	2	流土中	穀	67.57	1.40	20.84	8.37	0.00	0.00	0.13	0.00	1.38	0.18	0.0164	0.0156	0.0044	0.0719	14
14	2	流土中	高杯	66.77	1.31	20.66	9.17	0.01	0.00	0.18	0.09	1.60	0.09	0.0191	0.0106	0.0030	0.0802	6
15	10	大甕周辺	甕	63.15	1.31	20.73	11.74	0.02	0.00	0.41	0.26	2.09	0.17	0.0252	0.0159	0.0044	0.0686	15
16	10	流土中	甕	63.19	1.29	20.75	11.70	0.01	0.00	0.18	0.51	2.09	0.16	0.0258	0.0121	0.0038	0.0694	16
17	10	墳端	大甕	64.35	1.42	20.62	11.60	0.01	0.00	0.11	0.10	1.48	0.15	0.0204	0.0065	0.0053	0.1103	
18	2	流土中	杯蓋	70.32	1.10	17.82	8.95	0.02	0.00	0.11	0.02	1.32	0.23	0.0148	0.0085	0.0010	0.0828	
19	2	流土中	杯蓋	66.26	1.23	20.58	10.40	0.00	0.00	0.10	0.00	1.22	0.11	0.0183	0.0102	0.0002	0.0784	
20	2	流土中	高杯	67.46	1.17	19.53	10.03	0.01	0.00	0.13	0.02	1.33	0.20	0.0144	0.0041	0.0008	0.0902	
21	2	流土中	高杯	67.44	1.26	19.38	10.02	0.01	0.00	0.15	0.04	1.43	0.15	0.0156	0.0046	0.0009	0.0791	
22	2	流土中	甕	65.92	1.30	19.31	9.50	0.02	0.02	0.31	0.21	3.14	0.16	0.0307	0.0182	0.0040	0.0651	
23	2	流土中	甕	65.26	1.27	19.71	11.06	0.00	0.00	0.14	0.37	1.93	0.14	0.0261	0.0124	0.0054	0.0801	
24	2	流土中	甕	65.99	1.32	19.53	10.42	0.00	0.00	0.19	0.23	2.08	0.10	0.0209	0.0131	0.0080	0.1108	



第1図 内出1号墳出土須恵器の産地推定



第2図 内出1号墳出土須恵器の産地推定

図 版

1 調査地全景(北から)



2 トレンチ1 西壁断面

3 トレンチ2
全景(北から)

図版2 西元浜貝塚(2)



1 トレンチ2
西壁深掘断面



2 トレンチ3 北壁深掘



3 トレンチ4
北壁断面(東から)



1 トレンチ5北壁断面

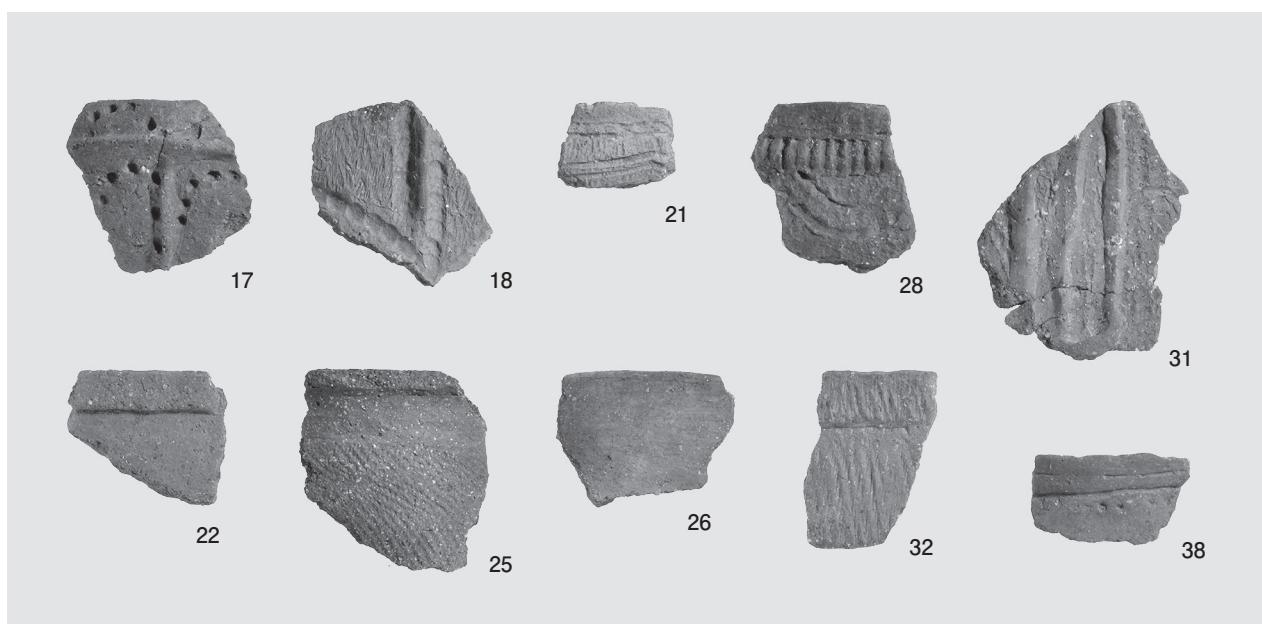
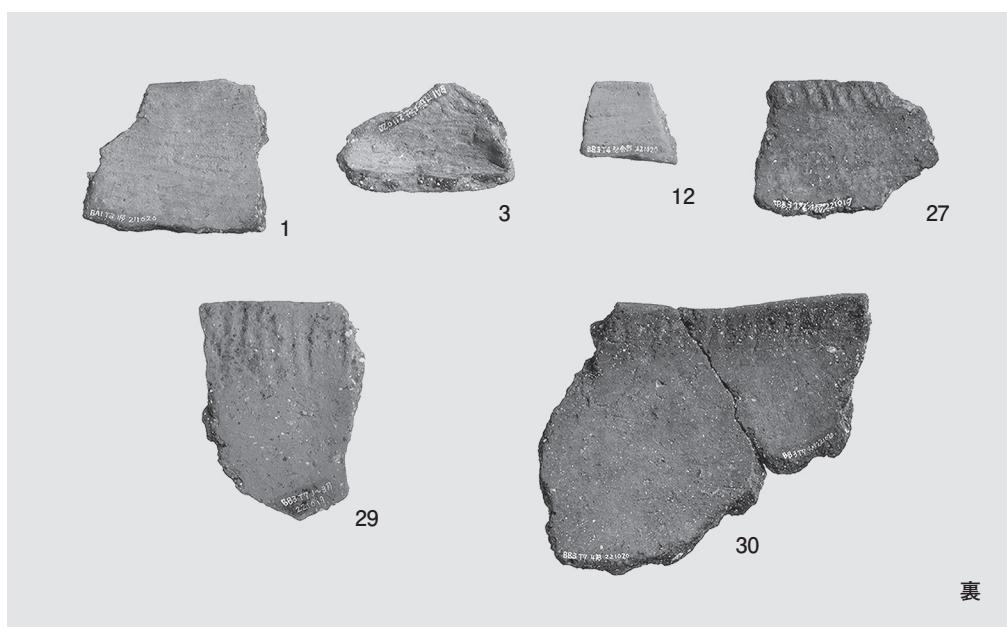
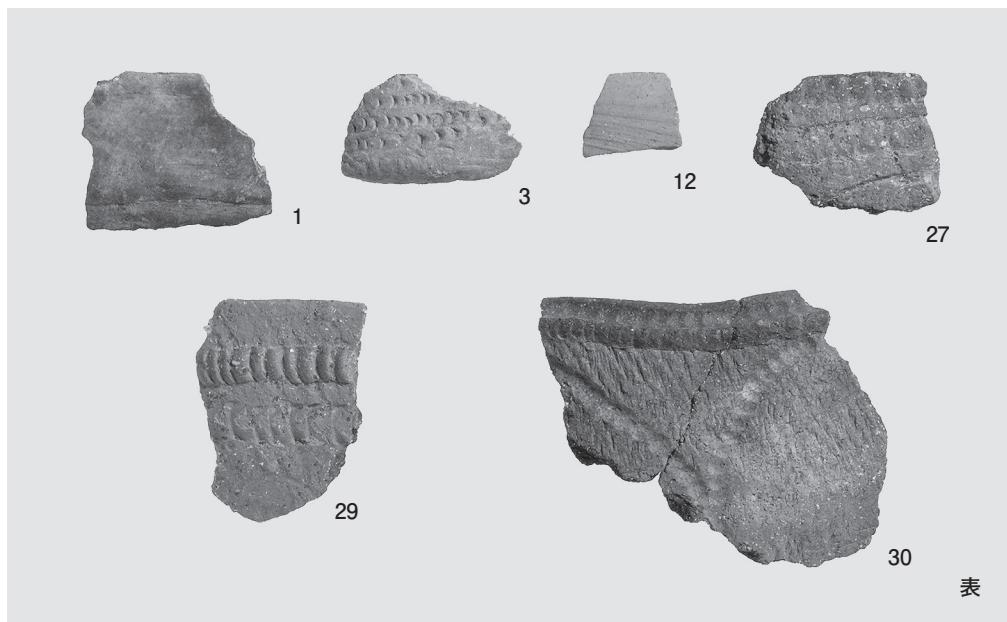


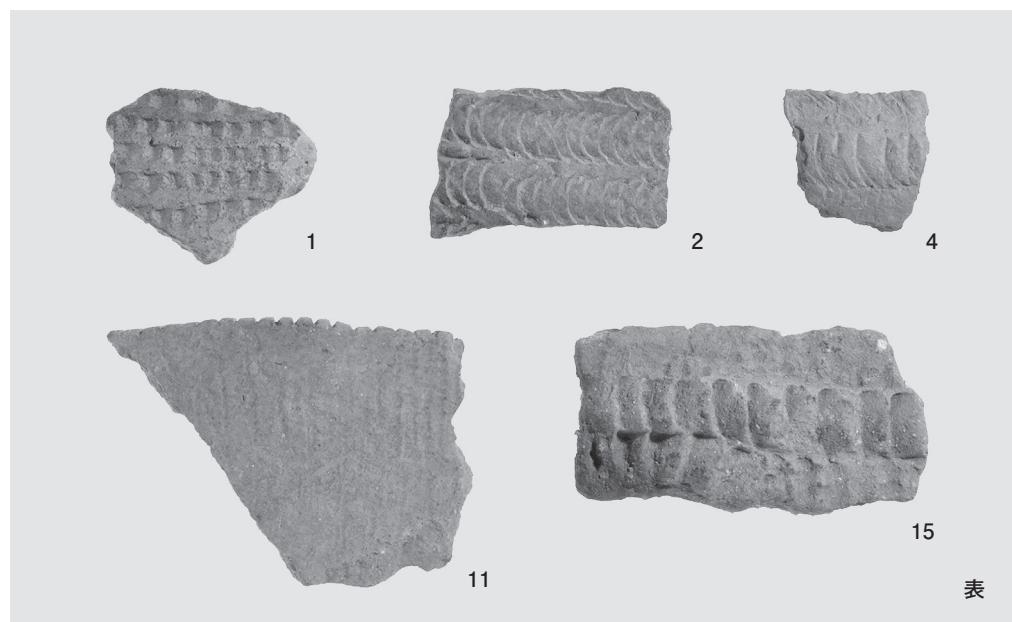
2 トレンチ6北壁断面
(南西から)



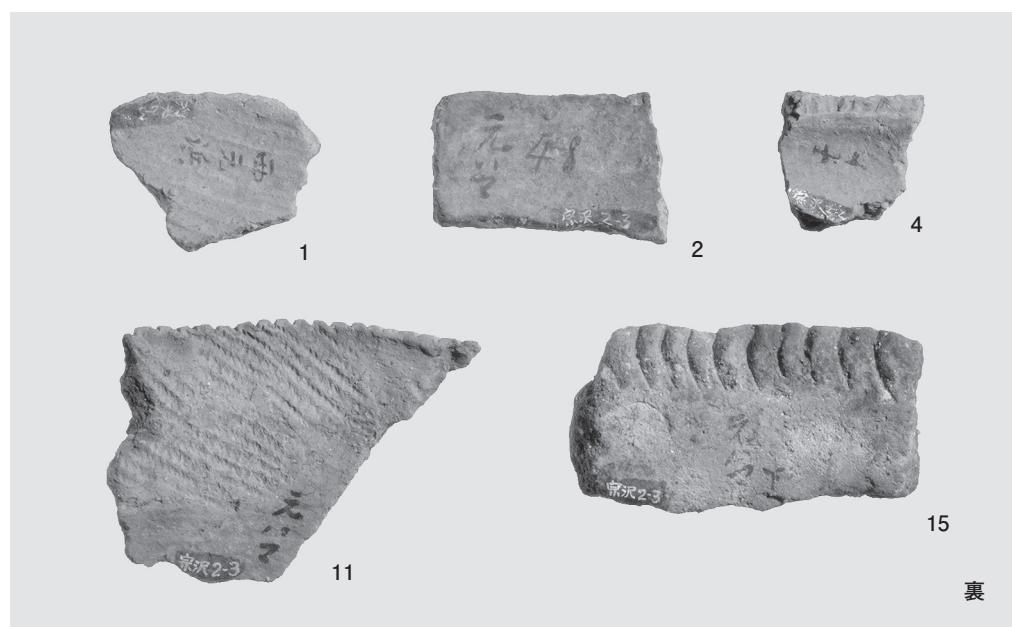
3 トレンチ7
西壁断面(南から)

図版 4 西元浜貝塚 出土遺物 (1)

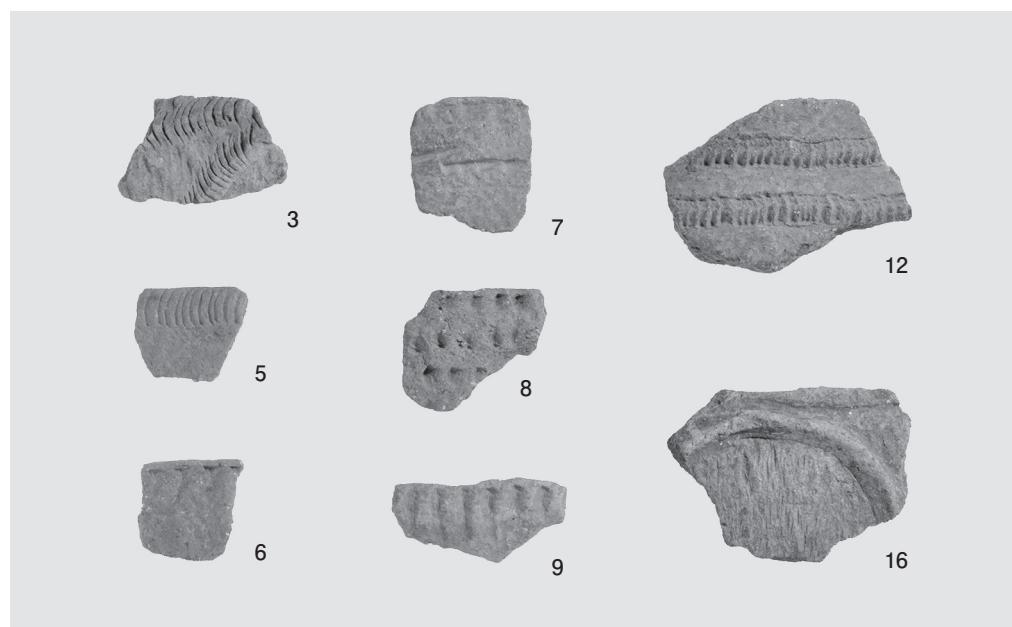




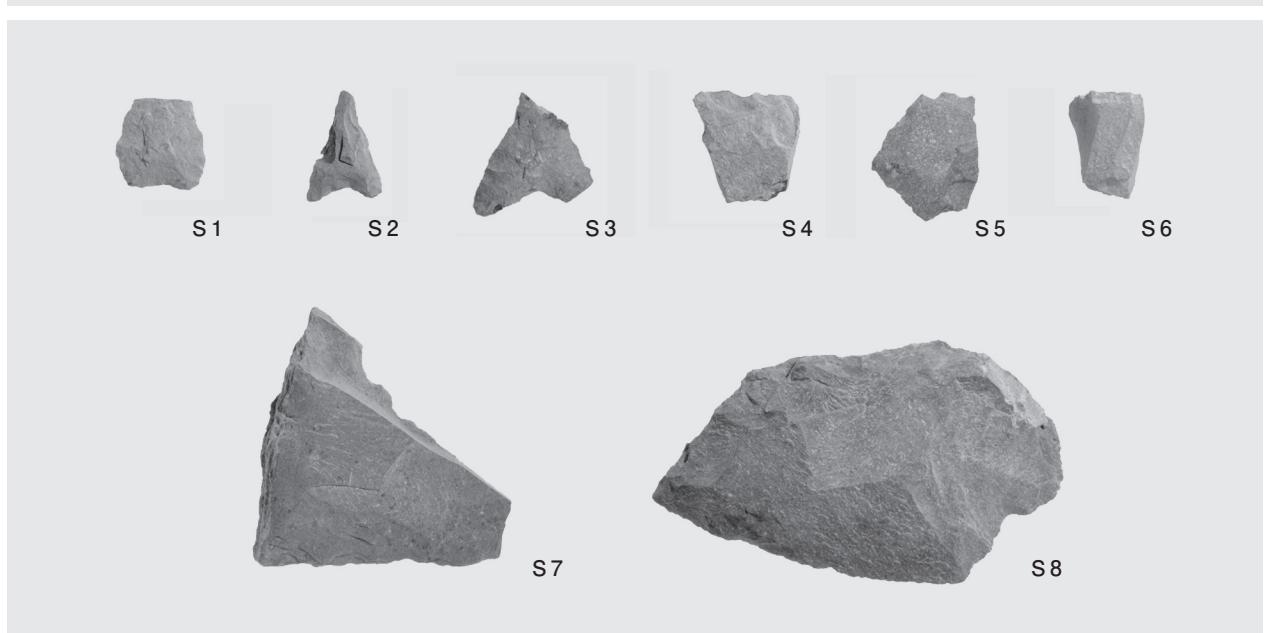
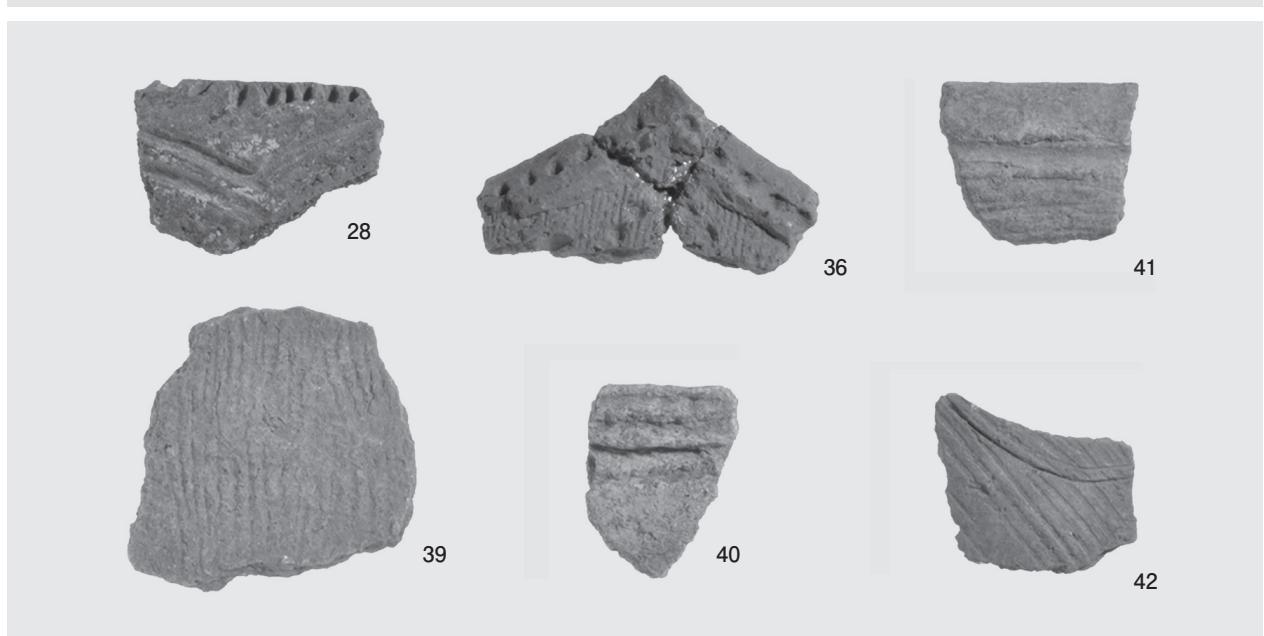
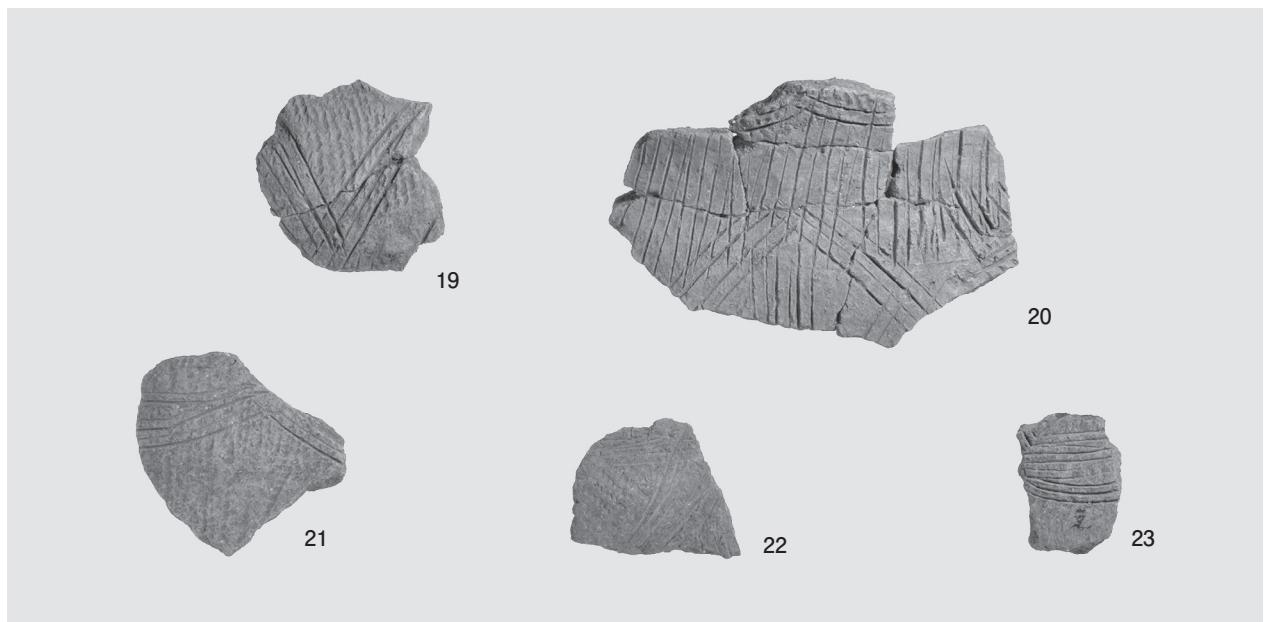
表



裏



図版 6 西元浜貝塚 出土遺物 (3)



1 調査前の全景
(測量時・東から)



2 トレンチ1全景
(南西から)



3 トレンチ2埴輪列・
葺石検出状況
(南から)



図版8 内出1号墳(2)



1 トレンチ3
葺石検出状況
(東から)



2 トレンチ3
北壁(埴輪列付近)



3 トレンチ3
北壁(周溝付近)



1 トレンチ4 東壁



2 トレンチ4
竪穴式石槨（南から）



3 トレンチ4
竪穴式石槨東小口

図版 10 内出 1 号墳 (4)



1 トレンチ 5 北壁



2 トレンチ 5 亂掘孔



3 トレンチ 6 北壁
(葺石付近)



1 トレンチ6北壁
(周溝付近)



2 トレンチ7
葺石・埴輪検出状況
(北東から)



3 トレンチ7東壁
(周溝付近)

図版 12 内出 1 号墳 (6)



1 トレンチ 8 全景
(南西から)



2 トレンチ 10
大型甕出土状況
(南から)



3 トレンチ 10 東壁
(北半部)

内出1号墳 出土遺物(1) 図版13



15



16



12



13



43



44

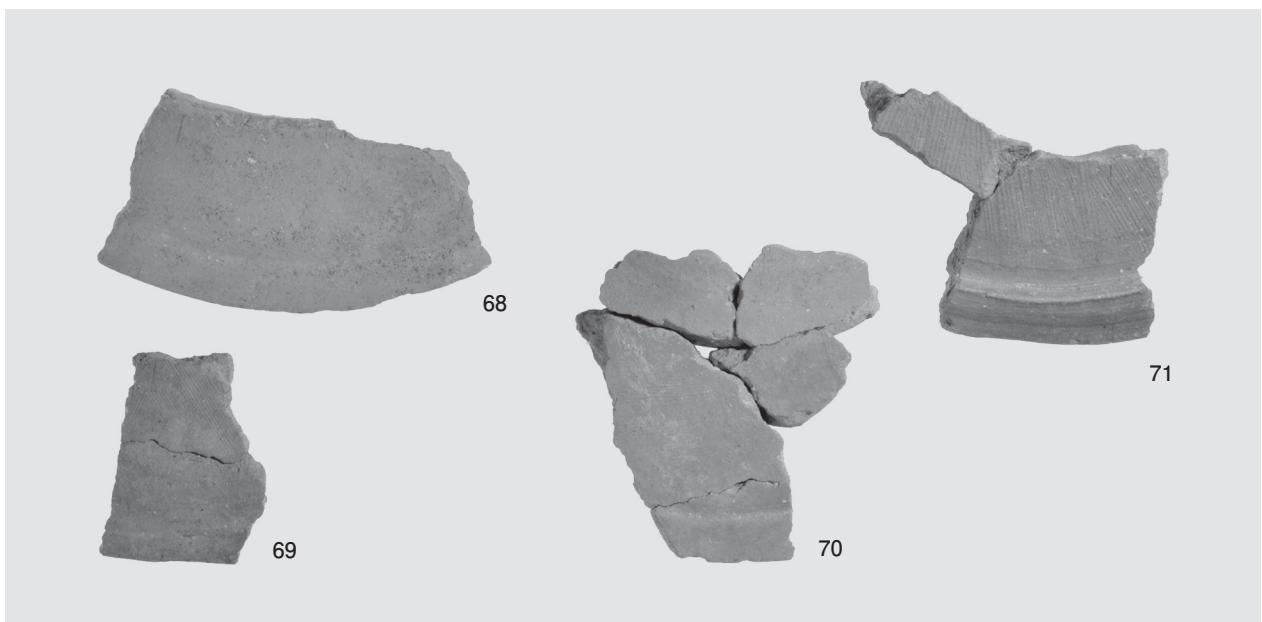
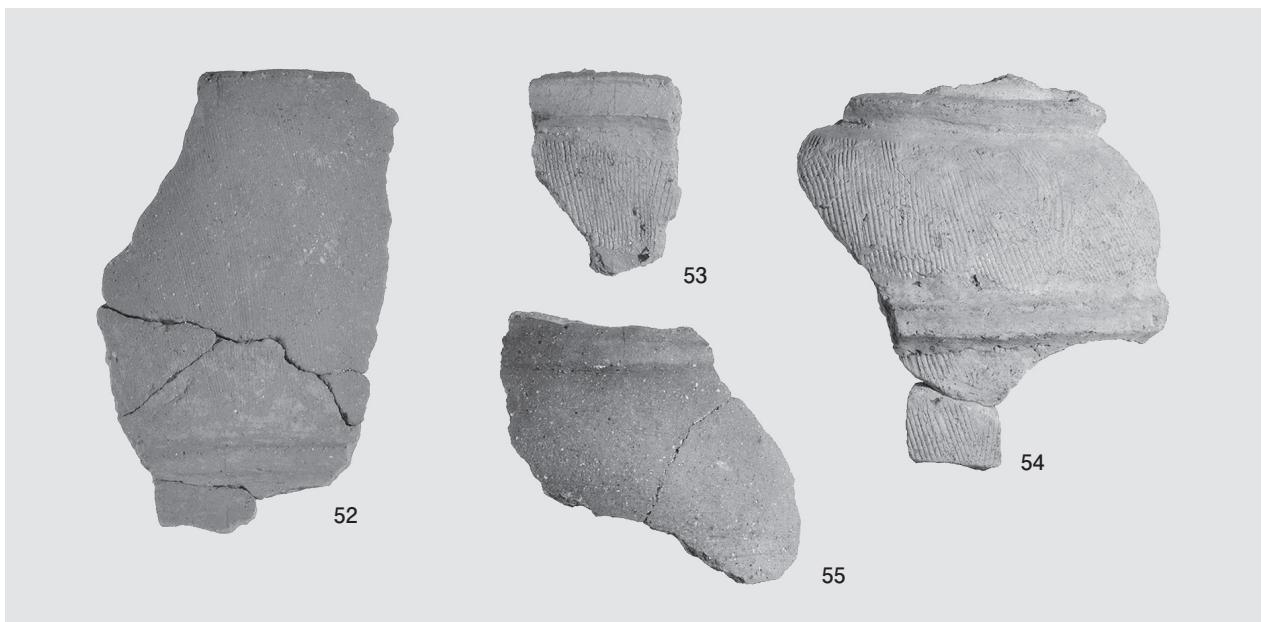
図版 14 内出 1 号墳 出土遺物 (2)



内出1号墳 出土遺物(3) 図版15



図版 16 内出 1 号墳 出土遺物 (4)



報告書抄録

ふりがな	にしもとはまかいづか うちいでいちごうふん							
書名	西元浜貝塚 内出1号墳							
副書名								
卷次								
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	小野雅明・藤原好二・鍵谷守秀・白石 純							
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター							
所在地	〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地 TEL086-454-0600							
発行年月日	令和6年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
にしもとはまかいづか 西元浜貝塚	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 たましまくろさき 玉島黒崎	市町村	遺跡番号	34° 32' 04"	133° 38' 24"	20211019～ 20211022 20221018～ 20221022	18 m ² 15 m ²	遺跡範囲詳 細確認調査
うちいでいちごうふん 内出1号墳	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 まびちょうしもにま 真備町下二万	33202	15-001	34° 32' 04"	133° 38' 24"	20211026～ 20211126 20221025～ 20221118 20230516～ 20230607	20 m ² 24 m ² 16 m ²	遺跡範囲詳 細確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西元浜貝塚	貝塚	縄文		縄文土器・石器				
内出1号墳	古墳	古墳	堅穴式石槨・ 葺石・埴輪列・ 周溝	須恵器・埴輪		天狗山古墳に先行して築造された方墳。		

印刷仕様

紙 質 表紙：サンマット 160kg (PP 張り)
本文：書籍用紙 65kg
図版：マットアート 110kg

編 集 Mac OS 10.14.6 Adobe InDesign CC 14.0.2
Adobe Photoshop CC 20.0.4

使用フォント モリサワ OpenType フォント
(リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・
太ゴ B101・見出ゴ MB31)
ヒラギノ明朝 Pro W3・ヒラギノ角ゴシック Pro W3

製 本 無線綴じ

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第20集 **西元浜貝塚2 内出1号墳**

令和6年3月31日印刷発行

発行 倉敷市教育委員会

編集 倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 倉敷市福田町古新田940番地
TEL 086-454-0600

The Excavation Report
Of
Nisimotohama Shell Mound 2 Uchiide No. 1 Tumulus

Volume 20

Kurashiki
Archaeological Center

March 2024